

第15回 保育実践研究 報告集

令和 3 年 3 月



社会福祉法人 日本保育協会

はじめに

平成18年度からスタートした「保育実践研究」は、おかげさまで本年度、第15回を迎えることが出来ました。

各施設で本研究をご執筆されていた令和2年は、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、従来の保育業務に加えて、感染症対策の一層の強化を講じなければならない状況でしたが、会員各位のご協力もあり、本年度は9件のご応募をいただきました。

関係各位に心より感謝申し上げます。

昨今、保育所や認定こども園等に対する地域の要望が多様化しています。

そのような中、令和2年4月16日、全都道府県に特別措置法に基づく緊急事態宣言が発令され、この間保育施設は休むことなく園児、保護者のために開所し続けました。これにより、国民に保育施設の重要性が再認識されたことと思います。

保育所や認定こども園のあり方が、多くの人々に注目されている今、それぞれの施設において保育の質を高めるために、どのようなことをしているのかが問われます。

保育者が日々の保育実践の中から課題を見つけ、それを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善するというこの「保育実践研究」が、保育の質向上の近道になると考えます。

この事業は、あくまで保育実践の研究について募集したものであり、各施設における保育内容の評価を目的としたものではありません。

会員各位にはより積極的に応募していただけるよう、課題等についてさらに検討を加え、今後の募集に活かしたいと考えています。

内容がより充実していくことを期待し、あわせて積極的に皆様が保育研究を行っていただくことを願っています。

令和3年3月

「保育実践研究」企画審査委員会

第15回「保育実践研究」募集要綱（概要）

1. 目 的

日本保育協会では、保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究を募集します。

応募いただいた研究は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

2. 主 催

社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 応募資格

日本保育協会会員施設の施設長、職員（個人研究、施設内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所等との共同研究を含む）

※委託を受けた外部の講師等は対象外。

4. 部 門

（1）課題研究部門

以下からテーマを選び、課題や取り組みについてまとめてください。なぜそれに関心を持ったのか、それを解決するためにどのような仮説を立てたのか、保育にどのように取り組んだのか、そこからどのような発見、気づきがあったかを、出来るだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスをまとめてください。保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領をもとに、具体的にどのように実践されているかを示す機会としてお考えください。

① 人との関わり

子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために人間関係は大切です。子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

② 遊びと学び

遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

③ 子どもの健康・安全

施設での保健活動、感染症対策、事故防止対策、防災等の危機対応などについて、具体的な取り組みの内容をお寄せください。

（2）実践報告部門

テーマは自由です。下記の例に限らず、幅広いテーマで課題や取り組みについてまとめてください。

- （例）
- 施設での実践事例（特別な配慮が必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、保育環境向上のための取り組み（物的、人的）、入所（園）の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）
 - 人材育成の事例（園内研修の取り組み、研修を職員間で活かす取り組みなど）
 - 地域における公益的な取組の事例（子育て家庭への支援・地域との連携など）
 - 災害への対応（防災計画の策定等）

5. 審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

第15回「保育実践研究」入賞作一覧

○最優秀賞

該当なし

○優秀賞

- ・ 課題研究部門①人とのかかわり
子どもと関係性の変化 ―宇宙への興味の広がりを通して―
橘 南、浅香 聡彦（石川県・大徳学園）
- ・ 課題研究部門②遊びと学び
日常保育を大切にした行事の実践 ―発表会の改革を通じて―
荒井 祐子（千葉県・布佐宝保育園）
- ・ 自由研究部門
食事に課題がある子どもの取り組み
坂本 向子（福岡県・青葉やまと保育園）

○研究奨励賞

- ・ 自由研究部門
雪の体験を思いっきり楽しもう！！
辺見 智子、小野寺 敦子、林 佳枝、山本 佳奈恵（北海道（研究会員）・旭川
認定こども園）

つぶやきから広がる豊かな表現 ～食育体験から生まれた“とうもろこしのうた”～
村岡 里美、秋葉 悦子、佐藤 美里（山形県・山形認定こども園）

Aくんの“わくわく”がみんなの“わいわい”になった環境構成を振り返る
西垣 浩康（岐阜県・黒野こども園）

○奨励賞

- ・ 課題研究部門②遊びと学び
5歳児における試行錯誤の過程 ～コロナ禍での新たな運動会に向けての取り組みから～
平瀬 文恵（富山県・射水おおぞら保育園）
- ・ 自由研究部門
『お泊り保育』を通して子ども主体の行事を考える
富田 真由（東京都・砂原保育園）

地域の良き由縁・良き心配りの保育協力は保育の彩り
花城 千枝子（沖縄県・ひよどり保育園）

目 次

はじめに

第15回「保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

第15回「保育実践研究・報告」入賞作一覧

1. 総評	1
総 評.....	3
委員長 小林 芳文	
2. 入賞作の紹介及び講評	5
(1) 優秀賞	5
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究①人とのかかわり	
子どもと関係性の変化 ―宇宙への興味の広がりを通して―	
橘 南、浅香 聡彦（石川県・大徳学園）	7
・ 課題研究部門②遊びと学び	
日常保育を大切にしたい行事の実践 ―発表会の改革を通じて―	
荒井 祐子（千葉県・布佐宝保育園）	17
〈自由研究部門〉	
食事に課題がある子どもの取り組み	
坂本 向子（福岡県・青葉やまと保育園）	23
(2) 研究奨励賞	31
〈自由研究部門〉	
雪の体験を思いっきり楽しもう！！	
辺見 智子、小野寺 敦子、林 佳枝、山本 佳奈恵（北海道(研究会員)・旭川	
認定こども園）	33
つぶやきから広がる豊かな表現 ～食育体験から生まれた“とうもろこしのうた”～	
村岡 里美、秋葉 悦子、佐藤 美里（山形県・山形認定こども園）	40

Aくんの“わくわく”がみんなの“わいわい”になった環境構成を振り返る 西垣 浩康（岐阜県・黒野こども園）	47
---	----

(3) 奨励賞53

〈課題研究部門〉

・課題研究部門②遊びと学び

5歳児における試行錯誤の過程 ～コロナ禍での新たな運動会に向けての取り組みから～ 平瀬 文恵（富山県・射水おおぞら保育園）	55
--	----

〈自由研究部門〉

『お泊り保育』を通して子ども主体の行事を考える

富田 真由（東京都・砂原保育園）	60
------------------	----

地域の良き由縁・良き心配りの保育協力は保育の彩り

花城 千枝子（沖縄県・ひよどり保育園）	67
---------------------	----

「保育実践研究」企画・審査委員会

委員長 小林 芳文（横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授）

天野 珠路（鶴見大学短期大学部教授）

石川 昭義（仁愛大学教授）

高木 早智子（埼玉県・花園第二こども園園長）

田和 由里子（広島県・春日こども園園長）

馬場 耕一郎（大阪府・おおわだ保育園理事長）

日吉 輝幸（石川県・平和こども園園長）

1. 総 評

総評 委員長 小 林 芳 文

日本保育協会では、保育士等の専門性の向上を願って、日々の保育実践を振り返り検証し、保育士等の取り組み状況や成果を「保育実践研究」として募集し、公に報告する機会を設けて来ました。そして、今年度（令和2年度）で第15回を迎えるに至りました。

令和2年1月6日、厚生労働省は、「中国の武漢で原因不明の肺炎患者が確認されており、武漢からの帰国者で症状がある場合は、医療機関を受診し、渡航歴を申告するよう」呼びかけました。

この出来事から1年以上が経過し、原因不明の肺炎は、【新型コロナウイルス感染症】と呼ばれ、令和3年2月時点で、我が国では、40万人を超える感染者、6000名を超える死者が出ました。そして今もなお、我が国だけでなく世界中で多くの感染者が報告されています。

今回の第15回は、このような状況下、日本保育協会機関誌「保育界」4月号の付録として全会員の施設に募集要項を配布し、昨年11月の締め切りで研究報告を受け付けました。

皆様におかれましては、日々の保育に加えて感染症対策で多忙な中、保育実践に取り組まれたことと思います。そのような中で9件の応募がありましたことは、私達企画・審査委員会にとりましても大変うれしく思います。

今回、課題テーマを選び研究を進めていただく「実践研究部門」の①人との関わりには1件、②遊びと学びには2件、自由に幅広いテーマでの取り組みで研究を進めていただく「自由研究部門」には、6件の応募がありました。

令和3年1月28日に開催しました「保育実践研究」企画・審査委員会での厳正なる審査（各応募作毎に3名の委員）のもと、優秀賞3件、研究奨励賞3件、奨励賞3件の各賞を決定しました。評価基準は、研究・報告の背景、目的等課題の明確さ、経過等具体的に記述されているか、独創性等で審査しました。

来年度、第16回の実践研究の募集につきましても、保育界4月号に募集要項を同封して募集を開始することが決まっています。

企画・審査委員会を代表して、全国から応募された保育士等全ての研究の応募者に対して、その努力を称え、今後の保育実践や保育内容の向上に資すべく活躍されることを、切に願って総評とします。

2. 入賞作の紹介及び講評

(1) 優秀賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究①人とのかかわり

子どもと関係性の変化 ―宇宙への興味の広がりを通して―

橘 南、浅香 聡彦（石川県・大徳学園）

- ・ 課題研究②遊びと学び

日常保育を大切にした行事の実践 ―発表会の改革を通じて―

荒井 祐子（千葉県・布佐宝保育園）

〈自由研究部門〉

食事に課題がある子どもの取り組み

坂本 向子（福岡県・青葉やまと保育園）

課題研究① 人との関わり 子どもとの関係性の変化 —宇宙への興味の広がりを通して—

石川県・大徳学園 橘 南・浅香 聡彦

1. はじめに

当園では3・4・5歳児の異年齢クラスを編成しており、個々のつぶやきやあそびの中からみんなで楽しめるよう、環境構成や援助をしていくことを大切にしている。2018年度の研究では、子どもの個々の育ちを支え、寄り添っていくことで、子どもたちがお互いを尊重し合う関係が作られていった。そして、2019年度はみんなの『やりたい』という思いを叶えることを目標として保育した。5月から12月までの約半年間、「宇宙」への興味は、クラス全体で楽しみながら広がり、またあそびが広がっていった。今回の研究では、あそびの展開を記録したものを考察し、その中で子どもとの関係性の変化から現状の課題と改善点について考えてみたい。

2. 背景

まず、筆頭著者である橘が担任となった3・4・5歳児異年齢クラスの2019年4月当初の状況についてである。2018年から同じクラスを担当し、3歳児は新しくクラスに入ってきてからの関係づくりとなるが、4・5歳児は昨年からの持ちあがりとなった。また、担任は橘・保育者A、保育者Bの3人である。5歳児に2名個別の配慮の必要な子がいることもあり、3人でのクラス運営となっている。

宇宙への興味のきっかけはC男（3歳児）が宇宙について詳しいことが発覚したことからだ。みんなでクイズをしたり絵本を読んだりしているうちにみんながわからない問題をC男が答えたり、絵本から知識を得た5歳児男児たちが「こって地球って言うんやよ」「宇宙行ってみたいね」などと話す姿が多くみられ、宇宙への興味が全体に広がっているのを感じた。『宇宙』というテーマであそびを展開していくにあたり、保育者もあそびの展開の方向性や宇宙への興味を深めるために担任3人で県内にあるコスモアイル羽咋という施設に見学に行った。ここは宇宙船をはじめとする宇宙機材が展示されており、宇宙開発の歴史を知ることができる施設である。

〈実践1〉2019年5月下旬

まずは、地球というものに興味を持っていたことから、惑星が載っている図鑑を用意した。図鑑を用意すると太陽という聞きなれた言葉が出てきた。聞きなれている言葉が出てきたことにより、3歳児たちも「太陽って知ってる!」「いつも見えるよね!」と話したり、4・5歳

児たちも「月もあるんやよ!」「星も宇宙にいっぱいあるらしい」という話を今まで持っている知識から話すようになった。また、異年齢クラスの3歳児をほしグループ、4歳児をつきグループ、5歳児をたいようグループと呼んでいたことも宇宙との繋がりを感じたきっかけとなっていたように思う。

図鑑を見ていくうちに地球以外にも惑星と呼ばれる星があることが分かった。図があったことで色や形などにとっても興味を示し、「海王星が1番好き」「土星の形だけなんか違う!」と自分の思いや気づきを言葉にしたり、絵に書いたりして楽しんでいた。

〈考察1〉

子どもたちにとって視覚から得る情報は大きく、初めて知ることも多かったことから、色や形などに1番興味を持ったのではないかと考える。また、色や形から一人ひとりの好きな惑星というものができはじめ、誕生会するときなどには「私の好きな惑星はなんでしょう?」という話題も多く上がるようになった。理由を聞くと「色がきれいだから」「形がかっこいいから」という答えが多かった。子どもたちにとって視覚的な情報が共通認識としてあることが、みんながイメージしたり会話したりする手掛かりとなっていた。

この時、保育者を介して自分たちの興味や情報を友達と共有する子がほとんどだった。(※図1参照)

〈実践2〉2019年5月下旬

どの惑星がどのくらいの大きさなのかということが分かりづらいように感じたため、惑星の写真を縮尺し、一覧にして画用紙に貼って示してみることにした。(以下、縮尺図と記載)

縮尺図を部屋に掲示したところ、「太陽ってこんな大きいん?」「地球ちっちゃ!」と5歳児だけでなく4歳児なども大きさの違いに驚く姿があった。また、縮尺図だけでは地球などの惑星が小さくなりすぎて色などが見えづらくなってしまったため、図鑑の各惑星のページを印刷し、縮尺図の下に貼っておいた。そうすると次第に「宇宙に行きたい」と話したり、惑星を作ったりする子が出てきた。惑星づくりはロンディーやLaQなどの玩具で色や形を模して作る子もいたが、創作意欲と発想力溢れるD男（5歳児）は厚紙や牛乳パック、セロテープ、クレヨンなどを用いて自分なりに惑星やロケットなどを作っていた。それに影響を受けて、E男（4歳児）やF

男（3歳児）も保育者Bの助言を受けたり一緒に作ってみたりしながら、新聞紙と折り紙を用いて大きな惑星を作る。

「宇宙に行きたい」という子どもたちの言葉から、「じゃあ何で行きたい？」と聞くと、「ロケット！」という声が上がったが、「宇宙で何したい？」と尋ねると「宇宙音楽会」「宇宙でご飯食べたい」という声上がり、中でも「食事」に対する興味が多かった。

<考察2>

縮尺図や図鑑のページを、みんなが見えるところに掲示したことによって、年齢関係なくイメージが共有でき、そこから自分なりに表現するという意欲につながったのではないかと考える。しかし、D男（5歳児）のように自分のイメージしたものをいろんな素材を用いて作るということを難しく感じている子もいた。その姿を見て、アイデアを出したり、こんな方法もあるんだよということを見せたりするなど保育者Bの適切なタイミングでの個々の年齢や力に応じた援助により、子どもたちの新たな意欲を生んでいった。子どもたち一人ひとりを見る力が大切であると感じたとともに32人の思いやりしたいことひとつひとつを3人で同時に叶えていく難しさ

にも直面した。それぞれの性格や能力によって、保育者との対話の中で表現していく子と、自分自身のアイデアで表現していく子、そんな周りの姿に影響を受けて考えていく子など様々な学びや表現の過程が見られた。（※図2参照）

また、「宇宙で何したい？」との質問に「宇宙でご飯を食べたい」という言葉が多かったことから、子どもたちは宇宙に人が行っていることはなんとなく知っていても何をしているのか知らない子がほとんどなのではないかと考えた。また、宇宙の面白さは無重力であることではないかと大人は考えていたが、それを伝える術が私たちにはなかった。そこから、図鑑についていた宇宙についてのDVDを子どもたちと観ることで、より宇宙や宇宙での暮らしについて興味が深まっていくのではないかと考えた。

<実践3>2019年6月3日～14日

宇宙映像のDVDを別室で見終わると、宇宙に行く人は宇宙飛行士という名前であること、その人たちは宇宙で実験などをするためにしばらく宇宙で暮らしていることなどが分かり、部屋に残って昼食の準備をしていた橘に

図1



図2



クイズなどをして自分たちの知ったことを教えてくれる姿があった。その中でみんなが1番興味をもっていたのが「宇宙ステーション」と「宇宙食」だった。

惑星を作っているE男（4歳児）やF男（3歳児）を見て、G男（5歳児）やH子（5歳児）が「宇宙アイス食べたいなあ」と話す。「宇宙アイスってどんな？」と橘が聞くと、H子が「うーん…どんなやろう」と具体的な形にすることには自信がない様子だった。「アイスは丸いから丸いアイスつくりたい！」とG男が橘に言ったので毛糸や画用紙、新聞紙などのできるのではないかとこのことを提案すると素材置き場にあったポンポンメーカー（毛糸を丸く形作る玩具）を見つけ、「これにする！」とG男とH子が興味を持ったため、ポンポンメーカーを使用して作ることとなった。「何味にする？」とG男とH子が毛糸の色を考えているときに、「Dくんは地球アイスにする！」とD男（5歳児）が話に加わる。H子が「地球アイスってどうするん？」と聞くと、「地球の色で作る！」と写真を見ながら、青と緑を手取る。それをきっかけに「惑星アイスにしたらいいやん！」とG男が写真を見ながら作りたいアイスを選ぶ。他の人が作っていない惑星を作っていくながら、ほしい色がないときはほしい色が残っていないか橘に尋ねて材料を手に入れるようになる。少しアイスの種類がそろると宇宙アイス屋さんごっこが始まった。土星アイスづくりは輪っか作りが難航していたが、しばらくするとD男が厚紙で輪っか付きの土星を作り「これ土星アイス！」と持ってきたものがアイス屋さんで置かれ、「それもいいね！」と人気メニューとなっていた。



写真1 宇宙アイスのメニュー



写真2 土星アイス

<考察3>

映像をみたことで、ロケット以外の「宇宙ステーション」という宇宙で生活するためのものがあることを知り、そのイメージをみんなで共有できたのではないと思う。もっと無重力について興味を持つのではないかと考えていたが、どちらかという衣食住について強い興味を示した。宇宙と聞くと大人は普段の生活とかけ離れたものに魅力を感じるが、子どもたちにとって興味があるものは、自分の生活や経験の中とつながっているものが強い関心をひいていた。映像から子どもたちが自分の興味を持ったことを保育者や友達と話すなど、子ども側からの発信力が強まっていった。

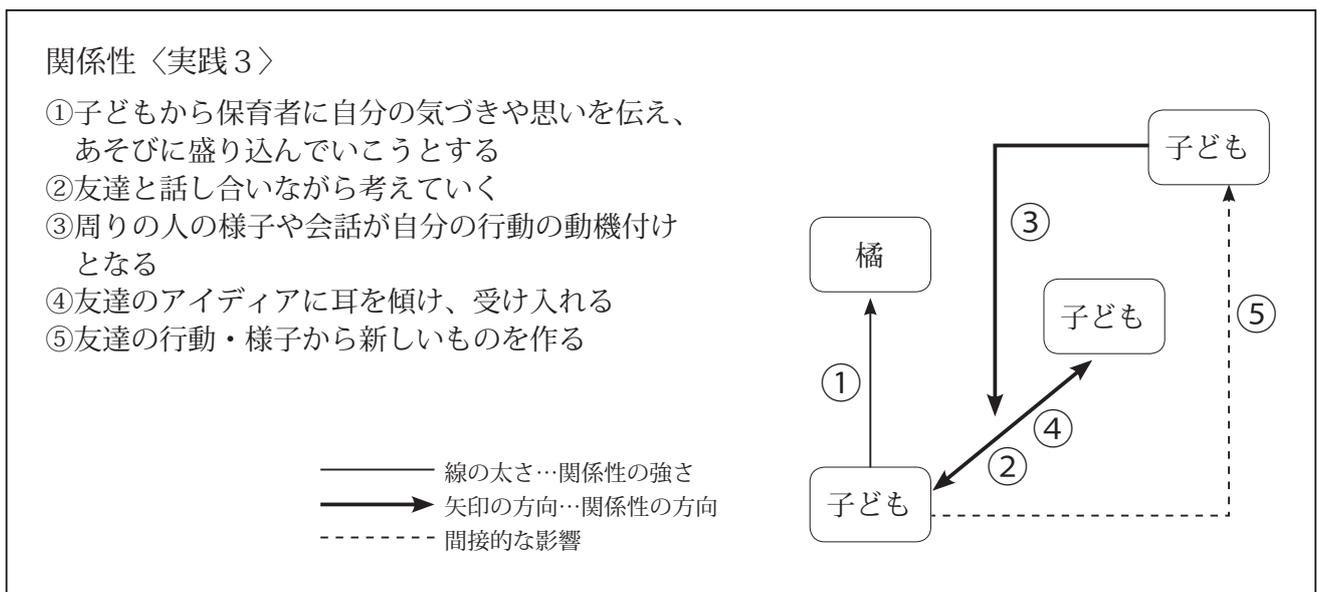
また、宇宙アイスづくりでは実際に存在しない「地球アイス」というD男の発想に驚かされた。子どもたちの中で、この色の部分は何味で…というイメージはあまりなく、味のイメージよりも惑星の色味や形を表現することにこのあそびの面白さを感じていた。D男が土星アイスを作って持ってきたとき、友達の会話や様子を見て、それに対して自分の発想で何かできることはないか…と行動したのではないかと考えた。普段自分の世界で作りたい欲求のままにいろんなものを作っているように見えるD男だが、周りの様子から出てきた発想も今まで多くあったのだと気づかされた。そしてそのアイディアを「それもいいね」と受け入れる力は子どものほうが柔軟である。互いの会話や見たものからさらに対話や意欲を深めていったと考える。（※図3参照）

<実践4>2019年6月3日～8月下旬

惑星づくり、宇宙ステーションづくり、宇宙食づくり、宇宙服づくりと部屋の中で宇宙に関する興味の方向が分かれてきていた。考察2で示したように32人の思いややりたいことを聞き、実現のために準備や過程を追っていく中で、担任全員が全体を見ていくことは難しいという話になり、担任間で分担しコーナー担当者を決めることにした。橘は宇宙食づくり、保育者Aが宇宙服づくり、保育者Bが宇宙ステーションと惑星づくりを担当することとした。

宇宙にいくためには宇宙服が必要だと宇宙へのあそびが始まった当初から宇宙服づくりをしていたI男（5歳児）はどうしたら頭を覆った宇宙服が作れるのかと保育者Aとともに日々試行錯誤を繰り返していた。段ボールや厚紙など身の回りにある立体になりそうなものをいろいろ試し、ある日D男（5歳児）が段ボールの顔の部分に丸く穴をあけて作ったものをかぶって「宇宙服できたよ！」と身に着けていた。そこから作り方のイメージが湧いたI男は、穴が開いたままでは空気がもれることからその穴に透明フィルムを貼り、宇宙服のヘルメット部分を作ることに成功した。それに憧れたE男（4歳児）もI男に聞きながらヘルメット部分だけ作る。しかし、胴体部分は布のような柔らかいものでないと動くことが

図3



できず、宇宙ステーションに入れなため、なかなか満足できる仕上がりにならなかった。長く試行錯誤を重ねる姿を見て、なんとか実現させたいと思った保育者Aが週案ミーティングのときに橘と保育者Bに子どもたちでも作ることでできる方法はないか相談し、考えてみたが、

動きやすさを追求すると縫ったりすることなく作る方法が見つからず、保育者でたまかな形づくりをすることとした。まずは宇宙ステーションの運転手分の2着を形作りのみ保育者がすることとし、着脱時にはずすマジックテープや宇宙服の模様はK男やE男に任せた。



↑段ボール製宇宙服を着ているところ



↑ヘルメットの作り方は分かったけどさらに改良！



↑教わりながらヘルメットを作っているところ



↑宇宙ステーションに入れた！



全身完成！

<考察4>

コーナーごとに担当者を決めたことによって、準備物や今のあそびの展開のしかたが保育者自身も明確になり、あそびの準備や環境づくりを考えるスピード感が出た。また、あそびの展開を思いついたときにすぐに取り掛かれるようになったのも大きなメリットと言える。また、自分のコーナー以外のあそびがどのように発展しているのか分からないため、情報交換が大切になってきた。週案づくりのクラスミーティングの時間に情報交換を行い、互いの状態を知っておけるようにした。そうすることで各コーナーのあそびがそれぞれで孤立するのではなく、つながりを持ったあそびとなっていくのではないかと考えた。継続して同じコーナーを見ていくことにより、より子どもたちの考える力や気づきを細かく見つけられるようになった。その中でいろんな方法を試していくという過程を大切にしたいと見守っていたが、あまりにその期間が長いと気持ちがしぼんでいってしまうのを目の当たりにするとなんとか成功体験を持たせたいという保育者の思いが強くなった。様々な材料や方法を日々試していたI男にとって、あっという間にやりたかったことを実現してきたD男の存在は衝撃的だっただろう。しかしそれがI男にとって刺激となり、さらなる意欲となった。今まで各コーナーで行き詰ったときに、他の保育者たちに相談すると新しいアイデアが出て、乗り越えることができていたが、その時の状況では針や糸を扱うのは難しく感じられ、保育者が形作りだけやることにした。しかし諦めかけていたI男やE男にとっては最後の仕上げだけをするだけでも大きな一歩となり、

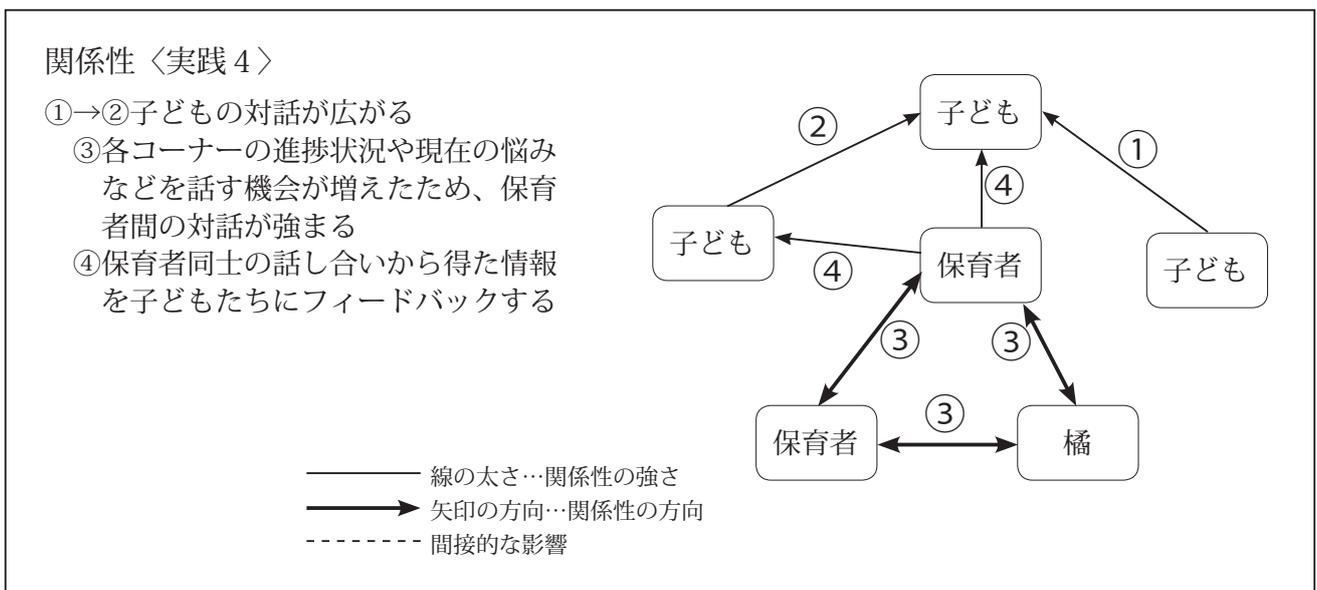
喜びや達成感を持っていたと考える。大人がやることと子どもで進めていくことの線引きは悩みどころではあるが、願いを持ちながら大人が手助けをしていくことも時に必要な援助だと考える。(※図4参照)

<実践5>2019年8月下旬~12月

D男(5歳児)が、園にある図鑑が欲しいと保護者と買いに行ったが、別に気に入った星座の図鑑を買って園に持ってきた。そこから星の名前について興味を持った子もいたが、保育者Aが「みんなもひとりに一個ずつ星をもってるんだよ」と12星座についての話をしたことをきっかけにさらに星座への興味が深まっていく。さらに家へ帰って保護者や兄弟の星座を聞いてきた子もいた。そこからLaQブロックで12星座を作ったり、図鑑で調べた星座などを表現して楽しんだりしていったため、宇宙の図鑑のほかに星座の図鑑も用意する。図鑑をみていくうちに季節によって見える星座が違うことや、大人でも聞いたことのない星座がたくさんあることがわかった。4・5歳児は絵を描いて「これは何座でしょうか」や「きりん座はあるでしょうか」などとクイズをすることが増えていった。



図4



そして5歳児が七夕の時期に行ったプラネタリウムへ行ってみたいと家で話した4歳児・3歳児も多かったようで夏休みシーズンに入ったことをきっかけに家族でプラネタリウムや天体観測のイベントに出かけたという話もたくさん出てきた。

＜考察5＞

6月の保護者懇談会時に子どもたちが宇宙について興味をもっているという話をしてあったことで、保護者も一緒に興味を深めていく手助けをしてくれたのではないかと考える。また、担任3人で行ったコスモアイルの話や5歳児のプラネタリウムの存在を知らせていくなど子どもだけでなく、保護者にも種をまいておく重要性を感じた。そして「自分も星座を持っている」という一言でとても星座が身近なものとなり、親近感が湧いたようだった。また、家族にも星座があることで、星座の話が家庭でも話したり、図鑑を持ってきたりと家庭と園でのあそびが繋がっていったきっかけとなり、保護者もお迎えの時などに自分の子以外の作ったものや遊んでいることに対して興味を示してくれるようになっていった。（※図5参照）

子どもと一緒に調べていなければわからないくらい星座の種類があり、保育者も自分の知っている知識だけでは追いつかないほど子どもたちの星座の知識量が増えていった。図鑑にある星座の上にうっすら書いてあるイラストでその星座が分かることから自分で調べるということに喜びを感じ、さらに知りたいという意欲へとつながったと感じる。また、保育者自身も負けじと星座にまつ

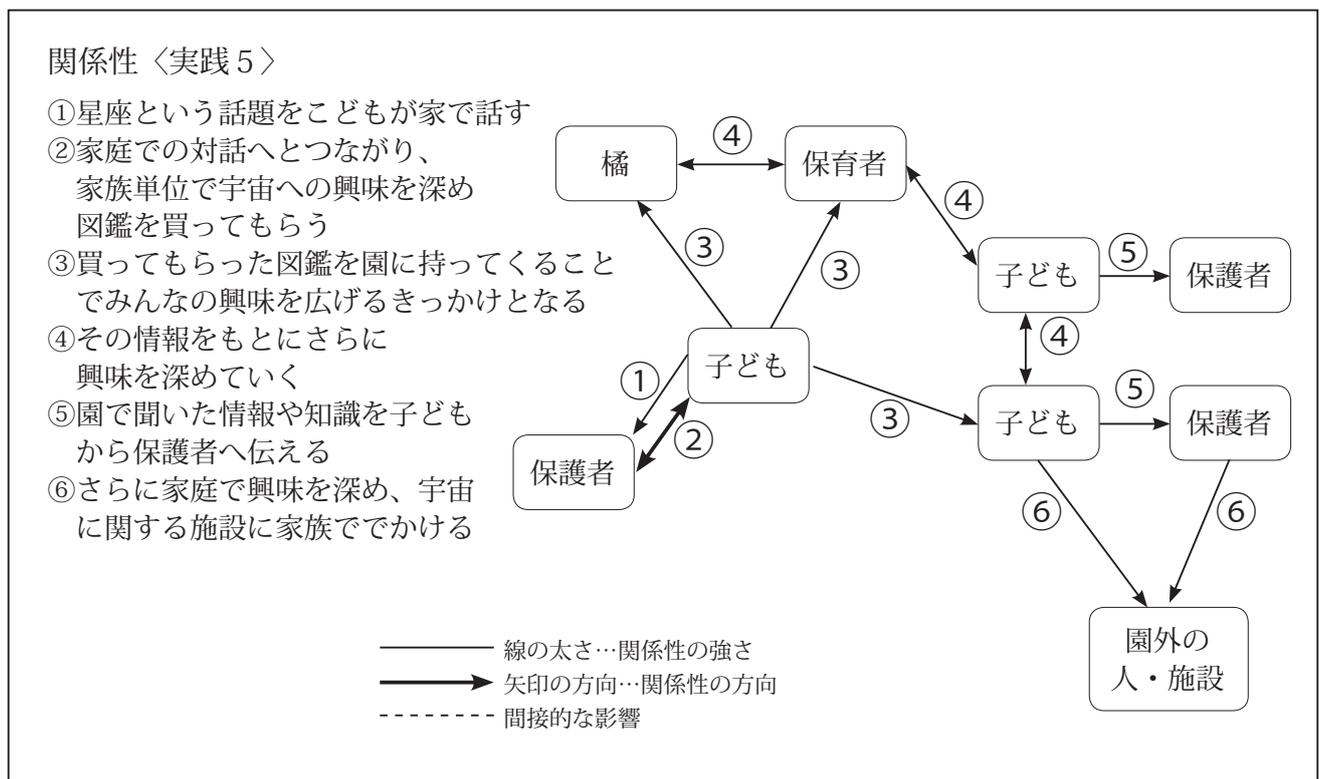
わる昔話を調べ、話を聞かせてきた。橘自身もそうだったように調べて終わるのではなく、クイズという方法をとって他者へ知識をアウトプットしたことで、より記憶に残り、知識として深まっていったのではないかと考える。

＜実践6＞2019年10月下旬

自分の12星座だけでなく、お気に入りの星座ができたことから、星座になりたいという声が出てくる。図鑑やタブレットを使用して調べた写真からその星座の特徴や服装、形などを作っていく子が出てきた。F男（3歳児）が保育者Bと一緒にさそり座のしっぽとはさみを布で作り、それをみんなの前で紹介すると続々と作りたい子が出てくる。みんなのやりたい星座を決めていくうちに「星座って空に1個しかないしさそり座2個はいらんかな」という言葉から、みんながやりたい星座や宇宙人たちを選んでそれを作ることとなった。



図5



発表会が近づいてくるにつれ、5歳児たちが「ねえ、発表会で宇宙やったらいいんじゃない？」と言うようになってきた。クラスみんなにも「発表会何したい？」と尋ねたところ、「宇宙にお母さんたち連れていきたい！」「宇宙人になりたい」「歌いたい」という声が挙がり、具体的には「たこたこ星人に会わせたい」「ロケットに乗せてあげたい」「星座のこと教えてあげたい」「星座になりたい」というアイデアが出た。他にも「バスに乗せたい」「たこ焼き食べさせたい」などのたくさんのやりたいことが年齢問わず出てきた。役割はほとんどの子が今自分が作っている星座や宇宙人をやる気持ちがあったためそのまますることになった。5歳児が1番発表会のイメージを持っていたり、人にみせるということ意識している子が多いように感じられたので、それをどのように見せていくかは5歳児を中心に考えていくことにした。

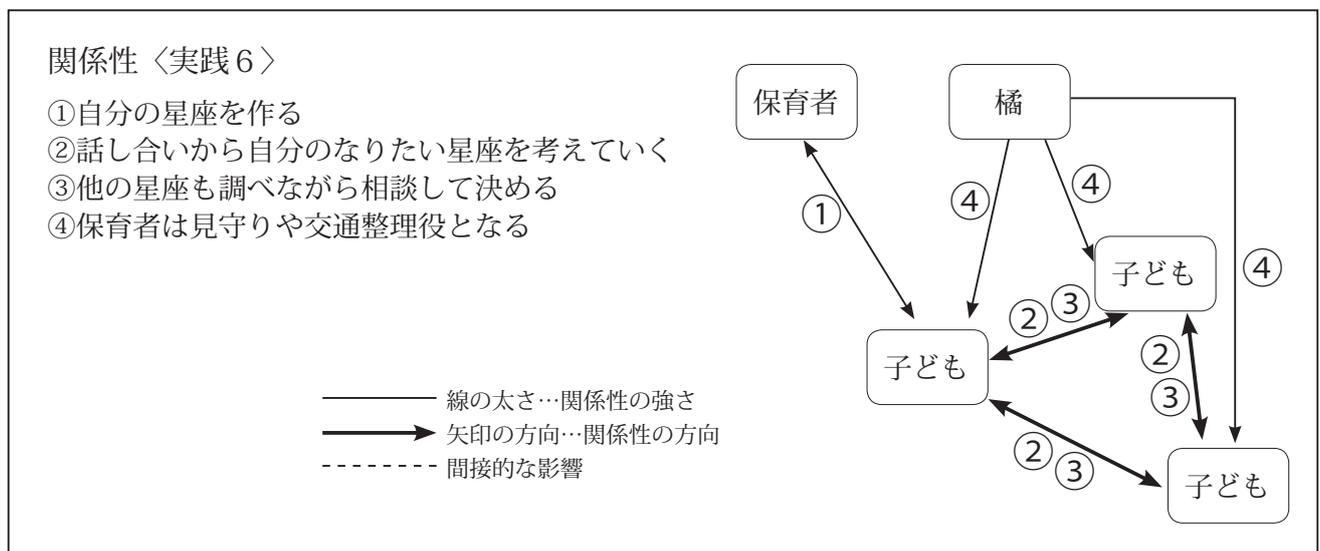
<考察6>

毎年の行事である発表会が子どもの中で1年の流れの一部となっていたことで「発表会で何する？」という話題が自然と上がったと考えている。また、同じ星座にならないようにしようという考えにはとても驚かされた。子どもたちは人気のある星座を決めるのに時間がかかったりもしたが、他にいい星座がないか調べ、納得できるまで考えたことで、自分の星座としての愛着と最後まで作り上げる意欲を持っていたのではないかと感じる。「歌いたい」という意見が出たのは、日常的にみんなが集まる時間に『宇宙コンサート』をしていたことが発表会へとつながっていた。これらのことから日々のあそびを保護者に見せたいという思いが自然と発表会という行事への気持ちづくりに繋がり、それが子ども同士の対話のきっかけとなっていったと考える。(※図6参照)

<実践7>2019年10月26日

発表会前、保護者向けの講演会の日に5歳児の子どもたちが今まで調べてきたことを発表する機会があった。5歳児たちに題材や方法を相談すると「星座紹介がいいな」「写真みせるとか?」「クイズ!!」という意見が出た。どれもみんな「いいねいいね」と言いながら話し合いをしており、「星座クイズをする!」ということが決まった。「じゃあどう感じるでやる?」と尋ねると「これは何座でしょうって写真見せる」「○×クイズは?」「これは何座でしょうやったらずっと当たらんかもしれんよ!」「簡単なのにしてあげれば?」などとわくわくした表情で中身を決めていっていた。橘が「でもばら組5分から10分くらいしか時間もらってないからあんまり長くばら組だけでやれんよ…」と話すときH子がずっと当たらんかったら面白くないよね?とお客さんの立場になって考える姿があった。そこからJ男が「じゃあどっちがきりん座でしょうとかにしよう」「くじら座といるか座とかやったら形で分かりにくいし、だんだん難しくできるかも」と言った。橘は出てきた星座の名前をメモで残しておき、その中からどの星座を対比させるかや順番、担当割り振りなどは子どもたちが行った。話し合っていく中でH子とJ男が中心となって話を進めていた。J男は自分の思いを話すことが得意で、H子は周りの子たちに「○○ちゃんはどう思う?」「○○くんは何がいい?」と話し合いをまとめていくことが上手だった。話すことが苦手な子に対しては「どんなのならできる?」と相手の思いを聞いたり、「G男しし座やよね?しし座の紹介したら?」とその子の興味や得意不得意に合わせて役割の提案をしていた。そして話し合っていく中で次の問題ですと言う人がいたらみんな分かりやすいということになり、J男が「おれやりたい!」と言った。するとH子も「じゃあ

図6



H子もその役したい！！」と進行役と星座の紹介をする役が決まっていた。特に台本のようなものは作らず、流れと役割だけ決めて、星座紹介の担当が写真の準備をすることになった。絵を描くのが得意なD男はかに座とさそり座の絵を描くことになったが他の星座の準備をする役となった子たちは自分で描くことに自信がなかったようで「ねえ、俺の星座パソコンでコピーできんがん？」と橘に聞いてきた。「できるよ」と言うと、「じゃあ一緒に選ぶしコピーして！」と言ったため、D男以外はコピーした星座を画用紙に貼って星座パネルをつくることにした。この時点で何枚も印刷するとどの写真がどの星座か橘はわからない状態だったが、子どもたちはその絵だけで自分の星座をみつけ、「あ！これ俺の」と持っていき、準備を進めていたことに驚かされた。3・4歳児から5歳児が星座クイズをやることを知ると「見たい」という声があがり、前々日のリハーサルでは3・4歳児にお客さん役になってもらった。ほとんどの子が「簡単や〜」と次々正解していた。舞台上では進行役の言葉がけや互いのフォローで自分たちで進めようとする気持ちが伝わってきた。中でもJ男の進行役としての意欲が強く、H子の順番があまりなくなってしまった。保育者間でも話す割合の調整があるのではないかという意見が出たが、そのことにH子も気づき、終わった後に「ねえ、順番決めん？ちょっとJ男くんが多くなってもいいから」と提案したのをきっかけに2人で担当割り振りを話し合っ

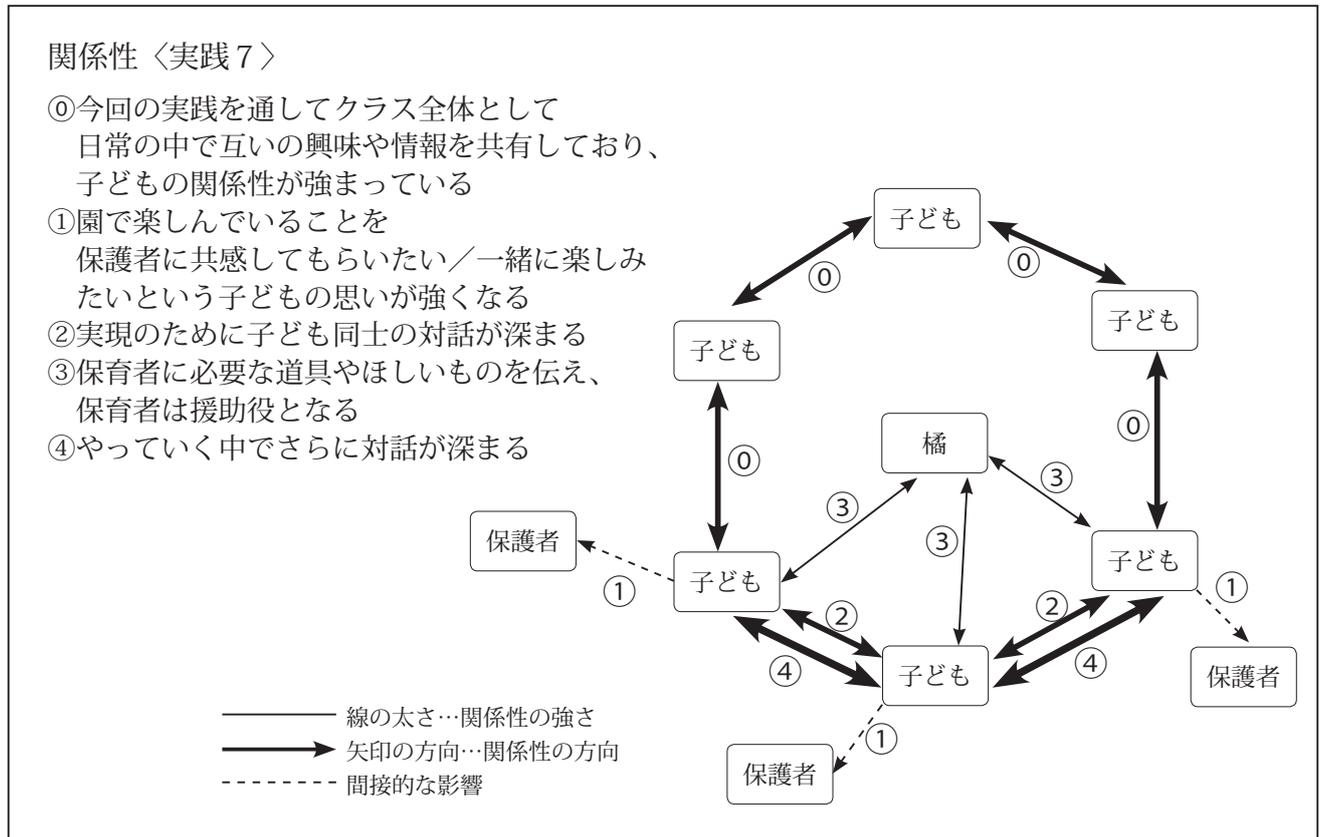
決めていた。当日子どもたちは特に緊張した様子もなく、終わると「たのしかったあ」「意外と大人も星座わからんのやね」と話していた。

<考察7>

これを機会に子どもたちだけで話し合いを進めていく形が見られてきた。H子のように周りを見る力があり、相手の思いや気持ちを想像しながら話す子、J男のようにアイデアをどんどん出したりみんなから頼りにされたりする子だけでなく人前で話すことに自信がない子、あまり見通しが持てていない子など成長の発達や性格にも個人差がある。それを子どもたち同士が互いに分かり合いながらフォローするというを自然とやっている姿があった。異年齢クラスは3歳児で自分のクラスが決まると3年間同じ学年のクラスのメンバーは変わらない。5歳児はその3年間を共に過ごしてきたからこそわかっていることも多いと考える。また、ずっと座って話し合いに参加できる子ばかりではない。入ってきたときに意見に耳を傾けたり、話題を振って話を進めていったりするなどの姿もお互いがお互いをわかっているからこそできる関係性・関わりであると考えられる。（※図7参照）

また、リハーサルでは3・4歳児もほとんどの子が星座について5歳児と同じくらいの知識を持っていたことが分かった。日々一緒に過ごしていく中で興味や関心が互いに広がっていつているからではないだろうか。ある程度の流れや役割を自分たちで決めたことにより、休ん

図7



だ子がいたことによるトラブルは自分たちで解決できていた。それが「子どもだけでもできた」という達成感に繋がっていたように思う。終わってからの「意外と大人も星座わからんのやね」という一言は少し前の自分と重ねているように感じた。相手が知らないことを自分たちが伝えられたという経験も大きな自信のひとつになっていたようだった。



<総合考察>

このあそびを楽しんでいく中で、子どもと保育者、子ども同士、保育者同士、子どもと保護者、保育者と保護者など様々な関係性の中でたくさんの対話が生まれ、学び合い考え合うという相互作用があった。はじめは子どもたち個々の気づきや情報を、保育者を介して繋げていたが、子どもの発信から子ども同士で考え、自ら家族へと園で自分が楽しんでいることを広げていった。実践4では保育者間の関係が強化されていった。実践5では友達が生んだ新しい発想に刺激を受け、それをまた別の子へ伝えていくという波及効果があった。直接的に会話ややりとりをしていなくても他者の存在が子どもたちにとって大きな影響を及ぼしていた。

ものを作ることが得意なD男は、突発的に思いついたときに廊下や床などで作ることも多かったが、それを咎めたり注意したりする子はおらず、D男が作るものをみんな楽しみにしていた。D男が作る気持ちを止められないことや作りたいものが大きく、この場所でなければできないであろうことを誰かが言うわけでもなくみんなが日々の生活の中から感じ取っていたからであろう。また、発表会では今まで一度も人前に出られなかった子が自分の星座を作り、それに勇気づけられたことで、堂々と舞台に出ることができた。日々星座に親しんでいた積み重ねから子ども自らが発信したい・一緒に楽しみたいという気持ちが、次第に深まっていたからだと考える。

そして子ども同士、特性や性格を知っているからこそ、けんかの仲裁をしてくれる子、話をリードしてくれる子、作りたいものを一緒に作ってくれる子などと暗黙の役割のようなものがあった。その時々に合わせて自分が助けたい相手と呼んだりその子のところへ行ったりして子ども同士で解決していった。それは保育者に対しても同様で、作り物が得意な保育者、一緒にじっくり考えてくれる保育者、提案していく保育者などとそれぞれの得

意分野や性格などはさまざまである。保育者同士だけでなく、子どもたちも自然と自分のやりたいことや困っていることに応じて助けを求める保育者を分け、自分の足りない部分を補ってくれる相手をうまく見つけていたこともおもしろい姿であった。子どもたちが自ら目的を定め、それに向かって自分なりに考えて行動する力、また自分だけで解決するのではなく、自分に足りないものを補える存在を見つけ、互いに補い合っていく力が育ったのではないだろうか。

3. おわりに

今回の研究では、1人の子どもの興味がクラス全体に広がる中で、子どもとの関係性の特徴として、子ども同士で強く刺激を受けあっているときは、子ども同士や保育者との対話は少なくとも、あそびの展開が早かった。一方で、保育者はそのスピード感に追われ、あそびの準備や他の保育者に伝達することだけで精一杯だった。あそびの充実や子どもの今やってみたいことに応えるために、保育者間の対話を増やすべく、すきま時間の活用を考えたい。また、保護者の子どもへの影響は大きく、保護者との対話、関係性の強化も今後の課題と言えるので、保護者からの意見や感想を得て、それを活かすための方法を探りたい。

保育者も子どもも人との対話を通してたくさんを知り、学んでいく。しかし、子どもたちは対話以上に互いの存在そのものが相互作用を生んでいるのではないだろうか。子どもから発せられる言葉や目に見えるものに目が向きがちだが、日々の中ではなかなか気づくことができない子どもの内面の育ちを意識してこれからの保育に生かしていきたい。

参考文献

- ・橘南、浅香聡彦（2020）
「子どもの個々の尊重と共同性について」第14回保育実践研究・報告集 40-49p
- ・大豆生田啓友（2016）
「対話」から生まれる乳幼児の学びの物語 ―子ども主体の保育の実践と環境― Gakken

評者：小林 芳文

本研究は、3、4、5歳児の異年齢クラスでの子どもたちの日頃のつぶやきや遊びの中から生まれた研究、宇宙への興味を発展させて取り組んだ遊びを課題としてまとめた興味ある実践記録として拝見しました。話題の宇宙への関心、一人の子どもの興味から他の子ども同士の繋がりを、保育士が見事に拾って見守り、自由な発想、物づくり、グループでの活動、発表会、そして話し合いの展開が素晴らしいと思いました。それぞれの実践における考察も当を得ており丁寧に記述されています。園の保育での半年間の遊び記録における関係性の変化の展開が、もう少し発達の知見で展開していると良いこと、保護者などの意見や感想が入っていれば、それをどのように活かすかの流れが欲しいと思いました。子ども同士の学び合いについても含めて、今後の継続的研究を期待しています。

評者：天野 珠路

「宇宙」をテーマに子どもの興味・関心を広げ、深めていく長期にわたる実践の記録です。子どもも大人も宇宙や星座について調べ、話し合い、探究していく過程が具体的に記されており、図や図鑑、映像なども効果的に使われています。イメージを可視化したり、一人ひとりのアイデアを取り入れて作ったり遊んだりなど、子どもたちの意欲を引き出しながら遊びの充実を図っていく様子が伝わります。さらに、年長児がコスモアイルに遠足に行ったり、宇宙に詳しい保護者や地域の方と連携できればよかったかと思います。

実践記録1～7は、詳しく書かれていますが、もう少し簡潔に、誰もが読みやすいようにまとめ

られるとよいと思います。また、「子どもとの関係性の変化」というタイトルも、子どもと何の関係性なのかがわかりにくく、再考が必要と感じました。この作品だけでなく、すべての作品にいえることですが、タイトルは何度も何度も考え、声に出して確認しながら、協議して決めましょう。タイトルは作品の「顔」であり重要です。

評者：高木 早智子

今回の実践報告を拝読し、一番評価できた点は関係性を図で可視化することで、自らの考察をわかりやすく示そうとした点です。報告された先生方も図を作成する過程で、実践の内容やその結果を客観的にとらえることができたのではないかと思います。その中で一つ残念だったのは、関係性の図が実践ごとに独立したものになっているので、これが実践を経ることでどんな風に発展や深まりを見せていったのかがわかるような連続性のある図になると、オリジナリティあふれる報告になったのではないのでしょうか。あと、タイトルの「子どもとの関係性」と内容が少しずれているように感じますので、「子どもの遊びが広がる」と「関係性の発展」を絡めてタイトルをつけてみてはいかがでしょうか。各実践において、子どもたちの姿が生き生きと記録されている本報告は同じ保育現場にいる人間として、とても楽しく読ませていただきました。今後の更なる保育実践にご期待申し上げます。

課題② 遊びと学び 日常保育を大切にした行事の実践 —発表会の改革を通じて—

千葉県・布佐宝保育園 荒井 祐子

1. 実践の背景

1. 1 問題意識と目的

当園では、子どもの遊びを通してアクティブラーニング〔教育・保育要領〕を実践していく為に、数年前から継続的に行事や日々の教育・保育実践の見直しを行っている。

しかし、夏まつりや運動会・発表会などの大きな行事が近づくに連れて、行事の練習に追われてしまう現状があった。課題は「遊ぶ時間」と「練習時間」が分断されていることである。

従来の発表会を振り返ると、発表内容に沿って子どもを指示通りに練習させ、台詞や歌詞を覚えさせるために「主体的・対話的」な活動になりにくく、結果として必ずしも「深い学び」にはつながっていなかった。

また、当日までは一定期間練習に追われ、当日の発表が終わると、再び「遊びを通して学ぶ保育」に戻っており、いわゆる「行事のための練習」という現状に対して、担任自身が葛藤していた。

そこで、新たな形の発表会を模索する過程で、日常保育の連続性を保障しつつ、生活や遊びを通して「資質・能力（知識及び技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力・人間性等）」が育めるような「カリキュラム・マネジメント」〔汐見稔幸2017〕について考えていくことにした。

1. 2 クラスの様子

2019年10月の運動会が終わると、担任はすぐに12月の発表会に向けて準備に取りかかった。担任が、発表会で使用する衣装を準備していると「先生、発表会は何やるの？」と子ども達が興味津々に尋ねてきた。

帰りの会で、発表会ではどのような演目を行いたいかと聞かされると「虫のことを教えたい」「光る団子の作り方を見てほしい」「YouTubeごっこをしたい」など、普段自分たちがしている日常的な遊びから連想する意見が多く出た。劇や合奏など、いかにも発表会にふさわしいと大人が考えることとは大きく異なる内容であった。

数日かけて、子ども達と発表会の内容を話し合った。話し合いでは、子ども達一人ひとりが納得した発表にする為、担任が過去の実践に捉われず、出来るだけ子どもの意見を引き出すように心掛けた。子どもたちの意欲的な姿に後押しされ、年長児の演目は「遊びや生活の中で知ったこと・できるようになったこと」などを披露する

ことに決まった。「発表会とはこういうもの」という例に捉われていた担任の気持ちも少しずつ変化した。

劇以外の演目に挑戦する事が初めてであり、担任は不安を抱いたが、子どもと担任で対話を重ね、試行錯誤をしながら作り上げていくこととなった。

1. 3 保護者への情報発信

発表会は保護者が参観を楽しみにしている行事である為、例年とは大きく異なる内容になることを、丁寧に説明する必要があると考えた。そこで、以下の2つの取り組みを行った。

まず、2019年4月から希望する全保護者を対象に「一日先生体験（保育参加）」を実施した。目的は「友達同士の関わり」や「保育園での活動」を知ってもらうことである。これまで、「毎日、紙ひこうきしか作って来ない」「ただ遊んでいるだけ」と不安になっていた保護者も、「一日先生体験」を通して、遊びの中での学びや保育のねらいなどを知る機会になった。

次に、月2回以上発行したクラスだよりでは、保育園での活動を「見える化」するよう心掛けた。写真を活用しながら、より具体的な遊びの様子や、それらの遊びを通して得られる学びについて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔教育・保育要領〕を参考にしながら発信した。

年間を通じて、これらの情報発信を丁寧にやっていくことにより、保護者は「発表会の形式が変わること」を肯定的に受け止めてくれた。発表会だけでなく、「遊びを通して学ぶ保育」そのものについて、理解を深めてもらうことができたと考えている。（写真1）

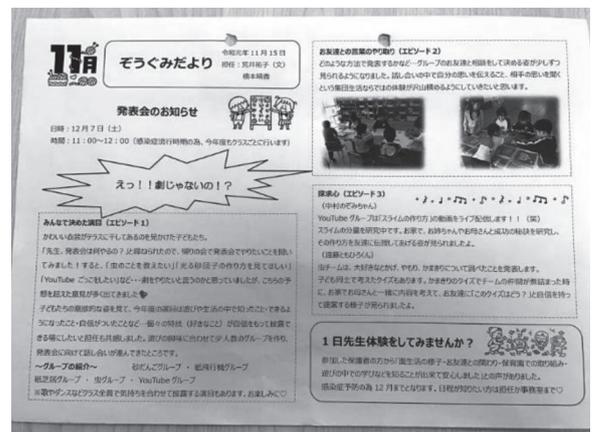


写真1：クラスだより

2. 展開

2. 1 進め方

興味の対象に応じて少人数の5つのグループを作った。グループの仲間と相談しながら発表内容を決めていった。どのグループも、遊びの中で体得したことをたくさん見てもらいたいという気持ちが強い様子が伺えた。

発表時間の兼ね合いから1グループ7～8分という時間の枠がある中で、子ども達の思いを汲み取りながら、日常の遊びを発表形式にまとめていくことに難しさを感じた。担任もグループの話し合いに入り、子ども達との対話を通して、気づきを与えたり、イメージが膨らむように援助をした。(表1)

2. 2 実践過程での学びや育ち

話し合いを続けていくと、「今日は長い針が5までやろう」などと、自分たちで見通しを持って取り組む姿が見られるようになった。

発表内容が決まってくると、「なぜ・どうして?」と不思議に思ったことを休日に親子で調べる家庭も出てきた。繰り返し実践を積み、失敗を経験することで、探求心や思考力が育まれ「深い学び」を獲得している様子が伺えた。

遊びの中でも以下のように、体得した知識や技能を友達や担任に積極的に教える姿が見られるようになった。

【事例1 虫グループ】

2019年6月初旬、男児を中心に、かぶと虫が幼虫から成虫になったことをきっかけに、生き物に興味を持ち始めた。

初めは、季節の虫を捕まえて満足し、餌を与えずに死んでしまうこともあった。夏の間はカブト虫が沢山いたので、死んでしまっても「また捕まえたらいいよ」と言っていて、それほど悲しむ様子は見られなかった。

10月、園庭で見つけたカナヘビを飼いたいという子ど

も達の熱意を見守ることになった。ところが、飼育環境もわからなかったので、子どもと担任で毎日図鑑を見てカナヘビについて調べた。蝶々や蜘蛛が餌であることを知り、飼育する大変さを痛感した。餌は毎日食べないこと、大きすぎる蜘蛛は食べないことなど、飼って見なければわからないことを沢山知ることが出来た。少しずつ愛着と責任感が強くなっていく様子が伺えた。

12月、大切に飼育していたカナヘビを誤って三輪車でひいて死なせてしまった。

その後、自分たちで園庭にお墓を作って埋める姿が見られた。子ども達なりに「死」を受け止め、理解しようとしているのだと感じた。

発表会後も虫探しは続いた。年中男児も刺激を受けて「ぞうぐみさん、一緒にカナヘビ探ししようよ」「僕たちカナヘビ捕まえたから、見に来てよ」と誘われる場面があった。しかし、虫グループはこれまでの経験から「お部屋に入る前に逃がしてあげようよ」「死んじゃったら可哀想だよ」などと、子ども達なりに小さい子へ命の重さを伝える様子が見られた。

【事例2 YouTubeグループ】

2019年8月、子ども達の遊びでYouTubeごっこが流行り始めた。最初は「スライム作り」の再現を楽しんでいたが、担任に「私達も本物のスライムを作りたい」と訴えるようになった。

以前から、担任が作ったスライムで何度も遊び、作る過程を見ていたので、何となく作り方は把握しているようだった。実際に子ども達が作ってみると、液体のり・水・ホウ砂の分量や配合手順によって手触りが異なったり、固まらないこともあった。失敗を何度も繰り返しているうちに「液体のりが勿体ないから、成功するまでは少しずつ作ろうよ」と言い、廃材の卵パックを利用することで、様々な割合や配合手順で試すようになった。

実験中に「ホウ砂」が少量子どもの目に飛んでしまう

表1

グループ名	発表内容
絵本グループ	手遊びと『おおきなかぶ』の絵本の読み聞かせを行う。
砂団子グループ	砂団子の個人作品の披露と作り方を紹介する。
YouTubeグループ	スライムの作り方を紹介し、実践をする。保護者にも触ってもらい、感想を聞く。
紙ひこうきグループ	紙ひこうきの折り方を説明し、保護者にも一緒に折ってもらう。
虫グループ	園庭で捕まえた「カナヘビ」「やもり」「かまきり」の飼育方法を発表する。保護者向けに、それらの飼育方法に関わるクイズを行う。

事故があった。(大事には至らなかった)そこで「ホウ砂」の代わりにする物を見つけることになった。家庭で調べる子もいたが、数日間答えが見つからないと熱意が冷めてしまう子も出てきた。最終的に「コンタクト液と重曹」で代用できることが分かり、子どもに知らせると、再び喜んで実験する姿が見られた。最適な「コンタクト液と重曹」の割合を見出し、パステルで色付けをしたりハンドソープを混ぜたりしながら、楽しむようになった。

その後、他グループや異年齢にもスライムを作っている姿が見られるようになった。子ども達なりに「楽しさを共有したい」という気持ちの芽生えとなった。

【事例3 砂団子グループ】

当園では女兒に人気の高い遊びである。作ったり壊したりを繰り返しながら、納得がいくまで作る過程でコツを発見した。

まず、園庭の砂をふるいにかけて、小石を取り除くことで丈夫な砂団子になることを学んだ。次に、成形したら手や布で磨き、3～4日間乾燥させることによって、表面が光る砂団子になることを知った。

数日かけて作ることで砂団子に愛着が湧き、友達同士で見せ合う姿が見られた。仲間の作品を「きれいだね」「上手だね」と褒め合う姿から「言葉のやり取り」を経験した。友達の作品を誤って壊してしまった時は、申し訳ないという表情を見せて謝り、自分の砂団子をその友達にあげる姿が見られた。一生懸命作り上げる大変さを体験したからこそのであろう。

砂団子チームに刺激を受けて、今まで興味を示さなかった男児が興味を持って挑戦する様子が見られた。小さいクラスの子に砂団子を作っている姿も増えた。少しずつ、他クラスの担任にも砂団子作りのブームが広がっていった。年長児の作品に憧れを抱き「私も、ぞう組さんのようなきれいな砂団子を作りたい」と、目標にされる存在となった。

友達や異年齢に知識や技能を教えることで、自信へつながった。(写真2)



写真2：砂団子の制作過程

2.3 友達との関わり

自分の思いを積極的に伝える子、友達の思いを上手に受け止める子、リーダーシップをとって意見をまとめる子など、性格による多様性が見られた。

Rが強い口調で発言をしたことをきっかけに、グループ内でトラブルが起きることが多々あった。発表会の内容ではなく、トラブルの原因や解決について話し合う日もあった。

友達同士のトラブルが多いという現状に直面した担任は、発表会どころではないという気持ちにもなった。不安になる担任を差し置き、トラブルを仲立ちする子も出てきた。

次第に子ども同士で役割分担をするようになった。グループの一員としての自覚が芽生えると、安心して自分の気持ちを表現し、「ハンドソープを入れてスライムを作ってみようよ。そうしたら、ふわふわになるかもしれないよ」と考えを提案する姿が増えていった。「Nちゃんの考えいいね」「面白そうだから、やってみよう」などと、友達の良いところを認め合える関係性へ変化した。

話し合いを通して、協調性や協同性などの「社会情緒的スキル」や「非認知能力」が育まれたと感じている。発表会に向けた取り組みの過程が、幼児期に大切な「友達との関わり方」を学ぶ良い機会となった。(写真3)



写真3：話し合い

2.4 当日の様子

これまでの発表会は、保護者は単に観覧するだけの「一方通行型」であった。しかしながら、保護者にも参加してもらった「双方向型」にしたことで、虫クイズや紙ひこうき作りなど、子ども達の興味を親子で楽しむ機会となった。保護者の笑顔や笑い声が安心感となって、子ども達が自分の言葉で自信を持って発表する様子が見られた。

絵本チームの発表では「Aちゃん、ひらがながすらすら読めてすごいね。」などと、保護者同士の会話もあった。我が子だけでなく、一人ひとりの特技や長所を会場全体で認め合うあたたかい雰囲気を作られた。(写真4、5)

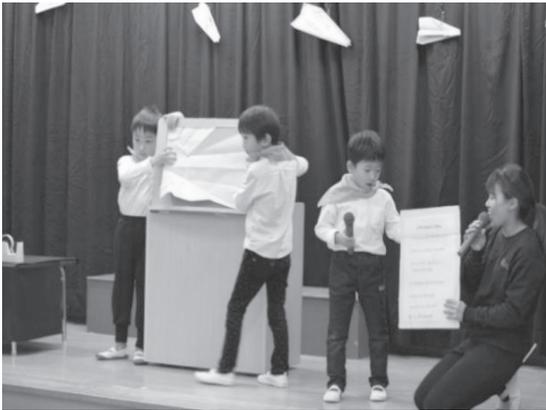


写真4：紙ひこうきグループの発表



写真5：紙ひこうき作りに挑戦する保護者

各グループの入れ替え時間を活用して、担任が保護者に日常の様子を伝えた。

主に「遊びが深まった経緯」「遊びを通して学んでいること」「友達との関わり」について話をした。具体的なエピソードを伝えることで、納得して聞いてくれる姿が印象的だった。子ども達から「発表会でYouTubeごっこをしたい」と言われた時の担任の驚いた気持ちも伝えた。なぜなら、担任自身が「発表会は、練習した成果を見せる場」という固定観念にとらわれていたからだ。子どもの思いを聞く中で「YouTube」は、発表スタイルの一部に過ぎないことを理解した。スライムができるまでの過程で「諦めない心」や「思考力」が育まれていることも伝えた。1つの遊びの中に、様々な心の育ちと学びの要素が含まれていることに担任自身が気付くことが出来た。また、これらの体験が就学後の学習につながるように援助していることを知らせると、保護者は安心した表情に変化した。乳幼児期の遊びの大切さや体験の質の重要性を共有する機会となった。(写真6)



写真6：YouTubeグループの発表

3. 結果

3. 1 発表会後の子どもの様子

発表会ごっこは、他クラスの保育者や異年齢児を招待して継続した。自分の特技を見てほしいという気持ちが強くなり、自信につながる様子が見られた。仲間と協力

をしながら表現する喜びや楽しさを存分に味わっているようだった。

遊びの展開においては、豊かになった知識や経験を基に、工夫に富んだ遊び方をするようになった。紙ひこうき作りでは、父親と「発射台」を作って、友達に教える姿が見られた。タイマーを使って飛行滞空時間を競い合うなど、新たな遊び方を見出し、より興味を深める様子が伺えた。

絵本グループに刺激を受け、文字や数に対して苦手意識を抱いていた子が自分から絵本を手取る姿が見られた。数量・図形、文字等への関心感覚〔教育・保育要領〕が高まり、かるたやすごろくなどの遊びに興味を示すようになった。クラスとしては、グループ以外の遊びにも興味を持つようになった。園全体では、年長児の様子を観察して真似をしながら遊びをより深めている姿が見られた。

3. 2 担任及び職員間に及ぼした影響

自由遊びを行っている時、誰が・どこで・どのような遊びをしているかという状況把握が担任だけでは難しかった。「Yちゃんが、虫を探して餌を図鑑で調べていたよ」、「Rくんが、友達の話聞きながらスライムを作っていたよ」などと職員間で情報共有を行うことで、遊びの様子や友達との関わり方において、子ども達の新たな一面を知ることが出来た。他クラスの保育者が関わることで、子ども達に様々な視点からアプローチが出来て、成長を促せる機会でもあった。担任は特に行事前になると、緊張感や焦燥感を抱くことが多いが、それらを緩和してくれる同僚の存在が大きいことを痛感した。

職員間の変化として、「遊びを通して学ぶ保育」の重要性を再認識する機会となった。年長児の遊ぶ様子を見守るだけでなく「一緒に遊ぶ姿」が増え、気づきや学びを与えられるような言葉掛けや関わり方を意識するようになっていった。

それでも、職員の遊びの経験の少なさが原因で、子どものしている遊びの面白さがわからない課題を感じる場面があった。職員の資質向上においては、子どもの興味

や成長を捉えて共有することが大切だと考え、園内研修を行っている。子どもと同じ遊びを体験する機会も試みている。今後も園内研修を通して、保育の振り返りを大切にしていきたい。

4. 考察

今回の実践では、子どもの興味に応じた内容を取り入れた為、日常保育と行事に連続性を持つことが出来、「深い学び」が得られたように思う。また、子ども達が興味・関心の対象に、意欲的に関わろうとする姿から「主体性」が見られ、担任との双方向型のコミュニケーションによって「対話」という点も実践出来たように考えている。

当日以降、子ども達の学びの意欲は、さらに高まり「挑戦」する気持ちや「知的好奇心」が育まれていった。子ども達は日々、遊びの中で沢山の「ふしぎ」に出会っている。この「ふしぎ」の理由1つ1つを担任が説明していたら、「ふしぎ」に対する興味も集中力も行動力も萎えてしまう。幼児期に必要なのは自分で「ふしぎ」と感じる体験である。そして、その「ふしぎ」に心ゆくまで浸ることのできる環境が大切であることを私は認識した。

よって、子ども達の豊富な体験を学びにつなげていくには、担任が行う適切な援助（環境設定や言葉がけ）が不可欠であることを理解した。[河村茂雄2019]

保育園にいる間に沢山の「ふしぎ」を見つけ、その謎を考える力をつけてほしいと感じる。

5. 今後の課題 — 保育行事

新型コロナウイルス感染症を契機として、子どもと保

護者が一堂に会して行事を実施することが難しい状況となった。

運動会は内容等を縮小し実施する方向で検討していたが、参加者が200人以上になり、密を避けることが難しく、マスクを着用して運動することで熱中症の危険が高まるという点から、今年度の運動会は中止することとした。発表会についても同様に中止することになった。

しかし、こうした状況は、職員間で「行事本来の目的」を根本から見直す貴重な機会となった。「できなくて残念だった」で終わらせては、子どもの成長や学びの機会を奪ってしまいかねない。これまで、当たり前のように毎年繰り返していたことの意味を問い直すことで、職員の学びにつながったように思う。

それでも、保育行事を中止にしたことに対し、「子どもや保護者にとって本当に良かったのだろうか？」と悩むことがある。今後も「子どもの姿」に基づき、保育内容を園全体で創意工夫していきたい。

参考文献：

[教育・保育要領]

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』内閣府，平成29年告示

[汐見稔幸2017]

汐見稔幸『さあ、子どもたちの「未来」話ませんか』小学館，2017年

[河村茂雄2019]

河村茂雄「新学習指導要領における保幼小連携の取り組み」『指導と評価』図書文化、2019年10月号

評者：石川 昭義

日常保育の連続性という観点からこれまでの行事（発表会）のあり方を考え直し、新しい実践を試みた報告です。例年とは違うやり方になることを保護者に理解してもらうために、「一日保育体験」を実施したり、クラスだよりを工夫したりして、情報発信を丁寧に行ったことは評価できます。

発表会は、グループ発表形式に変更されました。グループごとの発表までの過程が描かれ、子どもながらの試行錯誤や発見があったことが生き生きと描かれています。その様子は保育者が前例や固定観念にとらわれていたことから解放されていく様子でもありました。一つの遊びの中に様々な心の育ちと学びの要素が含まれていることを担任自身が気づくことができたことは、保護者への説明の力をつけるという意味でも大変よかったと思います。

報告書の「問題意識と目的」には、「カリキュラム・マネジメントについて考えていく」とされていましたが、その点に関する考察がもっとなされるとよかったです。報告書には、「深い学び」、「非認知能力が育まれた」の表現が出てきますが、園側の見解とともに、具体的な場面やエピソードが添えられると、それらの意味の理解がより進んだと思われそうです。

評者：馬場 耕一郎

行事のための練習から脱却という気づきから生まれた研究であり、多くの保育所の悩みである行事の在り方について一石を投じることになったと言えます。前例に捉われてしまいがちな保育の現場を変えることは容易ではないと思いますが、職員間での情報共有が行われ、「遊びを通して学ぶ保育」の重要性を再認識されたことは多くの保育所が見習うべき点であると思います。また、子ども

たちが話し合う場面を丁寧に観察し、見通しを持って取り組む姿へと導いた点は、保育の質を向上する上で大変重要であったと思います。また、保護者に対して、丁寧に情報発信を行ったことにより理解が深まり、「遊びや生活の中で知ったこと・できるようになったこと」などを披露することを受入れてもらえることに繋がったと思います。今後も継続して行事本来の目的を見直し、保育の質向上に励んで頂き子どもたちの主体性を育む保育を実践していただくことを願っています。

評者：田和 由里子

日常保育で行ってきたことを「新たな形の発表会」として、過去の実践に捉われずできる限り子どもの意見を引き出し、年長児は「遊びや生活の中で知ったこと・できるようになったこと」を念頭に置き内容を検討されていました。また、例年とは異なる発表であることを「保育参加」や「クラスだより」も写真を活用して「見える化」をするなど工夫も見られました。各グループの取り組みの状況も簡潔にまとめられていました。

友だちと意見を交わしながら協調性や共同性などの「社会情動的スキル」や「非認知能力」が育まれたことは、幼児期に大切な「友だちとの関わり方」を学ぶ機会が持たれたこととして良い学びとなったと思われそうです。当日の様子も写真などを掲載されており、保護者も参加して微笑ましい様子が伺えました。5つのグループでしたが、掲載された実践例は3グループだったので残りのグループの内容も詳しく知りたかったです。今後の行事の取り組みも「中止」ではなく「行事を行う」ことを前提に職員全員で工夫して行って下さい。子どもたちは、自分が頑張っている姿を保護者に見てもらうことで成長が見られます。次年度は、他の行事の見直しなどを検討して応募して頂けると期待しています。

食事に課題がある子どもの取り組み

福岡県・青葉やまと保育園 坂本 向子

I. はじめに

＜動機＞

現在、1・2歳混合クラスのクラスリーダーで保育園に勤め20年目の節目の年である。

今年度は新型コロナウイルスの影響で様々な研修や行事が簡素化した。

この機会に食事に課題がある子どもに対しての取り組みをまとめ、今後の保育に活かせればと思い臨んだ。

食事に関しては、18年前も園内の研修（自己啓発の取り組み）において、当時8ヶ月（現在18歳）家庭では母乳中心の生活の為、離乳食が進まなかったK子について担当のT・K保育士と共に取り組み改善に向かった経緯がある。その後も、未満児クラスの担任をしながら、毎

年様々な子どもの食事の課題に直面してきた。

今年度は特に食事面以外にも課題がある子どもがクラスにおり、取り組みにより無理なく摂取出来るようになり、食事を意欲的に楽しく食べられるようになればと願い、過去の経験も活かしながら子どもに合わせたアプローチを試みている。

II. 方法

- ① 家庭での食事の内容や食べ方を母親に聞き子どもを知る。
- ② 子どもの食べ方や食事の姿をビデオに撮影し分析する。
- ③ 個々のアプローチを考え実践する。

II-① 2020年4月 年度初めの対象児3名の様子

入園時の状況	A子（新入園児） 2018年9月生まれ 1歳7ヶ月 小学4年の兄がいる。	B子（新入園児） 2017年10月生まれ 2歳6ヶ月	C子（進級児） 2018年2月生まれ 2歳2ヶ月 保育歴 1年2ヶ月
園での食事	園の食事に慣れない為、自らは食べようとしない。取り込むが舌先で押し出す。	椅子に座るとのけぞり奇声を発する。 お茶以外は口にしない。	吸い食べが見られる。苦手な物が多く、見た目拒む。 (例) ひき肉・青み魚
家庭の食事	濃い味の物（漬物） ワンパターンな内容 兄と同じ物（アイス・スナック菓子）を夕食後に食べる習慣がある。 おやつを好み夕食はあまり食べない。	白米は食べない為、ゆかり等のふりかけを混ぜている。 ナゲット等の加工品や唐揚げを好む。 野菜や汁物は苦手な偏食がある。	かぼちゃや白身魚等、舌でつぶせる食材を好む。
その他	母親の食べさせ方に特徴がある。 膝に抱っこをして一口食べさせる度に過剰に喜び、体を上下に揺らして褒める。	不安で泣いて過ごし睡眠がとれない。 家庭・園の睡眠が共にとりにくい為日課が定まらず、情緒にも影響が見られる。	発音が明瞭でなく舌の動きがぎこちない。 話し方が母親に似ている。 (母親が難聴で内耳に機械を入れており聴覚に障害がある。)
考えられる食べない要因	様々な食べ物の経験が少ない。舌の動きが離乳食中期の段階でありあまり動いていない。 前歯での食いちぎりの経験が少ない。	過敏性やこだわりが強い。 言葉の遅れが見られ発達課題が関係している。口腔内の発達がゆっくりである。	口に溜めて食べる習慣になっている。 舌の動きと咀嚼と嚥下の連動が育っていない。 原始反射が消えていないのではないか。

日課	22時 就寝 7時 起床 9時 登園 17時 降園 7時30分 朝食 11時 昼食 19時 夕食	22時 就寝 7時 起床 9時 登園 17時 降園 7時30分 朝食 11時 昼食 19時 夕食	23時 就寝 7時 起床 8時 登園 17時 降園 7時30分 朝食 11時 昼食 19時 夕食
今後の見通し	園に慣れれば、摂取量が増えるのではないかと予測される。 奥歯で噛む経験が増えれば舌の動きが育つ。	環境に慣れる事で食事に向かう兆しが生まれるのではないかと。	苦手意識を克服出来れば意欲も育つのではないかとと思われる。

II-② ビデオ分析と食べ方の経過（撮影日 7月15日）

※分析と考察は一部抜粋

◆A子 7月の姿（1歳10ヶ月）

- ・口が開いている事が多い。 ・口の中央で食べる事が多い。（写真②）
- ・スプーンの握り方は先端を持つ握り方（写真③）
食べている途中に下握りになったり持ち直すと上握りへと変化したりする。
- ・お椀を指先で持つ。
- ・お茶や汁を飲む時に脇が閉じている。等

II-③ 主なアプローチ

※食事の工夫

- ・普通食から離乳食後期に段階を下げる。
（濃い味付けに慣れているので、通常の離乳食に味を少しプラスする。）
- ・野菜スティックやサイコロ型の野菜等、手づかみ食を

取り入れる。

- ・口を閉じて食べるように言葉掛けと口の動きのモデルを示す。
- ＊遊びを通しての援助
- ・安定した持ち方となるよう遊びの中で握ったりつまんだりあけ移したりする。
- ・五指でしっかり持てるようにわし掴み等、手指を使って遊ぶ。
- ・肘や肩の動きを促すために壁面や立位での遊びに誘う。
- ・舌の動きを表情遊びやわらべ歌で促す。

～食べ方の経過～ A子 10月の姿（2歳1ヶ月）

7月（1歳10ヶ月）に完了食、8月（1歳11ヶ月）に普通食に移行、その後完食するようになった。時々口の中に溜める食べが見られる等、食材によっては時間を要するので、一口量を減らし介助し食べにくかった物は給食に伝える。（例）豚肉の大きさ、野菜の固さ



（写真①）つまみ方



（写真②）口の動き



（写真③）スプーンの持ち方



（写真④）
コップの持ち方が上手になる。



（写真⑤）
スプーンの持ち方が安定しつつある。



（写真⑥）肘が上がる。

◆B子 7月の姿（2歳9ヶ月）

- ・口の中で処理出来ない物を担当保育士に視線で伝えている。
- ・左手で押し込む。
- ・一口量が分からず詰め込んで食べ、口が開く。
- ・あまり噛まずに飲み込む。
- ・時折下唇が出る。
- ・唇を使わず口の中に入れて舐めてから出す。
- ・周りが気になって横を向く。

Ⅱ-③ 主なアプローチ

*家庭との連携

（※母親と園長・担任三人で個人面談し、どのような物を家で食べているのかを尋ねる。）

- ・なるべく薄味にしてもらう。
- ・前歯で食いちぎって食べる物や、野菜スティックを取り入れてもらう。（写真⑦）
- ・家庭で使っている食器（スプーンとフォークを1ヶ月間）と弁当とおやつ（チーズ・バナナ・クッキー等）を持参してもらう。持参するおかずが大きく、本児にとって食べにくさが見られるので、一口サイズに切ってもらう。（写真⑧）
- ・食べた物や量を給食や展示食を見せながら知らせ家でも様々な物を試してもらう。

*食事の工夫

- ・おやつ等、本児が食べられる物を食事の時間にも提供する。

- ・食べたい時、席に着いた時に食べ、保育士の正面の席に座らせる。

- ・食欲のある子どもと一緒に食べる。（写真⑨）

*遊びを通しての援助

- ・口でのいじり遊びが出来る遊具の提供
- ・担当保育士と1対1の関わりを増やし信頼関係を築いていく。

～食べ方の経過～ B子 10月の姿（3歳）

4月からの2か月間は、全く食べようとしなかったが、食器や弁当・おやつを持参してもらう事で少しずつ食べるようになった。次の1週間はおかずのみを持ってきてもらう等、徐々に給食に移行し、8月中旬からは園の食事のみ提供した。その頃には食事の用意を始めると自ら席に座り楽しみに待つようになり、食に対する意欲が感じられるようになった。

食事中気が散りやすかったが改善に向かい、奇声も無くなった。

現在（11月）もスープや牛乳は一口も飲まないが、おかわりがしたくて苦手な物を一口、口に入れる（その後出す）姿も見られつつある。最近はパズルのピースを舐める等、口でのいじり遊びが多く見られ、単語を発するようになっている。

※8月と10月に発達支援相談施設（ハート館）に行き言葉と睡眠について見てもらう。（家庭と園との睡眠時間のデータを持参）



(写真⑦)



(写真⑧)



(写真⑨)



(写真⑩)
初めてチーズを食べる。(7/31)



(写真⑪)
ビビンバ丼を自ら口にする。(8/20)



(写真⑫)
重ねてある食器を自分で食器を広げる。(9/14)

◆C子 7月の姿（2歳5ヶ月）

- ・スプーンを下握りで持ち握り方にぎこちなさがある。
- ・肘が下がっている。
- ・前歯の裏に舌で押し付けつぶそうとしたり、舌で潰して食べようとしたりする。
- ・魚が口の中に残っている状態でご飯を口に運ぶ。

II-③ 主なアプローチ

* 食事の工夫

- ・食べにくい食材は刻む。7月（2歳5ヶ月）から完了食へ
- ・上握りを促し、肘を上げて食べられるようにする。
- ・魚とご飯を一緒にする事で食べやすくする。
- ・食べられないメニューの中にも食べられる食材があるので、「食べられるものがある」と知る経験を増やし食べられた事に共感し、本児の苦手意識を自信へと繋げていく。



(写真⑬)
食べたい量を保育士が尋ね目の前で配膳する。

*遊びを通しての援助

- ・肘や脇の上げ下げを促すために立位での遊びやテラスでのボール遊びに誘う。
- ・お腹を空かせるために体を動かす遊びに誘う。

～食べ方の経過～ C子 10月の様子（2歳8ヶ月）

母親が妊娠し（2月出産予定）赤ちゃん返りの兆しもある。

食事面でも介助を以前よりも多く求めたり甘えや依存、拒絶等の心理的な変化も感じられたりするが、苦手な物が食べられた時に他の保育士に「～食べたよ。」と嬉しそうに伝える等、自己肯定感の育ちが感じられる。

2歳6ヶ月（8月）から普通食に移行したが、苦手な物はご飯と混ぜて食べる等、自分で工夫し食べられるようになりおかわりもするようになった。

見た目で躊躇しても介助により一口食べると自ら口に運び食べ始め、運動発達の向上と共に身体を動かして活発に遊ぶようになり、遊びと食事共に積極的になってきた。



(写真⑭)
上握りの持ち方が安定する。

III. 考察

① ビデオ分析の取り組みより

食事は食べる事や姿勢等のマナーに目が向きがちだが、子どもが楽しく食べる事を大切にすることで自然に身についていく事が望ましい。更に栄養士と一緒にビデオを見る事でも、作り手側から食材の切り方の改善点、気になる子どもの食べ方についての共通認識が出来る。



(写真⑮)
子どもスプーンは小（右）へ



(写真⑯)
平な介助スプーン（左）から
（右は離乳食初期 すすり飲み用カレースプーン）

※A子・B子は小スプーンを9月まで使用（一口量が少なく食べやすい為）

③咀嚼について

・噛む事は唇を使って食べ物を口の中に入れる捕食から始まる。

・取り込みを促す事で、唇を閉じる力や舌、首等の筋肉が鍛えられる。

食べ物を放りこむと咀嚼力が育たない。1歳半～2歳咀嚼の臨界期（咀嚼能力の獲得期）

・子どもの摂食機能に合わせた食事内容が重要
舌や顎の動き等、食べ方の特徴に合わせて援助していく。

・一口量が多いと食べにくく、丸呑みになりやすいので一口量を知らせる。

手づかみ食の効果⇒前歯での食いちぎりや奥歯で噛む行為を促す。一口量を知る。

指でつまむ。握って口まで運ぶ距離感をつかむ。

肘の上げ下げ。脇が開くようになりスプーンの持ち方へ繋がる。

◇食事が改善に向かった3人の共通点

ビデオ分析によるアプローチ

- ・ビデオで撮影し、食べ方・口の動きを知り、個の特徴を知る事で援助に活かした。
- ・介助の基本を知り、食べさせ方や適切な介助を心掛け、個に合わせた工夫を実践した。

大切にしたこと

- ・育児や遊びを通して、担当保育士との関係性を築いた。
- ・保育士が余裕を持ちゆったりとした雰囲気ですべての事で食欲に繋がった。
- ・子どもの自主性を尊重し「自分で食べたい」という意欲を支えるようにした。
子ども自身の食事と捉え、保育士が食べさせるのではなく指差した物や見た物を介助し、口にしていない物は言葉掛けを工夫した。
- ・完食という大きな目標ではなく、まずは口にすると等スモールステップを喜ぶようにした。

- ・座る席の位置や、良く食べる子どもと一緒に食べる等、楽しく食べられる工夫をした。

連携の大切さ

- ・保護者との連携
登降園時、子どもの前で保護者と話す事でコミュニケーションを図り、子どもが安心感を得られた。お便り帳や連絡ノート（子どもの様子・睡眠・食事内容・量等）のやり取りで子どもの情報を共有し合う。
- ・給食室との連携
食事時の様子を伝え食べやすさや発達に合った食事内容に配慮する。
子どもの食事風景を観察し、食べやすい物を提供する等、食事の段階を見直す。
(例) 切り方 柔らかさ とろみをつける。
- ・クラス担任との連携
育児担当保育士との関係性をクラスでサポートする。担当児と子ども、他の担任もスモールステップを喜び承認する。
- ・園長・主任にも子どもの観察に入ってもらいアドバイスを求める。

園での食育

- ・給食便りでレシピの紹介をする。
- ・食事・おやつサンプル展示
- ・園庭での菜園活動 園庭遊びの際に畑やプランターの育ちを観る。・収穫に参加する。
- ・遊具にフェルトの野菜や果物を取り入れる。・野菜スタンプで遊ぶ等
- ・食事をする楽しみが生まれるような食生活を作っていく。

◇何のためにするか

- ・身体の栄養と心も満たされ健康に過ごせるようになる。
- ・色々な食材に慣れ食べる経験を増やし、バランス良く食べるようになる。
- ・自分で食べる為の機能を促し、幼児期までに食べ方の基礎が身に付くようにする。



(写真⑰)



(写真⑱)

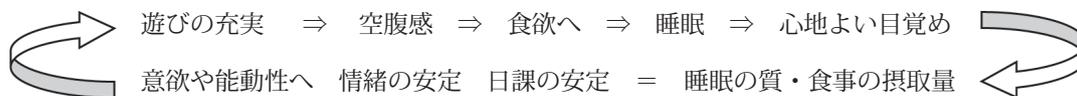


(写真⑲)

遊びの内容の充実

- ・身体を動かす粗大遊びと手先を使う微細遊びのバランスにより身体も脳も適度に疲れる。

- ・わらべ歌をうたう事で心地良さを感じ、口輪筋や表情筋を使う。
- ・園庭やテラスで日光を浴び外気に触れる。



◇園児のメンタル面が食事の摂取に与える影響について

- ・否定的な言葉や無理強いは子どもの食欲をそぐ。
- ・保育士のネガティブな思いや対応が子どもに伝わる。
- ・母親が妊娠すると、情緒面での変化が表れるので心理的背景を受け止め関わる必要がある。

園だけでは乗り越えにくい場合、支援センターや病院等の専門機関からアドバイスをもらう等、地域資源を活用する事で、更に効果的なアプローチが出来るので援助の参考にしたい。

◇担当する保育士のモチベーションについて

食事に課題のある子どもに様々な個別のアプローチや配慮をしても、なかなか改善に向かわない事も多く、介助しても嫌がられたり拒まれたりと心情的に苦しく、ネガティブな捉え方や葛藤も起こりやすいのではないかと感じる。特に経験が浅い保育士は子どもの姿が変わらないと自分が悪いのではと落ち込んだり、『食べない=困る』等、表情にも表れマイナスのイメージが子どもにも伝わったり、その雰囲気や周りにも影響するように思われる。

◇日課と食事時間の重要性

3人は共に就寝時間が遅く起床時間も遅くなりがちで、登園時間も遅めであり午前中遊ぶ時間が少ない為、それ程空腹を感じていなかったのではないと思われる。

給食の時間を見直す等、食事の時間に空腹を感じ、食後はスムーズに入眠するような日課に整えていく事が大事であり、活発に遊ぶ時間と食事の間隔が重要である。

A子とB子は咀嚼力が弱い為、食事に時間を要しやすい。食事の後半は疲れが見られ噛みずくに口の中に食材が溜まりやすく、表情にも疲れが見られる。

食事の時間が長過ぎると子どものストレスになる。

(子どもの集中力が保てる20分から25分程が望ましいと思われる。)

食事に限らず課題のある子どもに対して、担当する保育士が一人で抱え込まないようなチームワークと、保護者との連携が必須である。

10月の様子	A子(2歳1ヶ月)	B子(3歳)	C子(2歳8ヶ月)
家庭の睡眠時間 (夜の睡眠時間)	21時30分 就寝 7時 起床 (9時間30分)	22時 就寝 7時 起床 (9時間)	22時~23時 就寝 7時 起床 (8~9時間)
園での睡眠時間 (昼寝の時間) 1日の睡眠時間	12時20分 14時50分 (2時間30分) 計 12時間	13時00分 14時30分 (1時間30分) 計 10時間30分	12時30分 14時30分 (2時間) 計 10~11時間
朝食 給食時間 食事の間隔	8時 12時 4時間	8時15分 11時15分 3時間	7時30分 11時30分 4時間
日課から考えられる課題	就寝時間がやや遅い。	就寝しにくく朝目覚めにくい。自立入眠が難しい。	家庭での就寝時間が定まっていない。

【食事の間隔や睡眠時間の目安】 『乳児保育』 アクサリナより参照

年齢	食事の間隔	1日の睡眠の総量	夜の睡眠時間（昼寝の時間）
1歳半～2歳	3・5～4時間	12・5～13・5時間	10～11時間（2・5～3）
2歳～3歳	3・5～4時間	12～12・5時間	10～11時間（2～2・5）
3歳～4歳	3・5～4時間	12～12・5時間	10・5～10時間（2）

今後の課題

10月から入園した新入園児S（1歳4ヶ月）は、入園面接の時に、「母乳以外口にしないで困っている。父親も単身赴任中で頼る人がいないのでこの状態では断乳出来ず入園してから心配」と相談を受けた。この母親は、他県に食べない子どもの外来がある病院の事をリサーチして、保育士にその情報を伝える等、前向きである。（現在赤ちゃんせんべいは口にできるようになった。）

Sのように協力的な家庭もあれば、哺乳瓶でミルクを飲ませて朝食を食べずに登園する2歳児の姿もある等、背景には家庭環境が関係する事が多い。このように子どもの食事を問題視していない保護者もいれば、誰にも相談出来ずに悩んだり困っている人等、様々な家庭があると思うが、離乳食でつまずくと、その後の食事に大きく影響があり改善に向かいにくい。

当園でも0歳児クラスからの進級児に、咀嚼に課題がある子どもが増えているように感じている。子どもの摂食機能の形成において次の段階へ進むタイミングを保育士が的確につかむ必要性があり、特に普通食への移行の見極めは重要である。

課題がある子どもに対しては、早めのサポートや対応が必要で、家庭でも簡単に実践出来るような紹介等の工夫も必要だと思われる。食事の課題は睡眠のとりくさや運動発達、言語面や情緒面等にも関係する事が多いので、遊びや育児の中で発達を多角的に援助していく。

終わりに

今年度は新型コロナウイルスの感染予防のために家庭保育の子どもが多かった為、慣らし保育が先延ばしになる等、特別な状況だった。マスクを終日着用しているのでモグモグ等、口の動きのモデルがしにくく、表情筋・口輪筋を促す遊びが取り入れにくかったので食事時のみフェイスシールド着用することにした。

また、地域の子どもの公開保育で園生活（給食や手作りおやつを紹介）に触れてもらう機会や相談に応える場もなかった為、ホームページ等でもその機会を作っていきたい。

例年と異なる状況ではあったが、どのような状況においても子どもの健やかな発達の為に専門職である保育士が柔軟に対応し、保育士自身も支援に繋がる情報をキャッチしたり、個別支援の手立てを学び、様々な課題のある子どもに活かす効果的なスキルを身に付ける努力が必要

である。食事は全ての原動力（生きる力・意欲・発達）に繋がるので、まずはあるがままの子どもの姿を受け止め、担当児と保護者との信頼関係を築き、少しずつ必ず良くなるというポジティブな思考で、子どもの力を信じて関わる事が大切だと思われる。

講評：食事に課題がある子どもの取り組み

評者：石川 昭義

食事に課題のある子どもの一人ひとりの状況に応じて、きめ細かな配慮を行っている様子が具体的に描かれています。食事の課題を食事時間だけの問題とは捉えず、食事と関連付ける視点から普段の遊び（遊び方）にも留意している実践は保育のきめ細かさを物語っています。

保護者の理解と協力を得られるようにしていることなども参考になる事例といえます。栄養士といっしょにビデオで分析することを通して、発達の状態や道具の適合を確認したり、食事のときだけ、保育者がマスクを外してフェイスシールドを着用したりしていることは、子どもの食育を支えるうえでの他職種との連携の大切さを具体的に示しています。

食事に課題のある子どもへの個別的なアプローチでは、保護者との連携が欠かせないこと（母親からの聞き取りや睡眠データの提出など）が本文中に言及されていましたが、子どもの様子が明らかに変化したことに対する保護者の反応やそのときの保育者の心情なども書き添えられると連携の意義がよりわかりやすくなると思います。報告書については、章・節・項の構成を工夫すると全体がより読みやすくなると思います。

評者：高木 早智子

この実践報告で評価できる点は、まず考察が詳細に項目だてされており、整理されているところです。子どもの課題を多角的にとらえ分析することで、個々の子どもへのアプローチの仕方が導き出されている点も素晴らしいと思います。また、家庭への聞き取りを丁寧に行い、子どもの育ちを保育時間（給食時間）だけではなく、24時間とし

てきちんと捉え、実践を進めている点も高く評価できます。その一方で、テーマの実践が多岐にわたったがゆえに、全体として総花的になってしまったことが惜しいと思われます。たとえば、実践自体は複数の子どもにかかわっているとしても、焦点を一人の子ども又は一つの実践に置くことでも貴重な保育実践研究報告となったと思います。また報告書内に引用された資料の出典（著者・出版社等）を明記していただけると、興味を持った方が調べやすいかと思います。今後も子どもの育ちに着目した保育実践を進めていかれることをご期待申し上げます。

評者：田和 由里子

食事面以外でも課題のある子どもを選び、食事が意欲的に楽しく食べられるように取り込んだ研究をされていました。入園時の様子、園での食事、家庭での食事の様子、また睡眠や遊びなども細かく分析したものを表にまとめてあったので、比較ができわかりやすかったです。また、ビデオで撮影をして担当保育士さんや栄養士さんとの連携や保護者との連携も細かに行うことで課題を見つけ、園長や主任をはじめ園全体でサポートする姿が見られました。楽しく食事をするには、日々の活動や睡眠時間にも影響を受けることから、保護者にも協力して頂いてよい関係が得られ、子どもたちにも伝わり経験を重ねるごとに成長が見られました。食事をするときの道具までも細かく対応をされていました。離乳食から完了食までの移行がとても重要な時期だと思います。園での様子を伝え家庭での協力を得ながら今後も引き続き取り組んで頂き、この子どもたちの「その後の成長」を実践研究で発表して頂けることを期待しています。

(2) 研究奨励賞

〈自由研究部門〉

- ・雪の体験を思いっきり楽しもう！！

辺見 智子、小野寺 敦子、林 佳枝、山本 佳奈恵

(北海道 (研究会員)・旭川認定こども園)

- ・つぶやきから広がる豊かな表現 ～食育体験から生まれた“とうもろこしのうた”～

村岡 里美、秋葉 悦子、佐藤 美里 (山形県・山形認定こども園)

- ・Aくんの“わくわく”がみんなの“わいわい”になった環境構成を振り返る
西垣 浩康 (岐阜県・黒野こども園)

〈自由研究部門〉

雪の体験を思いっきり楽しもう！ ～雪あそびで育む「こころ」と「からだ」～

北海道（研究会員）・旭川認定こども園 小野寺敦子 林佳枝 山本佳奈恵
(スーパーバイザー) 辺見智子

I はじめに

当園では『育ち合い一心が育つ・からだが育つ子どもたち』を保育目標とし、四季の戸外あそびを充実させ、心の育ち・丈夫な身体作りを目指し保育を行っている。

旭川市は、12月から本格的に積雪が多くなり、例年の積雪は1mを越える。平均気温は氷点下15～20℃位となり、真冬の厳しさを約3ヵ月過ごしている。雪国育ちのこどもたちは、寒さに負けず、雪が積もると喜んで、雪山でのソリ滑りや雪だるま作り、かまくらでのおままごとあそびなどをたくさん行っている。

昨年の事例研究では、北国ならではの『雪あそび』をテーマとして取り組みを行った。これまでの雪あそびの見直しとともに、こどもたちのあそびが広がるきっかけになるように環境を構成し（道具やあそびの提案等）より一層あそびを楽しむ経験ができた。昨年の事例研究から、冬期の雪あそびは、季節を感じ、直接自然と触れ合う体験から心の育ち・丈夫な身体作りに大きな役割を果たしていることが確かめられた。

これらを土台に今年度は【触れる・慣れる】【あそぶ】【不思議・発見】をテーマとして、こどもたちの心と身体の成長を保育士間で深めていくこととした。



2. 事例から考察、分析し学習する。
3. 学習会・事例検討会を行い、保育士のまた園としての保育力を高めていく。

IV 事例と考察

【事例1】触れる・慣れる

～0. 1歳児の初めての雪あそび～

<エピソード1>

『保護者からの連絡ノートより』 1歳8ヵ月K

0歳児クラスのKは、月齢も高く室内では身体を動かしてあそぶ姿も多く活発に過ごしている。家庭で初めて雪あそびをした際の連絡ノートから・・・

保護者「休日に雪あそびをしてみたが、泣いて全く動くことが出来なかった。いつもは活発なのでびっくりした。はやく雪に慣れてあそんでほしい・・・。」と記述があった。

保育園での初めての雪あそびでは、保育士と一緒に雪の園庭に行くと、座り込むK。保「Kちゃん一緒に歩こう！」と手をとっても、座り込んだまま不安な表情のKだった。

しかし、繰り返し体験することで少しずつ慣れ、興味をもつようになった。



II 研究の目的

昨年、確かめられたことを基にして、今年度も引き続き『雪あそび』で育まれるこどもたちの姿を実践していく。雪あそびの経験・体験の継続から工夫しながら友だちと一緒に楽しみ、こどもの心と身体の成長を保育士間で確かめ課題を明らかにする。

III 研究の方法

1. 各保育士がエピソードを記録にまとめる。

<エピソード2>

『Mちゃんの「ゆき、ふわふわ～」』 1歳児M

降り積もったふわふわの雪の上にこどもが座ると、身体が沈み、雪の感触を全身で感じ楽しんでいる。

M「せんせい～ふわふわのゆきだよ！」

保「ほんとうだね！ふわふわのゆきだね！」

M「ふわふわでかわいいね～」



「ふわふわー」

考察

0歳児の雪あそびは雪の上で、座ったり、雪に触れ慣れていくことがあそびの始まりである。〈エピソード1〉では、初めは、不安もあり雪の上に立つことも難しかったが、保育士との信頼関係を基盤に少しずつ慣れ興味を持つようになったと考える。

〈エピソード2〉からは、外の様子や他児の様子などから雪に慣れてきた1歳児。雪の感触に興味をもち、「ふわふわかわいい」と自分の気持ちをことばで表現した場面であった。

【事例2】あそび (part 1)

～雪・色水・廃材でのままごとあそび～

〈エピソード1〉

『いただきまーす』 2歳児クラス

保「今日はお外の雪でおままごとしよう！」

子「やったー！」と大喜び。

雪の上にある廃材の所へ行き、たまごケース、牛乳パック、プリンケース等、好きなものに雪を入れるこどもたち。

H「わあ、おいしそう」

F「ぷりんです。はいどうぞ」

R「あむあむ、おいしい！」

かき氷を作ったKは「Hちゃん、あーん」と食べさせる真似をして嬉しそう。

黄色の色水を使ったSは「すごーい！たまごやきできたー！いただきまーす！」と見立てあそびに満足な表情で食べていた。

「Hちゃん あーん」



「いただきまーす」



〈エピソード2〉

『パーティーしよう！』 3歳児クラス

バケツにたくさん雪を入れ、逆さまにして取り出し、ケーキに見立て、あそぶこどもたち。保育士は、より本物に近づけようと、色水の種類を増やし用意した。

M「おいしいケーキつくろうね！」

A「いちごもたくさんおせて…」と小さく丸めた雪をのせていく。

M「さいごにイチゴシロップをかけたら、できあがりー！」

と赤い色水をワクワクさせながら、かけていく。

保「わ～すてきなのができたね！」

と声をかけるとAは「うん。パーティーするからね」「みんなーおいでー！」と他児に呼びかけパーティーが始まった。

M「たんじょうびおめでとう！」

子「ケーキどうぞ！」「おいしいね」

とパーティーごっこをみんなで楽しんだ。

考察

この時期のこどもたちは、ごっこあそびが大好きで見立てあそびやままごとあそび等、保育士や友だちと一緒に楽しんでいる。今回は雪を利用してごっこあそびを試してみようと考え行った。様々な素材や道具を使用して、より一層あそびを楽しめるよう工夫した。2歳児は家庭の廃材を利用したあそびが豊かに展開され、雪に色をつけたことで食べ物イメージを拡げることが出来た。3歳児になると、友だちと一緒に作ったり、出来たものを皆と共有し、あそびを発展させていく力が付いてきたと考える。



「ケーキのできあがり！」



「たくさんつくろうねー」

【事例3】あそぶ (part 2)

～手作りの米袋そりとチューブ滑り～

<エピソード1>

『世界でひとつだけの米袋そり』 4歳児クラス

保「米袋で世界にひとつだけのそりをつくろう！」と提案すると「つくりたい！」と意欲的な子どもたち。

R「きょうりゅうのえをかこう！」

K「ぼくはドラえもん！」

各々好きな絵を米袋に描き段ボールを入れ完成！『世界にひとつだけの自分のそり』が出来た。実際に雪山から滑り降り「すっこたのしい！」と大満足の子どもたちだった。



<エピソード2>

『せんせい、てつだわないで』 2歳児クラス

2歳児クラスも米袋そりすべりに挑戦！

しかし、まだバランスがうまく取れず、こども一人で座り滑っていくのが難しい。ほとんどの子は、保育士の援助の中楽しむが、そんな中、「Rひとりですべりたい！せんせいてつだわないで！」と一人だけで滑りたいと言ってくる。保育士は心配もあったが、見守ることにした。Rは一人で何度も米袋そりで滑ろうとするが、なかなかうまくいかない・・・R「あ～そりだけいっちゃった・・・」と残念そうな様子。そこへ、先に滑ることが出来たHが「Rちゃんみて！こどもってすべればできたよ！」と教えてくれる。RはHの滑り方をじっと見ている。その後も何度も繰り返したRはついに成功し「せんせい！みて～ひとりですべれたよ！」と満面の笑みで滑っていた。



「せんせい、みてー」

<エピソード3>

『みんなでつながってすべろう！』 2歳児クラス

2歳児クラスのこどもたちも、米袋そりを喜んで自分で雪山の上まで運び友だちと繰り返し楽しめるようになってきた。

S「みんなでつながってすべろ～！」

M「こわいから ひとりですべる」

H「だいじょうぶだよ！みんなでつながってすべろう！」

大きいクラスのこどもたちの真似をして、3人で雪山の上から離れないように腕を組んだり、足で滑らないように止めて、みんなが揃ったら

S、M、H「せーの！！」

三人でつながって滑るあそびを繰り返す。

<エピソード4>

『みんなでチューブ滑り』 4・5歳児クラス

冬の園外保育で、スタルヒン球場のタイヤチューブ滑りに4・5歳児は出かける。「おおきいひかりぐみとたいようぐみだからいける！」と、こどもたちも園外保育を期待し楽しみにしている。現地に到着すると、大きなタイヤチューブを一人ひとつ手に持ち、坂を上り滑る。雪質により、スピードが出るので、ダイナミックなあそびを思いっきり楽しむことが出来る。5歳児クラスになると、スピードを楽しむ子が多くなり、どのようにチューブに乗ったらスピードが出るか、こどもたち同士で相談し滑る姿も見られる。

A「すこしじぶんでおしてからろう！」

K「おしりをつけないようにしてのろう！」

H「じょそう、つけてのろう！」

A、K、H「いいね！スピードでるね！」

と何回も坂を上り、こどもたち同士でコツを掴みながら楽しむ姿があった。



考察

様々な雪あそびの中でも、こどもたちにとって、そりすべりは大好きなあそびのひとつである。<エピソード1>では既成のそりではなく、自分でそりを作るということで愛着を感じ、より一層楽しめたと考える。

米袋そりやチューブ滑りは、繰り返し楽しむ中で、そりの使い方や乗り方・滑り方がわかっていく。<エピソード

ード2>では、まだ小さな2歳児でも繰り返し行うことで乗り方を体得し、滑ることが出来るようになっていく姿があった。<エピソード3・4>では友だちと一緒に考え、工夫して楽しむ姿があった。自分の身体の使い方も年齢が上がるにつれ上手くなり、ダイナミックなあそびへとつながっていくと考える。また、他児の様子を見たり大きいクラスのあそびの様子をみることで、「やってみよう」「楽しそう」「面白そう」と興味を示し、より一層あそび込んでいく姿がエピソードを通して確かめることができた。

【事例4】

～不思議・発見～

<エピソード1>

『こどもたちの気づきから・・・』 3歳児クラス
子「つららってどうやってできるのかな？」

雪あそび中に、こどもたちが屋根から下がる“つらら”を見て、つぶやく。

保育士はこどもたちの気づきから、冬ならではの水の変化について話題にし、「身近にあるもので確かめてみよう」と相談し、一緒に考えていくことにする。

保育室にて、こどもたちに、「お水を外に出すとどうなると思う？」と尋ねてみる。「おみずのまま」「おおきくなる」「こおりになる」「ふくらむ」など、一人ひとり

が自分の考えを発言していく。その中で、「こおりになる」と即答する子もいるが、深く考え込む子もいた。また、「手袋に水をいれると、どうかな?」「風船だったら?」と質問すると、

H「てのかたちになるのかな?」

S「ふうせんのかたちかな?」

と友だちと不思議そうにしながら想像を膨らませていた。

<エピソード2>

～実験スタート～

様々な容器に水を入れる。その中に秋に集めたまつぼっくりや木の実等も用意して入れていくことにする。ゴム手袋と風船にも水を入れる。

R「どんぐりいれてみる!」

A「きらきらしたのいれたいな」

S「ぼくのどうなるのかな～?」

と期待している。

ベランダに並べて置き、毎日観察していく。外の様子が気になり、何度も窓から見て関心を向けるこどもたち。数日後～みんなと取り出してみると・・・

H「つめたーい!こおりになった!!」

と水の変化に気づき、発見を喜ぶ。

また、中に入れた素材を見て、

S「ういているみたいだね」

R「どんぐりもういているみたい!!」

～実験スタート～



容器に水と木の実等を入れる



みんなでお観察



手袋と風船はどうなる?



さわってみたよ



風船の氷ができてあがり



てぶくろはてのかたちになった



みんなにお披露目「つめたいね」

と上の方で凍っていることに気づく。

ゴム手袋は手の形、風船は雫の形で凍っており、

H「ほんとうの“て”みたい！」

S「こんなかたちになるんだね」

と同じ形になった氷に触れて興奮気味のこどもたち。

また、氷に触っていると、保育士が「触っていると、また水になったね。どうしてかな？」と問いかけると、

H「つめたいところじゃないとおおらないから」

S「さむいときに、こおりになった」

と答える。

作ったものを外に飾り、みんなにお披露目すると、他クラスのこどもたちや送迎時の保護者も関心を寄せる姿が見られた。

<エピソード3>

『アイスクャンドルづくり』 5歳児クラス

クリスマス会でのキャンドルサービスの経験から、『アイスクャンドル』を知り、興味を持ち、「作ってみたい！！」と声があがる。牛乳パックに水を入れ、その中に空き缶をはめ込み、空洞になるように準備し、作っていく。

T「どのくらいみずをいれたらいいかな？」

K「いろをつけたらきれいじゃない？」

S「どのくらいでこおるのかな？」

E「さむくないとだめだね」

J「こおりのえほんがあったから、みてみよう」

と熱心に観察したり、友だちと相談しながら調べる姿も見られた。

数日後、取り出してみると、しっかりと凍っており「やっぱりこおったね！」「よかった！」と喜び合う。完成したアイスクャンドルに火を灯すと、「きれいだね」「できたね！」と興奮と喜びのこどもたちだった。

考察

今回の事例を通して、雪や氷の面白さや不思議さ、冬ならではの変化を知る機会となった。<エピソード1、2>では、この体験から、3歳児ならではのこどもたちの想像力と好奇心を高めていくきっかけとなったと感じる。クラスのみならず取り組み、観察し、確かめ完成したことで、氷になる仕組みを知って身近な題材からの実体験となった。

また、保育士が風船や手袋だったら…と提案することで、新たに考え合ったり、ワクワクと期待した新しい発見へと繋げていけたと考える。

<エピソード3>では、自分たちで「アイスクャンドルを作ってみたい！」と興味を向けて取り組む中で、水から氷への変化をわかり、出来上がりを想像して期待していた。仲間と一緒に変化を観察したり調べる中で、友だち同士考えを伝えあい、発見する喜びと、満足感を味わう経験になったと考える。

また、保育士自身もこどもたちと一緒に体験すること

で日常的な自然の変化の面白さを改めて感じた。大人には当たり前の理解も、こども目線の発見や不思議に思う気づきを大切に、今後もあそびを拡げていけるような教材研究をして興味関心のもてる出会いの土台作りをしていきたい。

V まとめ

昨年から2年にわたり「雪あそび」を事例研究として取り組み、今年度は【触れる・慣れる】【あそぶ】【不思議・発見】をテーマとして実践してきた。各保育士が保育実践を行い、学習会で事例検討をする中で雪あそびを通して、こどもたちの心と身体の成長を保育士間で共有し深めていくことが出来た。

【触れる・慣れる】の場面では保育士との信頼関係を基盤に安心できる環境において少しずつ雪に慣れあそぶことが出来るようになることが確かめられた。

【あそぶ1】の場面では、白い雪の中ですごっこあそびは、頭の中で考えイメージを膨らませ、友だちと工夫してあそぶ姿があった。今回保育士は廃材等の道具や色水等、雪あそびの環境を整え、あそびを展開させていくことで、こどもたちがより想像力を豊かに工夫し、あそびを拡げていけたのではないかと考える。

【あそぶ2】の場面では手作り米袋そりやタイヤチューブを使い身体を使ったダイナミックなあそびを行った。足腰を使った全身運動は丈夫で逞しい身体が作られる。そして、体幹も鍛えられ、バランス感覚や、瞬発力も身についた。何より、友だちと一緒に身体を使ってあそび込んだことが互いの満足感につながったと考える。

今回の実践で感じたことのひとつとして、雪質や気温の変化であそび方が変わる中でこどもたちは様々なあそび方を見つけてあそんでいく。そのあそびの中で、こどもたちの主体性を尊重していく時に保育士が行う環境構成とのバランスが大事なのだと考える。そして、こどもたちがあそび込めるように道具や様々な素材等を準備するのは勿論のこと、保育士自身のことばかけや保育への思いも大切だと感じた。米袋そりを作った場面では、保育士の「世界にひとつだけのそりをつくろう！」ということばにこどもたちは魔法がかかったようにワクワクしながら、作る姿があった。また、【不思議・発見】の場面のよう「つららってどうしてできるのかな？」のこどもの声を聞き逃さず、自然事象の不思議さを一緒に考え、実験した経験が年齢が上がっても関心を持ち続けさらに、探究する姿につながったと考える。

北国のこどもたちが、「冬」「雪」の自然と触れ合う体験に恵まれた環境であることを十分に楽しみ、自然に対する驚きの気持ちや発見の感動に気付いて過ごしてほしい。

今回の事例は、氷実験等、科学的な見方や考え方を培

う基礎となり、好奇心や探求心、思考力を育み、身近な自然の中で確かめられた。楽しさや喜びに心を動かし、保育士や友だちと共感したり、表現活動に結びつけていた。また、保育士自身が感性を豊かにもち、自然の素晴らしさに感動することや、こどもの気づきに共鳴していくことが求められる。

冬になり雪が降り積もると、見慣れた保育園の庭も環境ががらりと変わっていく。その雪の園庭であそぶことが出来る子どもたちの多様な経験と心身の成長を願い、これからも四季折々の自然物を取り入れる保育を工夫していきたい。

VI 【文献】

参考文献

- ・全国保育問題研究協議会編集委員会編

(2012)『保育問題研究254』新読書者

- ・全国保育団体連絡会編

(2020)『ちいさいなかま683号』ちいさいなかま社

- ・汐見稔幸（監修）(2018)『0・1・2歳児からのていねいな保育第1巻』フレーベル館

- ・汐見稔幸（監修・著）、井桁容子、岩井久美子（2018）『0・1・2歳児からのていねいな保育第2巻』フレーベル館

- ・汐見稔幸（監修・著）、井桁容子（2018）『0・1・2歳児からのていねいな保育第3巻』フレーベル館

キーワード：雪あそび 心と身体の育ち 不思議・発見



講評：雪の体験を思いっきり楽しもう！！

評者：小林 芳文

本実践研究を拝見して、今、子どもの保育で最も大切にしたい保育のキーワードである子どもの遊びや幸せの理念が取り上げられ、心が引かれる大変温かいものが伝わって来ました。北国ならではの「雪あそび」をテーマに2年間に渡る各実践事例の研究として、今回は「触れる・慣れる」「あそぶ」「不思議・発見」として具体的にまとめて読み手を引きつけてくれました。エピソードでの研究の展開では、年齢毎に身近な課題に目を向け、きちんとしっかり発達などに寄り添った遊び保育が良かったと思います。1歳児クラス、2歳児クラスの実践は、保育のゆったりした温かさを大切にしていました、3歳児クラスでは、ごっこ遊びでしたね。素材や道具の一層の工夫をして盛り上げていました。米袋そり滑り挑戦、みんなでチューブ滑りでは、身近な課題に結びつく環境の活用であり、今後の四季折々の自然物を取り入れた実践研究を期待しています。

評者：天野 珠路

北海道のこども園における「雪あそび」をテーマにした楽しくダイナミックな活動の記録です。子どもたちが全身を使って生き生きと遊ぶ様子や、雪や氷の感触を味わいながらごっこ遊びや表現遊びなどを楽しむ様子が伝わってきます。米袋のそりやタイヤチューブ滑り、色とりどりの雪や氷作りなど、子どもと保育者のアイデアが存分に活かされています。

2歳児が「せんせいてつだわないで」と主張し、何度も失敗を繰り返しながらもあきらめず、友達のアドバイスを受けてついに成功したその喜びは如何ばかりでしょう。「自分で」が旺盛になる2

歳児の保育を考え、見つめ直すきっかけにもなりました。

年齢ごとの遊びや活動の記録が写真とともに示されて効果的ですが、さらに「育つもの」を指導計画に照らし合わせて表にしてみたり、図式化したりして、園全体で子どもの育ちと学びの連続性を確認するとよいでしょう。

評者：田和 由里子

北海道という北国ならではの「雪あそび」をテーマに取り組んでこられており、今年度は、今まで積み重ねてきた内容をもっと深めて行くためにテーマを3つに絞っての実践報告書です。「触れる・慣れる」「あそぶ」「不思議・発見」をテーマとして年齢に応じた保育内容・写真もそれぞれのエピソードごとに掲載してあったので、より情景が伝わりまた、吹き出しで子どもの言葉も入っていたので、読み手にも声が伝わってきました。雪の降らない地域では得ることのできない体験だと羨ましくも感じました。豪雪地帯の方々は、生活をも危険にさらされたりと大変な時期であると思います。「雪」を保育の環境の一つとして3歳児の子どもたちにも「なぜ？なに？」と疑問に思いそれが自然に科学的な分野に繋がっているのは素晴らしいと思います。4、5歳児の子どもたちも雪滑りで何を使えばよく滑るかを友達と話合いながら発展させていました。例えば、同じ題材で年齢ごとの遊びの内容の違いや、「雪」遊びを通して色々な分野の活動に発展すると思われる。

今後もまた実践を積み上げて行かれることを期待致します。

つぶやきから広がる豊かな表現 ～食育体験から生まれた“とうもろこしのうた”～

山形県・山形認定こども園 秋葉悦子 佐藤美里 村岡里美

I. はじめに

前年度の実践研究で子どもたちの遊びのエピソード記述をし、保育の振り返りを行なった。遊びの記録をとる事によって、一人ひとりがどんなことに興味を持って遊んでいるのか、子どもたちの行動にはどんな思いがあるのか、どのように遊びが展開されているのか思いを共有してきた。職員の経験年数の壁を越えて、全体で子ども一人ひとりをつぶさに見つめ、理解し、保育にあたるという体制作りがしっかりできた。

“たのしい”“やってみたい”という主体的な思いを大切にしながら、子どもたちの興味・関心の目がどんなところに向いているのか、保育者としての手立てや次につながる保育について考えることが子どもたちの豊かな遊びや保育者自身の学びになっていくのではと考えた。今年度は、遊びはもちろん生活体験も含め、子どもたちが主体的に活動する場面を捉え、エピソード記述を行なうこととする。

II. 研究の目的

- 日々の生活体験や主体的に遊びを展開する中で育まれていく幼児期の姿を、全職員で学び共通理解のもとに保育を実践していく。
- 家庭との両輪の上で保育にあたるという観点から、保護者に向けた保育の可視化と発信を重視する。

III. 研究の方法

- エピソード記録を取り、園内研修で保育の振り返りを行なう。
- ドキュメンテーションや写真、モニター、ブログなどを活用し、保護者へ向けた可視化を行ない、効率的・効果的な発信と相互理解を進める。

IV. 事例と考察

事例1

《食育体験～とうもろこしの皮むき～》

2歳児以上が対象となり年間約20回、それぞれの年齢に合わせた食育活動を行なっている。

○2019年度 年中組〈8月8日〉

『とうもろこしの皮むき』

ホールに新聞紙を敷き、グループに分かれてとうもろこしの皮むきを行なった。とても意欲的で、一人3本く

らいの枝付きとうもろこしの皮をむいた。初めてではなかったのですが、スムーズに行なうことができた。“みんなの給食に登場するとうもろこしを自分たちが下準備している”という責任感やワクワク感でいっぱいの子どもたちだった。



家ではやったことがない子がほとんどで、「ひげ！」と言って取ったものを顔につけてみたり、むいた手の匂いをかいで「うわー！とうもろこしの匂いするー」と歓声を上げたりと楽しい反応が数多く見られた。そんな中、皮をむき終わって部屋に戻ってくる時にTくんが「♪とうもろこし とうもろこし」と大きい声を出していた。

Tくん 「♪とうもろこし とうもろこし」

保育者 「Tくん、今、とうもろこしのうた、歌ったの？」

Tくん 「ん…？」

保育者 「もう一回歌ってみて！」

Tくん 「ん？とうもろこし？ん？」

保育者 「うん！そうそう！もう一回歌ってみて！」

他の子もTくんと保育者とのやりとりを興味を持って見ていた。Tくんが歌っている姿に気付いた保育者が、「おもしろいなあ」と感じ（Tくんから出た言葉と音をメロディにして、曲にするとおもしろいかもかもしれない…）と感じた。

保育者 「Tくんが“とうもろこしとうもろこし”って歌ってたんだけど、みんなでとうもろこしのうた、作ってみる？」

Hちゃん「うん！」

Kくん 「いいね！」

保育者 ～電子ピアノでとうもろこしのフレーズを弾きながら～

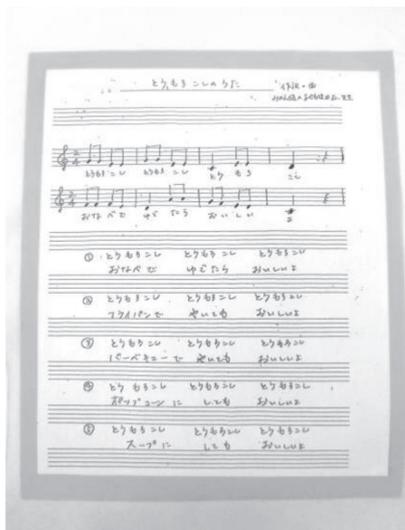
「とうもろこしってどうやって食べる？」

Hちゃん「お鍋でゆでるよ」

Mちゃん「バーベキューで食べたよ」

Kくん 「ポップコーンはとうもろこしだよね」

などと盛り上がり、やりとりをしながらその日のうちに5番まで作った。



メロディに合わせて身体を揺らしながら歌っている中で、自分で振りを付けている子がいた。「Hちゃんみたいに手をつけるととうもろこしみたいに見えるね」と声をかけると「いいね!」とみんなで真似をしだしたので振りを付けることにした。

その後も給食にとうもろこしが出ては歌い、何気ない時に一人で、または何人かで声を合わせて歌っている様子が見られた。その楽しそうな姿は家に帰ってからもあったようだ。



《考察：Tくん》

・食育体験で得た達成感・満足感が、意識せずにTくん

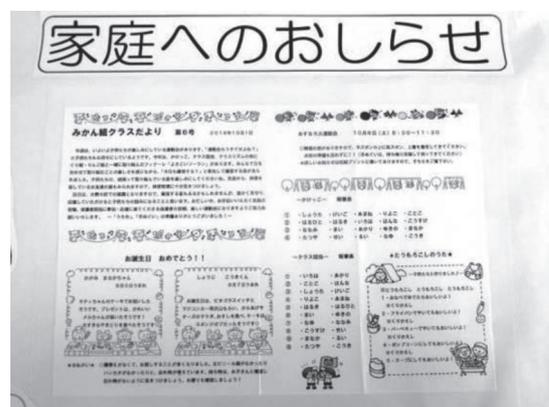
の心を動かし、大きな声が自然と表に現れたのではないか。

- ・ Tくんはクラスの中でも人気者で、一目置かれる中心的な存在である。Tくんが発した言葉により、クラス全体としての興味となった。
- ・ Tくんと保育者のやり取りを近くで見ていたクラスの子どもたちもすぐに興味を持ち、電子ピアノを囲み一緒に歌詞作りに参加した。自分の意見を言いながら一緒に考えたことで、みんなで創り出す楽しさを味わい共有することができた。
- ・ 心の声を聞き逃さずに受け止め、一人だけではなく周りの子どもたちにも発信することでその場で終わることなくその後の展開に結びつけることができた。

事例2

《保護者の声》

食育体験後「とうもろこし」というフレーズをよく聞くのですが…」などと連絡帳や保護者からの声があり、クラスだよりにのせてお知らせすることにした。家庭より、「面白い歌ですね」「何度も歌って聴かせてくれました」などの声が寄せられた。子どもたちが楽しくうたっている歌を保護者の方にも伝え、みんなで共有できればと思い、紙面だけではなく直接組別保護者会などで発信した。更に、並行して玄関に活動の様子を掲示したり、モニターを使って送迎時に見てもらった。



《考察》

- ・紙面だけではなく、写真や動画を使って発信することで子どもたちの現在の興味・関心、保育園での取り組みなど理解してもらうことができた。
- ・園での様子を可視化することにより、家庭でも興味・関心を持てるようになった。親子での共通の話題、コミュニケーションツールとなったようだ。

事例3

○2019年度 年長組〈8月〉

食育体験『とうもろこしの皮むき』

年長組になり、再びとうもろこしの皮むきを体験した。皮むきをしながら、昨年の体験を思い出し“とうもろこしのうた”を歌っている子どもたちの姿があった。歌詞を忘れていた部分もあり、もう一度思い出して歌ってみようということになり、みんなで思い出しながら楽しく歌った。

《考察》

- ・1年たって、夏になり自分たちで作った歌だという誇らしい気持ちと愛着があり、作った時の気持ちを思い出しながら歌っていたように感じた。

事例4

○運動会〈9月7日〉

年長組が主体となる運動会。毎年、入場行進ではマーチングを披露している。この日のために練習を重ね、本番に向けて気持ちをひとつに取り組みできた。本番では、大観衆の前で緊張しながらも力を出し、やりきったという満足した表情が見られた。

○祖父母の会に向けて〈9月〉

敬老の日にちなんで、年長児のおじいちゃん、おばあちゃんを園に招いて触れ合い過ごす行事がある。その中で、どのようなことをしておもてなしをしたいのか、みんなで考えた。

保育者 「おじいちゃんおばあちゃんとどんなことしてみたい？」

Kくん 「肩もみしてあげたい」

Sくん 「運動会でしたソーラン節を踊りたい」

Hちゃん「とうもろこしのうたがいいんじゃない？」

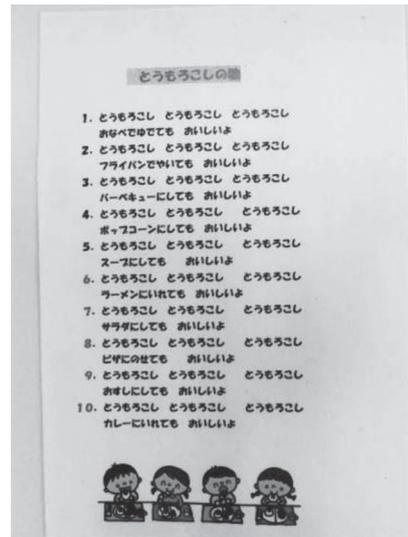
クラスの子「そうだね！いいね！いいね！」

と話が盛り上がった。

保育者 「でも…、5番までしかないから、すぐ終わっちゃうんじゃない？」

クラスの子「ああそうだね。もっと作った方がいいんじゃない？」

という提案があり、みんなで作ることにした。その後、意見を出し合い10番まで作った。



○祖父母の会での発表〈9月14日〉

当日は、おじいちゃんとおばあちゃんの前で自分たちが作った“とうもろこしのうた”を発表することができた。子どもたちが作った歌だということや10番まで考えたということを伝えると、驚きと感動の声が聞かれた。発表が終わるとたくさんの拍手とともにほめてもらったことで、子どもたちもとても満足して喜んでた。



《考察》

- ・“とうもろこしのうた”が自分たちの歌だという思いが芽生えてきたようだ。
- ・年長児として運動会ではいろいろなことにチャレンジし達成感を味わう経験ができたことで、この達成感が、「やってみたい」という次の意欲につながったようだ。

事例5

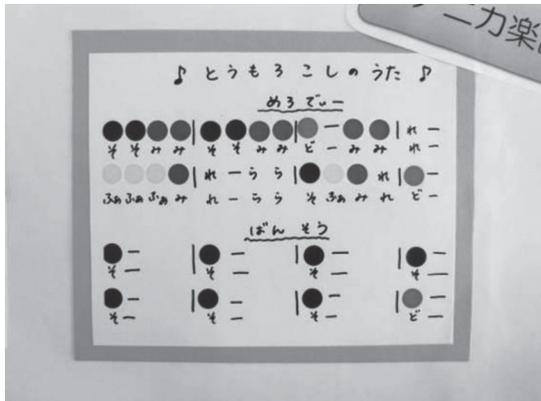
○お遊戯会に向けて〈10月〉

お遊戯会に向けてピアノ・楽器演奏の曲を子どもたちと相談し決めることにした。保育者が「何の曲にする？」と子どもたちに聞かけると、すぐに「とうもろこしのうたをしたい！」という声がたくさん聞かれ、ピアノで演奏することに決めた。

11月の保護者会で10番まで増えた“とうもろこしのうた”の歌詞をプリントして配布した。その時に、なぜ歌

詞が10番まで増えたのかというエピソードも合わせてお知らせした。

保護者からの声で、家庭でも練習したいとのことから、メロディと伴奏の楽譜を作成し準備した。ピアノカはいつでも家に持ち帰られるようにした。



○お遊戯会での発表〈12月12日〉

本番は、年長組としての晴れの舞台上、自分たちで作上げた“どうもろこしのうた”を大勢の前で発表した。始まる前は「ドキドキする～」などと緊張している様子も見られたが、舞台の上に立つと緊張しながらも堂々と歌い演奏する姿があった。発表後の子どもたちはみんな、“やりきった！”という表情をしていた。清々しい気持ちと充実感を子どもたちと共に保育者も一緒に味わうことができた。



《考察》

- ・年長組になり、沢山の行事への参加と、大勢の前に出て発表する経験の中で子どもたち一人ひとりが自信を持って取り組むようになってきている。
- ・何にでも意欲的に挑戦したり、「自分たちはできる！」というクラスの仲間意識や肯定感が更に強くなったようだ。
- ・“どうもろこしのうた”を歌い続けてきたことで、歌を通して自分たちのつながりを確認できる絆になっている。自分たちにはこれがあるという自信のより所が“どうもろこしのうた”になった。
- ・クラスみんなでやり遂げたことで、達成感と満足感を感じ大きな自信となったようだ。

事例6

○お別れ会食会〈3月11日〉

卒園前に年長児と在園児とのお別れ会食会があり、一緒に食事をしたり、プレゼント交換をして楽しんでいる。その中で年長児自身が“どうもろこしのうた”をみんなにも歌って欲しいという思いがあり、歌を披露することになった。ホールに集まり、始めに年長児が歌って、その後みんなで振りを真似しながら一緒に歌った。「みんなで歌ってください」とメッセージを伝え、年長児は誇らしげにバトンを渡していた。在園児は年長児のうたが歌えることや年長児と一緒にだということも嬉しく、楽しいひと時となった。ただ、もっと盛り上がってくれるだろうと期待して披露したのだが、思い描いていた反応とは違って感じた子がいた。会が終わると、Hちゃんが「一回歌っただけじゃわからないんじゃない？」と言う姿があったので、クラスで話し合うことにした。



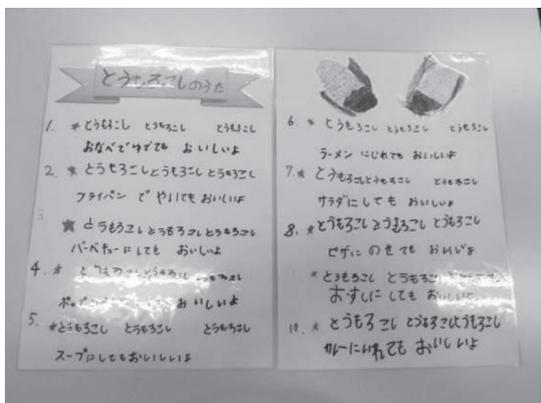
《考察》

- ・卒園間近になって卒園児としての自覚から自分たちだけではなく、年下の子にも伝えていきたいという思いが芽生え、会食会で披露することにつながった。
- ・自分たちで作って大切にしてきた歌をみんなにも歌って欲しいという「思い」が感じられた。
- ・年長児が作った歌を教えてもらい、年下の子も憧れの気持ちを抱いたのではないかな。
- ・その場で披露しただけでは歌詞や振りを覚えることが難しいと、やってみて感じた子がおり、みんなでどうしたらわかりやすく伝えることができるのかを考えるきっかけになったようだ。

事例7

○とうもろこしのうたの歌詞を書く

みんなにわかりやすく伝えるには、どうしたらいいのかわらなくて話し合った。「もう一回歌ったらいいんじゃない？」という声もあったが、ずっと忘れないで残していくにはどうしたらいいか考えていくうちに、Mちゃんが「紙に書いたらいいんじゃない？」と提案した。他の子どもたちも「いいね！書いてみよう！」と賛成の声が聞かれ、作成することになった。字が書ける子は画用紙にペンで歌詞を一行ずつ手分けして書いた。字が書けない子は「絵を描きたい！」と言い、3人ぐらいのグループを作りとうもろこしの絵を描いて完成させた。



完成させた歌詞は、年長児になる子どもたちに渡し、「とうもろこしのうた」を託した。

《考察》

- ・自分たちが作った歌を卒園してからも歌って欲しい、忘れないでほしいという思いが子どもたちの中で芽生えたことで、どうしたら伝えられるか考える行動のきっかけになり歌詞を書くことにもつながったようだ。みんなにわかりやすく“とうもろこしのうた”を伝えるにはどうしたら良いかという方法を子どもたち自身が考えることができたのではないかな。
- ・歌詞を書いて形に残すことで、これからも歌い続けてくれるのではないかという期待が込められているようだ。

V. まとめ

実践を進めていく中で、年中組から年長組にかけて、食育体験から生まれたエピソードに焦点を当てて研究を行なった。

0歳児から5歳児まで全クラスでエピソード記録をし、園内研修で保育の振り返りを行なったが、前年度からエピソード記録を継続して行なってきたことで、保育者自身が子どもたち一人ひとりの姿をしっかりと捉え、子どもたちが発信したことを敏感にキャッチできる様になった。

職員全体で子どもたちの姿を共有することで、子どもたちがどんなことに興味を持ち感動し「楽しかった!」「またやりたい!」という気持ちが芽生えたのか、多方面から子どもの姿をつぶさに見つめることができた。

食育体験でのつぶやきの声から始まった大きな流れだったが、事例のクラスでは普段からどんなことを言っても、受け止めてもらえる雰囲気がある事で、いろいろな思いを素直に口にすることができるのだと思う。保育者は子どもたちの言葉にしっかりと耳を傾け、問い掛け、つぶやき、拾い上げ、周囲に広げていく援助が必要である。幼児期の学びの場となる、生活や遊びの中で子どもの心が動いた瞬間を捉え、小さな声を拾い上げ、子どもたちにとって伝えたい、聞きたい、必然性のある伝え合いを重ねていくことが大切だと感じた。子どもから表出されたことを敏感に察知し、子ども自身が気付かなかった無意識なことを具体的に言葉にすることで、認識することができる。日々の保育の中で淡々と流れていくのではない、その場その瞬間で夢中になっている子どもの姿を保障することが大事であると考えた。“とうもろこしのうた”の歌詞をどうするかと考え、イメージや思いをみんなで共有し伝え合う事で、仲間意識がより強くなり、その後年下の子にも歌って欲しいという様々な思いが出てきた。問題→解決法の提案→遂行→結果の評価→新たな問題、という手順をくり返し協働して取り組む中で、思考力の芽生えにつながり、自分たちの歌の伝承という目的を達成した。

運動会・祖父母の会・お遊戯会など様々な行事は、子どもの思いよりも見せることに意識が向きがちだが、子

どもたちの「やりたい」を尊重することで歌詞の発想、感性、共感、協力し合う充実感などの「豊かな感性と表現」の多様な育ちが見られた。

しかし、実践を進めていく中で、子どもたちが作った“とうもろこしのうた”が年下の子に浸透しなかったことが反省にあげられた。普段からの保育を見直していく中で、縦のつながりが希薄になってきているのではないかという声があり、次年度からは異年齢児とのかかわりを考慮しながら、さらに自ら感じ、考え、行動できるたくましい生きる力をもった子どもたちを育むべく“ワクワク・ドキドキ”して関わっていける環境や遊びについてこれから学びを深めていきたい。

文献

参考文献

大豆生田 啓友 (2014) 『「子ども主体の協同的な学び」が生まれる保育』

学研

武藤 隆 (2018) 『10の姿プラス5・実践解説書』

ひかりのくに

キーワード：気づき 共有 意欲の育ち

講評：つぶやきから広がる豊かな表現～食育体験から生まれた“とうもろこしのうた”～

評者：石川 昭義

「とうもろこしのうた」をきっかけに、さまざまな活動の展開が描かれています。きっかけとなった一つの歌から、2年にわたる活動の連続は大きなストーリーとなりました。

この歌が発端となって、新しい歌詞づくり、振り付け、ピアノカの貸し出し、発表会など様々な場面につながっていったことがよくわかります。クラスの一員であるという子どもながらのアイデンティティを培う大きな役割を果たしたことも伝わってきました。

今回、研究の目的の一つに「保護者に向けた保育の可視化と発信」があげられていましたが、その点に関する記載と考察がもの足りなかったと思われる。たとえば、保護者アンケートのような形で、園での取組の理解度を示せるとより一貫性が出てくると思われれます。また、「心の声を聞き逃さずに受け止める」、「子どもたちの発信したことを敏感にキャッチする」、「小さな声を拾い上げる」など、保育者の成長を示す大事な表現がありました。今後は、こうした変容について、具体的なエピソードを添えて説明されていくことが期待されます。

評者：馬場 耕一郎

日々の保育に食育を取り入れた保育にフォーカスを当てた研究であり、大変良い着目点だと思います。日々の生活体験や主体的に遊びを展開する中で育まれていく幼児期の姿を全職員で共通理解することは、保育の質を向上させるためには必要不可欠な取り組みです。また、全職員で行ったことは、他職種との連携強化になると思います。給食の準備作業に子ども達が関与したことで、食事や

素材に興味関心を持った姿に導いていることは素晴らしいです。その経験が歌を歌うことに繋がり、その後も給食の場面や何気ないときに歌っている姿が見られたことは食育の体験が子ども達に受け入れられたことを表しています。家庭でも歌われたり、お遊戯会でも用いたりすることは、食育が保育の中に根付いていると思います。これからも子ども達の姿をしっかりと捉え、とうもろこしの歌に繋がる活動の誕生を楽しみにしています。そして成長の芽を伸ばして行って欲しいと願っています。

評者：高木 早智子

実践報告のお手本のような構成がしっかりとした報告書に感銘を受けました。論旨も明確で、記述・写真ともに記録としても完成度が高いと思います。なによりも「とうもろこしのうた」が子どもたちの体験の中から生まれ、メロディーが付き、歌詞が作られ、発表につながっていく過程が素晴らしく、子ども主体の保育を日々実践されている成果だと感じました。そして子どもたちが「問題→解決法の提案→遂行→結果の評価→新たな問題」と辿ったサイクルを、援助する保育者の先生方もきちんと意識されている姿勢も垣間見れます。欲を言えば、年中児から卒園までの記録ですし、「表現」のみにとどまらない実践ですから、最終的に「10の姿」との関りを具体的に整理してみると、より保育者の考察が深まるのではないかと、そして実践報告の産物として他の保育者にとっても非常に貴重な資料となるのではないかと考えられます。今後も素敵な実践報告をお待ちしています。

Aくんの“わくわく”がみんなの“わいわい”になった環境構成を振り返る

岐阜県・黒野こども園 西垣 浩康

1. 背景と目的

本稿は、保育者が行う環境構成を直感的かつシンプルに自身で振り返る手順とその方法をモデルで提示し、その意義を考察することを目的とする。

近年、乳幼児教育において、子どもたちの意欲や自信・集中力・粘り強さ・自制心・協調性等の非認知能力を育てることが求められている。佐藤（2020）が「見えるようにすることよりも、見えないものをどう感じあい、そこからどのようにつながっていくかを考えていくことに、より意味がある」と述べているように、保育者の感性を活用した振り返りや、それを組織として共有したり改善したりするためのシステム作りが重要だと考える。

当園は園児360名を超える大規模園であり、職員個々の個性を活かしながら、組織として機能しやすいシステム作りを力を入れている。筆者は将来園を経営する立場として、現在は年長クラスの担任をしながら、現場目線での先進的な改革を進めていきたいと考えている。園目標は『プレイフルキッズの育成』であり、『教育・保育の窓』である“ほっこり”“わくわく”“じっくり”“わいわい”という4つのワード（以下、4つのワードと記す）を共通言語とし、環境構成を工夫している。保育者は子どもたちが、まずは安全や安心の感覚を持つことができるように“ほっこり”環境を、そして憧れを抱いたり自分の願いを持ったたりできるように“わくわく”環境を、次に没頭したり注意を向けたりできるように“じっくり”環境を、さらに受信したり発信したりできるように“わいわい”環境を、基本的にこの順序で環境を構成することを共有している。

しかし、環境構成を振り返る際にはこの4つのワードが十分に活用されているとは言い難い。組織として、園の共通言語である4つのワードと環境構成の評価を結び付けることが、園目標である『プレイフルキッズの育成』へと繋ぐために不可欠である。十分に活用されていない要因として、個々の保育者が4つのワードを用いた振り返りの手順やその方法に見通しを持ち難いことが挙げられる。そのため、4つのワードを用いた振り返りの手順やその方法を具体的に示すことが必要だと考えた。

そこで、まず筆者が自身の事例を基に4つのワードを用いた振り返りを試みる。なお、事例は自身がポジティブに感じられたものを選択する。ポジティブ事例にはポジティブな結果が導かれた環境構成が潜んでおり、宝探しをするような心持ちで、無自覚に行った環境構成も言

語化できると考える。したがって、本研究では自身のポジティブ事例を基に、4つのワードを用いた環境構成の振り返りを試み、その手順とその方法のモデルを示す。

2. 振り返りの手順とその方法

1) 自身のポジティブ事例を抽出し、エピソード記述をする。

直前1か月の子どもたちの遊びのプロセスを振り返り、保育者として最も心が動いたポジティブ事例を抽出し、エピソード記述をする。さらに、子どもの姿の変化を捉えて段落に分け、I期～最終期までをナンバリングする。

2) 子どもの姿を直感的に評価する。

縦軸のラベルに期、横軸のラベルに園の共通言語（本稿では4つのワード）を挿入した表を作成する。次に、各期において共通言語を指標とする子どもたちの姿が、頻繁に見られた場合は◎、度々見られた場合は○、ほとんど見られなかった場合は△、全く見られなかった場合は×を直感的に記入する。

3) 自身の環境構成と子どもの姿の関連から仮説の生成、課題の発掘をする。

子どもの姿の変化に最も影響したと思われる環境構成をひとつずつ挙げ、その環境構成と共通言語との関連をブレインストーミングしながら、仮説を生成したり課題を発掘したりする。

3. 振り返りのモデル

1) ポジティブ事例のエピソード記述

Aくんのポジティブ事例を、ドキュメンテーション記録を振り返りながら、エピソード記述をした。その後、Aくんの変化に着目して段落を区切り、時系列でI期からV期までのナンバリングをした。

【I期】

場面の切り替えが苦手なAくん（年長クラス）は、友だちが片付けたものをわざと散らかしたり、ペンを剣に見立てて投げたりするので、友だちとのトラブルが絶えなかった。「一人でじっくり遊べるものに出会えるといいな」と思って、Aくんの興味があるものを探していた。

【II期】

ある日、Aくんを含む数人の男子が線路や道路を繋げて走らせて遊んでいた。クラスの中で“車は手で持って走らせる”というルールがあったが、Aくんはおかまい

なしに「びゅーん」と勢いよく走らせては手を離し、車をあちこちに飛ばしていた。「どうやらころがすことが好きなんだな」と思い、危険回避できる遊びとして「線路を坂にしたビー玉ころがし」を提案してみた。ビー玉は丸いのでよく転がるし、線路が坂になっているので手を離しても大丈夫だった。しかし、今度は、坂の下に動物のフィギュアを置いて、それを倒すことを楽しみ始めた。「う～ん、ころがして倒す？ そうだ、ボーリングならいいかも」と思いつき、運動コーナーにペットボトルを並べてボーリングのスペースを作った。嬉しそうにころがしては倒すことを楽しんではいしたが、共有スペースでの遊びには順番待ちがあり、絶えず没頭することは難しいようだった。

【Ⅲ期】

それなら専用スペースでころがす遊びをじっくり楽しめるようにと、部屋の一角を養生テープで仕切り、Aくんがビー玉ころがしを楽しめるスペースを作った（写真1）。すると、直線やカーブやトンネルや踊り場を組み合わせるとは転がり方を試し、転がしては組み合わせ方を工夫しながら遊びに熱中する姿が見られた。同じことに興味を持った友達と「どうしたらもっと面白い転がり方になるか」を一緒に考えたり、その中でリーダーシップをとったりする姿も見られた。



写真1：専用スペースでビー玉ころがし



写真2：金槌を使った釘打ちに夢中



写真3：誰もがパチンコ台作りに夢中

【Ⅳ期】

そんな頃、ある子が青・赤・黄の□や△や○の5センチほどの板を選んで、真ん中にある小さな穴に釘を刺してコルクに打ちつける玩具で遊び始めた。すると、みんなが「なんだ、なんだ」とそれに興味を持って集まり、Aくんも興味津々でのぞき込んだ。そして、予想通りひとつしかないその玩具の奪い合いが始まった。そこで、A3用紙大の木板を1人1枚使えるように準備し、釘や木片や本物の金槌をたくさん用意した。すると、クラスの誰もが釘打ちに熱中（写真2）し始め、Aくんも自分からビー玉ころがしのスペースを出て、釘打ちを始めた。普段は乱暴になりがちなAくんもこの時ばかりはとても慎重だった。そこで、Aくんが大好きな「ビー玉ころがし」と今みんなで熱中している「釘打ち」をコラボする遊びはないかと考えた。「そうだ、パチンコ台！」と思いつき、子どもたちに提案してみた。するとどの子どもも目を輝かせてめいめいに取り組み始めた（写真3）。まずはビー玉が横に落ちないように板の両端に角材を打ち付け、次に釘をあちこちに打って輪ゴムを張り巡らせた。ビー玉をころがしては「こうしてみよう」「ああしてみよう」と頭をフル回転させ、釘を足し、ゴムを付け替え、マジックで模様を描き・・・と、次々にオリジナルのパチンコ台が完成していった。

【V期】

子どもたちが驚くほど自分たちで進めていくので、困っている子に手助けはしたもののほとんど見守っているだけとなった。そうこうするうちに今度は、自分の板を友達の板と合体させ始め、様々な大きさのパチンコ台ができ始めた（写真4）。直線で長くしたり、傾斜の角度を変えたり、真ん中を高くして両方に行きかかるとして、「こうしようよ」「ああしようよ」と言い合いながら、協力して遊び始めた。驚くほどトラブルもなく、Aくんはいつのまにかみんなをリードする立場になっていた。この遊びの中では、みんなもAくんをリスペクトしているようだった。Aくんの好きな遊びが発端となってみんなで夢中になれる遊びができたことも、Aくんがちょっぴりヒーローになれたことも嬉しかった。



写真4：みんなでパチンコ台を合体

2) 子どもの姿の直感的評価

縦軸にI～V期、横軸に“ほっこり”“わくわく”“じっくり”“わいわい”を挿入した表を作成し、4つのワードにおけるAくんの姿が頻繁に見られた場合は◎、度々見られた場合は○、ほとんど見られなかった場合は△、全く見られなかった場合は×を、保育者自身で直感的に記入した（表1）。

表1 子どもの姿の直感的評価

※評価基準：◎頻繁に見られた、○度々見られた、△ほとんど見られなかった、×全く見られなかった					
期	Aくんの姿	ほっこり	わくわく	じっくり	わいわい
I期	自由に遊び込めない不満を募らせる。	×	△	△	△
II期	好きな動きができる遊びを楽しむ。	△	◎	○	△
III期	専用スペースでビー玉転がしを楽しむ。	◎	○	○	○
IV期	クラスで流行りだした釘打ちを楽しむ。	○	◎	◎	○
V期	自分と友達の作品を合体させて楽しむ。	◎	◎	◎	◎

3) 仮説の生成と課題の発掘

I期からII期、II期からIII期、III期からIV期、IV期からV期におけるAくんの姿の変化に最も影響したと思われる環境構成をひとつずつ挙げ、各期の右に太字で示した。次に、その環境構成と4つのワードの関連をブレインストーミングし、仮説の生成と課題の発掘をした。なお、本稿では具体的な手順と方法をモデルとして示すために、ブレインストーミング部分も全て言語化した。実際には文章記述は不要で、下記下線部（ ）の仮説と下記波線部（ ）の課題を簡条書きでメモする程度で充分だと考える。

【I期からII期】Aくんが好む動きを含む遊びを提案する！

Aくんが好む動きを含む遊びを提案することで、“わくわく”が2ランク上昇した。Aくんの興味を遊び名や玩具名ではなく、転がすことや倒すことという動きに着目して、遊び方を考えたことが良かったと思う。したがって、好きなことができる環境構成を行うことが“わくわく”を上昇させる(①)ということが発見できた。また、これまでは制止されていた動きを自由にできるようになったことで、“ほっこり”や“じっくり”が1ランク上昇した。“わくわく”に比べて“じっくり”が1ランクの上昇にとどまったのは、順番という制約があったからだと思われる。“わいわい”の評価が低いうちは順番という制約の中で“じっくり”を上昇させることは難しく感じた。集団との折り合いをつけながら“じっくり”環境を作る条件を発見していくこと(②)が重点課題だと考える。

【II期⇒III期】Aくんが集中して遊べるスペースを保障する！

Aくんがじっくり遊ぶためのスペースを保障したことで、“ほっこり”が2ランク上昇した。自分の空間があるということが“ほっこり”に強く影響する(③)という発見ができた。また、ほっこりできるようになったことが“わいわい”を1ランク上昇させたと考える。さらに、保障された場所に限定されてはいるものの、「遊び

をもっと面白くしたい」という共通の目的を持つことがやりとりを促し、「わいわい」を向上させる(④)という気づきが得られた。

また、Ⅲ期とⅤ期を見ると、「ほっこり」が満たされると「わいわい」が上昇する(⑤)ということが読み取れる。したがって、本園の環境構成が「ほっこり」からスタートするという順序の妥当性も確認できた。

【Ⅲ期⇒Ⅳ期】Aくんとみんなの興味がコラボした遊びを提案する！

Aくんとみんなの興味がコラボした遊びを提案したことで、Aくんが自分から安心できるスペースを出ることとなり、「ほっこり」は1ランク下降した。しかし、みんなと同じ遊びをする中で「わくわく」と「じっくり」が1ランク上昇したことの意味は大きい。「じっくり」は基本的には個々ばらばらでも実現できるが、Ⅳ期はみんなと同じ遊びでの「じっくり」であり、同じ◎の評価であっても意味が異なると考える。評価対象が個人なのか集団なのかということも区別して考える必要(⑥)があり、同じ評価であっても意味の違いがある場合を4つのワードの各々で探っていくこと(⑦)が課題となる。

また、釘打ちで金槌の使用経験がある子は皆無であった。最近接領域の考え方からしてもこの遊びはかなりハードルが高く、「わくわく」にも「じっくり」にも繋がらないと予想していた。しかし、全員がゼロからの挑戦という状況が、かえって「わくわく」を高めた(⑧)ということは新たな発見となった。

【Ⅳ期⇒Ⅴ期】子どもたちが展開していく遊びを見守り、俯瞰する！

自分たちで遊びをどんどん展開していく姿に呆気にとられ、保育者として環境構成したとは正直言い難い。Ⅳ期において個々の「わくわく」と「じっくり」が十分に高まっていたことが、Ⅴ期での「わいわい」を高めたと考える。個々の「じっくり」を十分に満足させることが、クラス集団としての「わいわい」を高めることに繋がる(⑨)ということに確信が持てた。

4. 考察

筆者自身のポジティブ事例を基に、4つのワードを用いて環境構成の振り返りを試みた。この手順と方法を体験した自身の実感を基に、このモデルを用いるメリットを考察する。

1) 直感的かつシンプルに環境構成の振り返りができる。

現場で日々業務に追われる保育者にとって、自身の環境構成をじっくり振り返る余裕を持つことは難しい。また、保育者は振り返りに対して「大変」「難しい」というイメージを持ちがちである。しかし、このモデルの特徴は「自身の感性を用いて大まかに掴む」ことにあり、誰でも気軽に取り組めるものを目指している。また、手軽さの割に収穫が大きく、自身の環境構成を言語化したり、仮説の生成や課題の発掘ができたりする。極めて省

エネで効率的な振り返り法だと実感した。現場では振り返りの信頼性や妥当性を厳密に問うことよりも、無理なく継続でき、実益が大きいことが重要だと考える。

2) 振り返りの知見を組織として共有できる。

4つのワードで子どもの姿を評価し、自身の環境構成との関連を大まかに整理することで、7つの仮説(モデルの下線部①③④⑤⑥⑧⑨)が生成でき、2つの課題(モデルの波線部②⑦)が発掘できた。園の共通言語である4つのワードは、シンプルでありながら様々な意味を含んでいることを実感した。そこで、保育者間で4つのワードを用いた振り返りを継続し、そこから得られた知見(仮説や課題)を共有する機会を設ければ、園として保育者の力量を向上させることに繋がると考える。

5. おわりに

今後はさらに画像や動画を採り入れたモデルも検討し、より直感的でシンプルな方法を探求していきたい。最後に、このモデルが実践を振り返る意欲や自信へと導く保育者の足場となることを期待する。

引用文献

佐藤寛子、小玉亮子、高橋陽子(2020) 動き出すドキュメンテーション(2)―保育者と保育者の関係と対話をキーワードとして― 日本保育学会第73回大会発表論文集 K-506

講評：Aくんの“わくわく”がみんなの“わいわい”になった環境構成を振り返る

評者：天野 珠路

「環境構成を振り返る（評価する）」ことは、保育現場において必要かつ重要な取組であり、課題であると考えます。保育者が環境構成に込める保育の意図や子どもの行動の予測、子どもの育ちへの思いや見通しがあってこそ、専門機関が行う保育（養護と教育）になるのだと思います。

本作品では、こうした環境構成の重要性を踏まえ、4つのキーワードから保育を振り返る試みを行い、その手順と方法を示しています。個と集団の関係にも触れて、一人ひとりの「じっくり」を大事にすることが協同的な遊びに繋がるとしています。

保育者の協働を促すためのツールとして「子どもの姿の直感的評価」を活用し、考察を深めていくことは効果的だと思いますが、さらに、素材や遊具、自然物など環境そのものを吟味し、振り返る取組も充実させていただきたいと思います。また、一人ひとりの保育者の見方や感じ方、子どもや保育の捉えなど多様な視点を尊重し、「見えないもの」の正体を拙速に決めつけないで伝え合い、分かち合っていくことが大切なのではないでしょうか。

評者：田和 由里子

環境構成を振り返るために自園での共通の4つのキーワードを共通用語として実践に組み込まれていました。そのキーワードは、“ほっこり”…安全や安心の感覚を持つことができる環境、“わくわく”…憧れを抱いたり自分の願いを持ったり出来る環境、“じっくり”…没頭したり注意を向けたり出来るような環境、“わいわい”…受信したり発信出来る環境とし、この順序で環境を構成する手順やその方法を具体的に示されていました。Aくんのポジティブ事例をドキュメンテーションという手法を用いて保育を振り返りながら、友だちとトラブルが多かったAくんが一人でじっくり遊べる活動は何かを模索していきました。Aくん

が一つの遊びに集中できず次から次へと遊びが変化していていることに注目して遊びを発展させていました。その様子をⅠ期からⅤ期までにAくんの活動をあてはめ4つのキーワードがどの期でどのように現れて来たかを表にまとめているのがわかりやすいと思いました。さらにⅠ期からⅡ期、Ⅱ期からⅢ期…と変化を文章でまとめていましたが、ここは、文章だけでなく前述のように表等でまとめるともっとわかりやすかったと思います。研究者は、将来は経営者になる予定とのことですので、保育の実践を経験されて他の保育者さんとも連携を取りながら子どもたちの成長発達に欠かせない「日々の保育の積み重ね」が大切であることを念頭に置き今後も研究発表をされることを期待しております。

評者：日吉 輝幸

黒野こども園では、“ほっこり”“わくわく”“じっくり”“わいわい”と4つのキーワードを掲げて、保育における環境構成を行っています。本研究はポジティブ事例を基にした環境構成の振り返りであるとのことであり、研究対象としたAくんの様子をしっかりと観察しつつ、興味関心を引くものは何かと考え、園が掲げる4つのワードの達成に向けて関わっていく様子がよく分かりました。また、研究者自身の振り返りの中で、4つのワードとAくんのその時々々の状況や関連性及び、取り組むべき課題を明確にしていることは、評価に値するものです。しかしながら、レポートの記述を見る限りでは、Aくんと関わりの中で、Aくんの興味を引き出そうとするが故に、保育者からの遊びの提案が先走り過ぎていないかが気になるところです。研究者は将来園経営をする立場であり、現場目線での先進的な改革を進めていきたいとの記述がありました。

今回のレポートでは、保育の質向上のために用いられている様々な手法も記されており、研究者の知見の広さが見て取れました。今後更なる実践経験を積まれ、良き保育者・経営者としてご活躍されることを祈念しています。

(3) 奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究②遊びと学び

5歳児における試行錯誤の過程

～コロナ禍での新たな運動会に向けての取り組みから～

平瀬 文恵（富山県・射水おおぞら保育園）

〈自由研究部門〉

『お泊り保育』を通して子ども主体の行事を考える

富田 真由（東京都・砂原保育園）

地域の良き由縁・良き心配りの保育協力は保育の彩り

花城 千枝子（沖縄県・ひよどり保育園）

課題研究② 遊びと学び

5歳児における試行錯誤の過程

～コロナ禍での新たな運動会に向けての取り組みから～

富山県・射水おおぞら保育園 平瀬 文恵

1. はじめに

今年、感染症予防の観点から運動遊びなど例年のようにできないことがたくさんあった。しかし、そのような状況だからこそ見えてきたことや気づいたこともあった。

本園では例年、年に10回ほどの行事が設定されている。ただしそれらは、年間においておおよその計画であり、毎年変わらず実践していくよりも、その年の子どもの様子を見ながら展開していくように努めている。とはいえ、入園より行事に参加していく子ども達の次年度への期待は高く、内容の変更こそあるものの、何年も続く行事そのものの実施が中止になったり大幅な変更を余儀なくされたりすることは、これまでほとんどなかったように思われる。しかし今年度は、Covid19感染症対策は不可欠であり、あらゆる行事において大幅な変更を余儀なくされている。

予定し期待していた行事の変更は、長期的な見通しを持って日々の保育にあたる私たち保育者にとって、必要性は理解できるものとても辛いことであった。当初は子ども達が「かわいそう」「不憫だ」と思っただけのように思うが、園内での保育者の話し合いを経て、子ども達自身に行事を委ねていったことで、改めて子どもの様々な育ちを知ることになった。以下は今回の感染症という事態を受けて新たな経験において見つめた5歳児の試行錯誤の過程についての気づいたことである。

2. コロナ禍を受け入れて

昨年度末の行事の見直しと今年度以降も園内様々な場所に感染症対策が行われたり、子ども達にも手洗いについての注意は伝えてきたりしたものの、地域的に感染者が少ない状況もあり、日々の保育においては特別変更することもなく、過ごしてきた。しかし、やはり園関係者が集う大きな行事になると変更しなければならないことが多く、運動会もどのように開催すべきか、検討を続けてきた。

私は、3、4、5歳児異年齢クラスの担任であり、その中でも主に5歳児を担当する立場であるということもあり、これまでずっと参加して楽しんできた最後の運動会をどのように開催されるのがよいのか悩むことがあった。変更が生じることについて、その要因となったこの感染症をどのように子ども達に伝えればよいのか、様々な思いを巡らせながら、運動会を迎えることになった。

例年、8月下旬頃から職員も運動会への期待を高め、園庭の設定をイメージしてみたり、少し整地してみたりと、園全体が運動会に向けた雰囲気になっていく。そんな中で、子ども達の中にも昨年の運動会をイメージした遊びが展開されていったりもする。今年はどうなるだろうかと、私自身の答えはなかったが、子ども達に聞いてみることにした。以下はその時に語られた子ども達のやりとりの様子である。

事例1 「あかぐみさんはリレーがしたい！」

8月26日

子ども達に「9月になったらなにかがあるか知ってる？」と聞く。するとみんなが口々に「運動会！」とすぐに答える。

A男：「あおさん（4歳児）の時もしたよね！旗とリングで踊った！」

B男：「かけっこおれ1番やったわ」と楽しそうに話す。

C男：「あかさん（5歳児）になったら、リレーするよ！」

D子：「そうやよ！前のあかさんもしってたもん！」

E男：「太鼓もね！」

話しながら子ども達の期待が高まっていくのがわかった。保育者が、「リレーってみんな、どんなか知ってる？」と聞くと、

C男：「知ってるよ！棒みたいやつ持って走って」

A男：「バトンバトン！」

B男：「次の人にわたすんやぜね！」

E男：「そうそう！」と盛り上がる。

あかぐみ（5歳児）になったから早くしたい！という強いあこがれの気持ちが伝わってくる。保育者は感染症のことをどう話そうかと考えていたが、子ども達に今の状況をそのまま話す。子ども達は、真剣に聞いていた。手洗いをみんなもいつも丁寧に行い気をつけていること、消毒もして手からバイキンがうつるかもしれないことを子ども達なりに理解しているようだった。その時、

D子：「あ！じゃあ、バトン渡していったらダメやね・・・」

F子：「手袋するとか？」

C男：「滑ってしまうかもしれん」

みんな：「・・・」

A男：「じゃあさ、自分だけのバトン持って走ったら？」
 保育者：「それいいね！」
 G子「でも、渡せんよ・・・」
 みんな「ほんまや・・・」
 B男「あ！次の人にカンってしたらどう？」
 A男「いいね！」
 B男「渡せんからカンって！」
 みんな：「いいね！」と頷く。
 E男「そしたらさ、カンってせんかったら『ブツブツ』失格にしよう！」
 みんな：「そうしよう！」
 こうやって今年のおあぐみのリレーが始まった。

子ども達はこの感染症の状況を理解し、どうやったらあこがれのリレーができるか考えた。そこには、『あかぐみ（年長）になったらリレーがしたい！』という強い気持ちを感じた。

一人一つバトンを持って走ることを決め、リレーができると安心した様子だったが、また新たな問題に自分たちで気づいている。そして、思いつくことを伝えることで考えてルールを作っている。自分たちで決めた決まりだからこそ、一人ひとりが忠実に守っていかうとする姿が見られた。

3. リレーを自分たちのものにしていく過程

コロナ禍を受け入れて、新しい私たちのリレー作りが始まった。この子ども達にとって、リレーの最大の魅力は「バトン」にあるようだった。以下はその最も重要な道具として捉えられているバトンを通して、工夫して課題を乗り越えていく姿が見られた事例である。

事例2 「バトンがない！」 8月31日

部屋（私のクラス）で、廃材を使って遊んでいた。H子が廃材のあるコーナーでラップの芯を手に取り、『はっ！』とした顔をする。
 H子：「先生！これでリレーできる！」近くにいたI子やJ男にもすすめるH子。
 H子：「リレーしたい！」
 I子：「走りたい！行ってきてもいい？」
 J男：「ぼくも走りたい」と3人が言うので「もちろん！行ってこよう！」と園庭に出る。すると、ほかの子達も見ている。
 K男：「なんでHちゃんたち、外におるが〜？」
 H子：「だってリレーしたいもん！」と答えるH子の声を聞いて、みんなの姿を見つめるK男。
 ほかのクラスの5歳児もやってくる。
 B男：「あ！リレーしとる！」
 A男「僕もしたい！」「あ〜でもバトンないから・・・

なんか探してくる！」

と言い部屋に行く。部屋では、クラスの担任が子どもに話を聞き、一緒に考え、部屋にある材料をみて自分のバトンを作るという方法につながっていく。先ほどのK男も友達が作っている様子をみている。まだ作り出しはしていないが、どうしようかと考えているようだった。T組では牛乳パックと広告で作る。それぞれが考えながら、持ち手の部分を持ちやすいようにするなど廃材を組み合わせながら工夫して作っていた。出来上がると園庭に出て、やってみる。すると、走っている間に壊れたり、自分たちで決めたバトンではタッチの時に素材が弱すぎてうまくいかなかったりといういろいろな問題点がでてきた。K男は、広告で細い剣を作ったようだ。それをバトンとして持って園庭に出てくる。自分でもこれでいいのかな？という顔をしていたが、

K男：「先生作った！」と持ってくる。
 保育者：「Kちゃんも作ったんやね！一緒に走ってこよう！」といううれしそうに駆け出していった。牛乳後、L男、D子と一緒に新聞を使ってなにかを作っている。
 保育者：「Kちゃん、なに作とるん？」
 K男：「リレーのやつ・・・もっと強くしたい・・・」と友達の姿をみたり、教えてもらったりしながら作る姿が見られた。

H子が、ラップの芯をバトンにしよう！と思いついたことからほかの子達が廃材を使い自分のバトンを作り出した。保育者は、こちらからバトンを用意しようと思っていたが、「リレーがしたい！でもない！」という状況から子どもが自分たちでバトンを作ろう！と考えたことに驚いた。また、各部屋の先生が、子どもと一緒にどんな素材がいいか考え、すぐに子どもが試したり、使えたりする環境もよかった。

子ども達が、試行錯誤しながら、自分だけのバトンを作った。そこで終わるのではなく、壊れてしまった、弱くて曲がってしまってもうまくタッチができない。だから、次はこうしてみよう！とやってみる姿が多く見られた。しかしここで、私は、クラスをリードしていく子ども達にばかり目がいきがちであったと反省した。保育者としてその子らどのように関わることが良かったのか、改めて一人ひとりの育ちを考えなければならないと思った。

事例3 「こうしたらいいよ」 9月3日

それぞれのクラスで試行錯誤しながら、バトンを作る。クラスみんなでやっていくうちにバトンを次の人にタッチするときに強いバトン、頑丈である方がいいということに気づく。その中で、広告を丸めたための棒をいつまでも使っているN男がいた。保育者は、N男に自分自身でなにか気づきがあればいいなと思い

ながら、見守ったり声を掛けたりしてきたが、いつも柔らかそうな広告の棒を使っていた。

保育者：「Nくん、今日のリレーのときバトンどうやった？」

N男：「すぐ曲がった。柔らかかった。」

保育者：「そっか〜。Nくんはどんなバトン作りたい？」

N男：「強いやつ！」

保育者：「いいね！じゃあどうやったら強くなるかな？」

N男：「作るときにギュッって持って作ったらいい！」

保育者：「そうしたら強くなりそう！」

N男：「作ってみる！」

広告を持ってきて作り出すN男。なかなかうまくいかない。保育者は、N男なりにぎゅっと持って丸めているが、指先が器用ではないためうまくいかないことに気づく。これまでのN男の育ちや経験がここに結びついていると感じた。これは、N男に教えてあげようと思っていたとき、そばにきた

O男「こうしたらいいよ。」と教えてくれる。

O男はN男を手伝い、一緒に作っている。

O男「1つじゃ弱いから（何本か）くっつけたらいいよ。」

N男「そうか〜」

と二人でN男のバトンをつくる姿があった。

うまくいかないが使い続けたのは、N男なりに考えて作った自分の精一杯のバトンだったからではないか。一緒にすることで、N男の指先の不器用さ、やってみようとする力の一方で最後までやってみようとするN男の力を知り、私はどのような関わりができるかを考えた。

リレーという同じ目的に向かって活動しているからこそO男とN男の関わりがみられたのではないか。これまではなかったN男とO男な関係が、バトン作りで繋がったように思われた。

4. 新しい運動会

様々に工夫を凝らしたバトンが完成し、いよいよ自分たちのリレーができる状況になった。それぞれにバトンを持ち、園庭に出て思い思いに走り始める。ほどなくして、みんなでやってみようということになった。そうして実際にやってみると、さらなる工夫が必要であることに気付く姿があった。子ども達は、自分たちの種目であるリレーだけでなく、関係する方々に関しても考え始める。以下はその事例の一つである。

事例4 応援の仕方 9月8日

リレーをしていた時、園長先生から大きな声を出さずにエイエイオー！と気合を入れてもらう。

D子：「あ！コロナでつばとぶから大きい声だめやね。」と気付く。

A男：「たしか、お兄ちゃんのパレーの試合の時も大きい声で頑張れー！ってダメやから拍手で応援しとる！」

F子：「運動会も拍手にしてもらわんなん。」

保育者：「本当やね！他にどんな応援の仕方があるかな？」

D子：「あ！旗とか？」

A男：「いいね！旗！」

と子ども達の中でいろいろな考えが出てきている様子が感じ取れた。

後日の年齢別の時間。

F子：「先生！T組、応援するとき声出せんからね、カスタネットみたいやつ作ったよ！」

M子：「カチカチって鳴らして応援するん！」

と教えてくれたT組の子どもたち。すると

P子：「K組は旗作ったー！」

Q男：「S組は牛乳パックで音なるやつ！」と各クラスそれぞれ自分たちで応援グッズを作っていることを話してくれた。

保育者：「これで運動会、コロナに気をつけて応援もできるね！わくわくたのしみ運動会ってみんなだけでするんだったかな？」

A男：「ちがうちがう！パパとかママくる！」

保育者：「そうやよね！ママたちみんな頑張るとる姿見たら大きい声で『ガンパレー！』ってしたくなるかも〜！」

C男：「だめだめ！コロナウイルスうつってしまう！」

D子「じゃあさ、大きい声出したらだめだよ！って教えてあげたらいいんじゃない？旗とか拍手で応援してね。って」

B男「でもおれ、言うが忘れそう・・・」

A男「ならば、玄関とか部屋とかに（紙に）絵とか書いてはっとうよ！」

B男「そしたら迎えに来た時にみてわかるね！」

と子ども達同士で言いながら考えていた。その後、書いたものを見える場所に貼りながら、ここだと見えてもらえると満足そうだった。

日常生活の中で、子どもたちなりにいつもとは違う変化を感じ取っているのだと感じた。大きな声を出せないから、応援はしない。という方法ではなく、できないからこういうやり方もいいんじゃないかと考えや思いを出せるようになってきている。また、自分だけでなく家の人に伝える方法もこれまでの経験から考えられるようになってきている。

5. まとめ：困難を受け入れて新たな活動を生み出す姿から

今回の運動会での取り組みを通して、担任一人ではできないことばかりだったと感じた。子ども達からいろいろなことに気づくことができ、たくさんの保育者に支え

られていると感じた。私は、5歳児の担任であり、子ども達と表立って進めていくことが多い。しかし、本当にすごいのは、陰ながら、子ども達のために考えてくれたり作ってくれたりしてくれている同僚の保育者である。みなさんの支えがあり、自分がいるということを忘れずにしていきたい。

子ども達が自分たちで考え作っていったり、試行錯誤していったりする力には成長を感じた。また、友達の姿から刺激を受け、やってみようとしたり、教えてあげたりと友達同士のつながりも深まっていることがわかった。

その一方、自分の思いを人前でなかなか言えない子がいたり、自分本位で物事を進めてしまったりと細かいところで一人ひとりの課題が見ることができた。私は、こだわりを持ち乗り越えていく子ども達ばかりに関わってきたところはないか、それも大事ではあるが、表現することなく妥協していたり、諦めたりしている5歳児はいないか、その子らに対して、私はどのように関わることができていただろうかと反省している。私の今後の課題として考えていきたい。

講評：5歳児における試行錯誤の過程

～コロナ禍での新たな運動会に向けての取り組みから～

評者：天野 珠路

今年度、保育現場においては、新型コロナウイルス感染症の影響で、さまざまな行事や保育実践が見直されたことでしょうか。感染予防と保育の充実という「難題」に各園が悩み、葛藤を覚えながら、それでも子どもたちのために工夫し、待たなしの子どもたちの成長を支えたのだと思います。

本作品は、例年行われている運動会をどのように実施したらよいかを子どもたち自身が考えて取り組んだ記録です。子どもの意見やアイデアを生かしながら「マイバトン」によるリレーや大声を出さない応援など、「制約」がある中で、前向きに運動会に臨んだ様子が伝わります。コロナ禍による緊張と保育の縮小が考えられる中で、子どもの力が十分に発揮されたのは保育士の配慮と環境構成に拠るところが大きいです。

大人も子ども試行錯誤の一年、この試行錯誤が今後に活かされ、園においてはさらなる行事の見直しや「新しい」保育の創造につながることを願っています。

評者：石川 昭義

運動会で年長児のリレーがしたいという思いをどのように実現するかという試行錯誤の実践記録です。自分たちで決めたルールにもとづく「新しい私たちのリレー作り」のストーリーが生き生きと描かれています。

自分のバトン作りの過程で、子どもたちに考えてもらうように働きかける保育者と子どもたちとの対話がうまく描かれています。バトンだけでなく、応援の仕方や保護者への伝え方など、できるだけ子どもの発想と工夫を大事にしようとする様子が描かれていて良かったです。このような、子どもの方から作りたいと声があがったときに、す

ぐに対応できるのは、素材が必要であることはもちろんですが、同じような活動が日頃から行われているからであろうと推察されました。子どもの意欲と発想から保育を展開していく日頃からの積み重ねをこれからも大切にしてもらいたいと思います。

報告書では何人かの子どもが登場します。N男とO男との関係の記述は良かったですが、その後の様子が書かれているとより良かったと思います。また、リレーが行われた後のクラス全体の達成感のような記載があるとストーリーに厚みが出たように思われます。

評者：日吉 輝幸

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症に翻弄された1年でした。園行事の中止や縮小が相次いだ中、本研究の内容はコロナ禍での保育を象徴する実践事例であると言えます。園行事を経験していくことで、子どもが心身の成長発達を遂げていくことは紛うことがない。特に“運動会”や“発表会・表現会”の役割は大きいと筆者は考えています。射水おおぞら保育園では、コロナ禍での運動会の競技について園児と共に考える機会をもち、前年に行われたリレー競技に対してもっていた、園児たちの強い憧れの気持ちを引き出していきました。更には、園児同士の会話から、バトンを手渡す行為と感染症に対して注意すべきことが上手くつながっており、園児が感染症対策について理解していることが見て取れました。研究テーマのとおり、園児が試行錯誤しながら主体的に考え行動している様子がよくわかる反面、実践研究の「レポート」としてみれば、園児同士のやり取りの記述に頼っている部分が多く、保育者としての関わりやその時々考察が不足していたのが残念です。表記の仕方を十分に検討されて、今後更なる実践研究を行っていただきたいと思います。

「お泊り保育」を通して子ども主体の行事を考える

東京都・砂原保育園 富田 真由

1. 概要

2019年6月に実施した年長児の『お泊り保育』を通して子どもが主体的に取り組んだ行事について考察をする。

本園は子ども主体の保育活動を大事にして、いろいろなものに取り組んできた。お泊り保育も子どものやりたい気持ちを汲みながら保育者も一緒になって取り組んできたつもりではあったが、果たして本当にそうであったかどうか。「子どもが主体となって」というより保育者主導になっていたのではないかと。今回「保育園に泊まってみたい」「夜の保育園を見てみたい」という子どもからの意見をきっかけに子どもたち自らが計画し話し合いを重ねながら、担任や保護者をお願いをしたり、相談にのってもらったりしながら、実際にお泊り保育を実行するまでの様子とその後の子どもの姿を考える。

お泊り保育後の子どもたちは、保育者の声掛けがなくても時間を見ながら遊び方を考えたり、意見の違いで喧嘩が始まって自分たちで解決しようとする姿があった。お泊り保育を子どもたちに任せたことで、子ども一人ひとりに育ちが見える。行事の在り方も日常の保育と同様に、子ども主体がいかに大切であるかを改めて感じている。

2. 砂原保育園の保育について

本園は異年齢保育に取り組み始めて20年が経った。「自然から学ぶ」「時間を忘れて遊ぶ」「関わり合う生活」の理念のもと、子どもが子どもの「今」を生きるために必要な環境を用意しながら、子どもたちと保育者と一緒に日々の暮らしを大切にしている。

幼児クラスは『家族ごっこ』という小グループを作って遊びや生活をしている。『家族ごっこ』は年少、年中、年長児がそれぞれ2人ずつで構成された6人程度の小集団である。年長児はお父さんお母さん、年中児はお兄さんお姉さん、年少児は弟妹、というごっこ遊びの延長である。

「子ども同士の話し合いを大事にすること」「自分の考えを相手に分かるように言葉で伝えたり、友だちの言うことも聞こうとすること」、特に年長児は「相手の気持ちを察する」ことをしながら、自分の気持ちも大切にしていけることを心がけている。

年長児は18名。クラスの特徴として、一人ひとり自分の考えを持って遊びや生活を楽しんでいるのだが、初めて経験する活動に対して慎重になる子が全体的に多い。

これは不安や自信のなさから出てくるものだと推測された。

*本園は話し合いを『寄り合い』と称している。以下『寄り合い』と述べているものは、年長児やグループの話し合いである。

3. 実践報告

1) 5月「お泊り保育どうしたらやれるの？」

遊びの中で、A児とB児が「夜の保育園を見てみたい」「保育園に泊まってみたい」と相談しながら2人でカレンダーに泊まる日に丸を付けていた。保育者は6月のお泊り保育に向けて内容を検討し始めていたところであった。このつぶやきからお泊り保育の活動に繋がらないかと考えた。そこで、年長の寄り合いの場を設定し、2人からお泊り保育について提案してもらうことにした。皆は2人の意見を聞いて、泊まることに賛成したものの中には親と離れて寝られないという不安を言う子もいた。保育園になぜ泊まりたいのか、その理由は「夜の保育園がどうなっているのか知りたい」「夜の保育園で寝てみたい」ということだった。友達と泊まるにはどうしたらよいかを子どもなりに考え、園長に相談することになった。A児とB児はきちんと伝えられるように手紙を書いて、みんなで話し合った内容を書き出していた。

また、A児は寄り合いの中で自分なりの計画を提案した。恥ずかしさや自信のなさからか、なかなか伝えられないでいたが、保育者が気持ちを整理しながら言葉を添えてあげると、考えを皆にわかるように伝えることができた。

翌日、園長にお泊り保育をしたい理由である夜の園庭がどうなっているのか知りたい、夜の保育園で寝てみたいという気持ちを伝えた。園長は子どもたちの話し合いを聞いて、泊まるにはどうしたらよいか、準備するものはあるのかななどを提案した。また、子どもだけで泊まることはできないので、周りの大人に手伝って貰うにはどうしたらよいか考えるようにした。おうちの人に保育園に泊まりたい理由を説明して、泊まってもいいよという許可をもらうようにという約束を行った。

子どもたちと話し合って決めたこと

- ① 一緒に泊まる保育者にお泊り保育の内容を説明し、お願いすること。
- ② 食事を弁当にするのか給食の職員に頼むのか、どち

らにするか決めること。

- ③ おうちの人にお泊り保育に参加してよいか理由を説明してOKをもらうこと。

この時期になると半分の子どもたちは、自分の考えやアイデアを発信できるようになってきた。それでも、なかなか意見を言えない子どもには保育者がどう思うかをきいたり、友達と同じ意見であったら頷いたりして自分の気持ちを伝えるように促した。



保育園に泊まることを提案するA児

考察

保育者の役割は、子どもの発言を繰り返したり、伝えたい事を汲み取って言い直してあげたりすることにある。また、自分のしたいことだけを話すのではなく、友達に納得してもらうためどのように話したらよいかを考えられるように言葉を整理していった。1人のやりたいことをクラスの活動に繋げるためには、子ども同士の話し合いが重要でまとまるには時間がかかる。子どもの気持ちを汲み取りながらどうしたらやりたいことがやれるかを保育者も一緒になって考えていくことが必要であった。

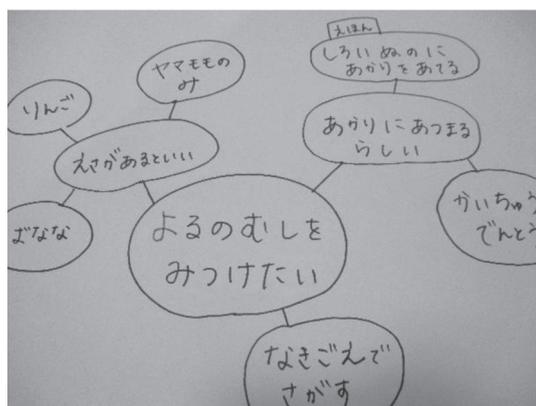
2) 「おうちの人に伝えたい」

保護者に向けてお泊り保育説明会を行った。お泊り保育のねらいを、「子どもたち自身で考えて決める。そして自分の意見は、言葉で相手に分かるように話す」とこととした。保護者には、現在の話し合いの経過を説明し、子どもたちが家庭でどのように活動のことを話しているのかを尋ねた。「理由も一緒に伝えてくれた」「保育士や給食の職員にお願いしたことを話してくれた。少し不安もありそう」などの感想があった。

考察

このような行事の取り組みには保護者の理解が必要である。そのために保育を目に見える形にして発信していった。寄り合いの言葉を記録した「繋がるシート」や「今日のニュートン」を活用していった。

※今日のニュートンは、保育で見られた子どもの育ちを記録し毎日発信している本園独自の取り組みである。



繋がるシート



3) 計画を立てる

カレンダーの予定を見て、自分たちで椅子を並べて寄り合いの準備をする姿があった。初めは保育者が中心となって、話し合う内容を決めた。(どのようなことをするのか、食事を給食の職員と相談すること、年少と年中に伝えること) 子どもの中から持ち物を決めたいと意見があがったが、持ち物の話題で終わってしまいそうな様子があったため、どのようなことをするのか決めてからにしようとして保育者から提案した。

夜の保育園でやりたいことを2つに決めた。一つは夜の虫を観察すること、もう一つは夜の園内を探索することだ。虫を探すための方法として、暗いところでは自分たちも周りが見えない、灯りが必要だということになりランタンを用意することが決まった。また、虫が集まってくるような餌を仕掛けるという意見があがった。カブトムシの飼い方が分かる絵本で、光に寄ってくる虫を見つuckerことができるライトトラップという方法を見つけ、やってみることにした。

保育者も夜の保育園で特別な遊びができないか考え、

影遊びを提案した。子どもたちと話し合う中で、影のクイズ大会をすることに決めた。クイズの内容は3グループに分かれ自分たちで時間を見つけて考え協力し合っている様子がありそれぞれのグループで準備をして当日を迎えた。



カブトムシの図鑑で虫の集め方を知る

考察

保育者にも保育のねらいがあり、子どもに経験してほしいことを考えていた。しかし主体は子どもである。保育者が引っ張るのではなく、話し合いの中では子ども目線で意見を出すようにした。その方が子どもたちも自然に受け入れてもらいながら方向性を保つことができた。

子どもだけの寄り合い

保育者がその場にいないと自分たちだけの話し合いは揉めることが多い。理由は、一緒に考えようとしなくて全く違うことを言い出す子どもがいるからだ。怒ったA児は「違う話をしてた人は一回立って」と言った。立った子達はばつの悪そうな表情だ。A児は怒ったもののその後どうすれば良いか困っていた。周りの友だちに相談すると、「関係の無い話をしてしまう人は離れて座ればよいのではないか」と提案された。話し合いにきちんと参加している友だちの間に一人ずつ座ることで話し合いを始めることができた。子どもたちで見つけた解決策だった。

考察

一人ひとりが集団の一員であるという確かな認識が子どもたちの中に芽生え始めていることが伺える。普段とは違う友だちの様子に周りの友だちも影響を受けている。その影響が良い方向になるために保育者は見守り、支えることが必要である。

小グループの話し合い

1つのグループが影のクイズを考える。初めはグループ内で意欲的な子、ふざけている子に分かれていたが、保育者が誘導し協力して考えられるように促した。考え始めると、様々な案が積極的に出始めた。B児とC児は2人で重なり、一人に見えることを思いついた。D児は

本物の握りこぶしと形の似た丸い物を同時に出して、どちらが握りこぶしか考えてもらうなど発想が豊かであった。実際の影は、見せたいものが自分の影と重なり、距離の取り方によって自分の理想と変わっていくことに難しさを感じたようだ。一人ひとりのアイデアをクイズの内容にすると時間が無くなり、他の計画ができなくなることを理解していた子どもたちは、内容をまとめるために、昼の時間も話し合うことにした。



小グループの寄り合い

考察

子どもたちは影遊びを通して、物の見え方が一つではないことに気がついた。身のまわりの物を影で見ると全く違うものに見えたりするその面白さに気付いたようであった。自分のやりたいことを言葉にして相手に伝えることは、自分の考えをまとめることに繋がる。自分で考えた新しいアイデアを友だちに認めてもらうことで、考えることの喜びを知り次の意欲につながっている。

小グループの寄り合いの進め方を子どもたちにまかせ、必要に応じて保育者が手伝うようにした。クラス全体の時よりも一人ひとりの意見が大事にされ、認め合う経験がより深まっている。

4) 当日の様子

午前中に寄り合いを行い、一日のスケジュールを確認した。どの子もそわそわして落ち着かない様子だったが、寄り合いになると普段の雰囲気を取り戻していた。



予定を確認するE児

E児は活動の始まりから興味が無い様子があったが、自分で紙に書かれた一日の流れを読みながら保育者に自分の考えていることを確認する姿が見られた。また、友だちが虫の仕掛けの餌を設置する場所で揉めていると、「エサの数を増やしてそれぞれが置きたいところに置けば良いと思う」と自分なりに考えた解決方法を伝える姿が見られた。

一日の保育とお泊り保育に区切りをつけるために、一度帰園した。夕方、改めてお泊り保育のために登園してきた子どもたちの表情はとても生き生きしたものがあつた。

F児は母から離れて年長の輪に入ったものの泣き始める。その姿を見て周りの友だちも不安になったようだが励ます姿が見られた。F児本人も「大丈夫だ」と自分に言い聞かせていた。食事の中で「次は虫探しだったよね」と友だちに話す姿が見られた。

翌日はお泊り保育の振り返りを年長で行った。「楽しかった」という感想だけでなく「皆で決めたことができ良かった」「考えていたことが上手くいって安心した」「もっと保育園に居たい」と今までのことを思い出しながら感想を述べていた。



影あそび



ライトトラップで虫を探す

5) 保護者の感想

翌日の朝、保護者にお泊まり会の様子を報告した。保護者からは以下のような感想があった。

B児母

「お泊り保育を企画から子どもたちで意見を出し合っ
て決めていくという環境ができたことがとても驚きでし
た。最初はいつもとは違うので親も戸惑いましたが、先
生方の話を聞いていると子どもたちがどこまでできるの
か見てみたいという気持ちもあり、最後まで聞き役に徹
するようにしました。自分たちで考える、それを言葉に
して伝える。やれなければやれるように修正する。そし
てまた伝える。大人でもなかなかできないことを5歳の
子どもたちの『やってみたい』という姿に感心しました。」

G児母

「母子で過ごすことが多く、子どもに干渉し過ぎるた
め、普段は自分から何かをすることがあまりありません。
今回とても良い機会を与えてもらえたと思っています。
今後はもう少し距離感も考え、子どもの自主性を育てた
いと思いました。」

今回の活動がただ「楽しかった」で終わるのではなく、
自分たちで考えて取り組む姿ややり終えた感じが今後の
自信につながっていくように保育者の考えを伝えた。保
護者が学んだことや感じたことについて感想をもらって
いる。期待や不安、家庭で見られた子どもの育ちを共有
することができた。

考察

保護者に保育のねらいを伝え、保護者と同じような考
えをもって子どもの活動を見守ってもらえるように伝え
たことで、年長児が主体的にお泊り保育をしようとする
環境を家庭でも設定できた。保育園の様子を子どもに尋
ねても何も言わないと心配していた保護者がいたが、お
泊り保育の計画は子どもの方から話してきたという報告
があった。自分のやりたいことが明確にあり、活動に対
する期待があると話して伝えたいという気持ちも膨らむ。
また、保護者が活動に興味を持つことも、子どもの活動
がさらに深まっていく要因である。

6) 9月の姿 「同じような力で」

運動遊びの行事をきっかけに年長児がリレーに取り組
んだ。チーム分けをどうするか話し合う。最初は一列に
並んだ状態で右、左と分けていったが、競走すると、片
方のチームばかりが勝ち続けた。負けたチームから面白
くないという声が上がった。そこで保育者がどのような
勝負がしたいか問いかけると「みんなで勝ちたい」「ど
ちらが勝つか分からないくらい、同じくらいの力のチ
ームにしたい」という意見がでた。誰が速くて誰が遅い
のか、それぞれが自分の思ったように話し出す姿があっ
たので、自分の走る速さを考えてはどうかと保育者が提
案した。子どもたちは走ることに自信がある子と走る速さ

はゆっくりだけれど最後まで頑張って走りたい子のそれ
ぞれが混ざるように二つのチームに分かれた。その結果
同じような走る速さになったので接戦が続いて、どちら
のチームも互いに協力して競争を楽しむ姿が見られた。

考察

それまでのリレーは、2つのチームが均等になるよう
に子どもの足の速さを見て大人が決める場合や、家族ご
っこの組み合わせで作っていた。このような決め方は子
どもが中心ではない。お泊り保育を通して、集団のこ
とを考えて話し合う力がついた年長であれば、自分たち
の納得のいくチームを決めることができるのではないかと
いう保育者の自信もあった。そして自分たちで決めたこ
とであれば、納得して取り組めるのではないかと考えて
いた。

7) 1月の姿 「一緒に使うために」

年少が「年長を仲間にいれてあげない」と言い出した。
保育者が話を聞くと新しい玩具で遊んでいる時に、年長
に使いたい玩具を取られてしまうことが理由だった。保
育者は寄り合いの機会になると考え、年長に相談してみ
てはどうかということを提案した。年少の言葉に補足を
しながら年長に伝えると年長も真剣に話を聞いている。
保育者は話の行き先を見守ることにした。年長は年少の
気持ちを考えて、昼寝の時間に自分たちが遊べるのだか
ら、朝や夕方は年下の友だちに譲るということを決めた。
年少はその提案を喜んだが、「本当は一人で全部使いた
いんだ」と本音をもらす場面もあった。



年長に相談する年少

考察

今までは保育者が司会の役割を担っていたが、この時
期になると自分たちで話を進めていこうとする姿が見ら
れた。中には相手の話したことを汲み取ったり、勝手に
話し出す子がいると「今はAちゃんの話聞こう」と話
し合いの時の約束を言う年長がいた。このような姿から
保育者は集団の話し合いにおけるモデルであることを強
く感じた。子どもが理解できるように優しい言葉を用い
ながら話し合いのやり方やルールを意識する必要がある。

4、総合的な考察

＜お泊り保育で見られた子どもの育ち＞

子どもたちが計画したことで今までになく生き生きとしたお泊り保育の活動になった。個々のやりたいことを集団のやりたいことに繋げたことから、自分の発言が友だちに受け入れられる心地よさを感じ、自信が深まったのではないかな。

今回の活動において、多数決をとることはしなかった。少数意見や些細な言葉も大事に聞いていこうという雰囲気を作った。子どもの意見を引き出しながら寄り合いの数を重ねたことで一人ひとりが安心して発言できる場になっていった。

活動を当日まで継続させるために、毎回次の寄り合いの予定を決め、普段の生活の中で話題にしていった。他のクラスの職員も活動に興味を持ち、食事の時間など共に過ごす場面で、計画の内容を尋ねてくれた。その中で、年長のどの子に聞いても活動を楽しみにしている姿があることがわかった。いつの間にか個人のやりたいことが集団のやりたいことに変わっていたことがわかる。予定を把握するために自分たちでカレンダーに予定を書き込んでいる。こうした一つ一つの環境ややり方が子どもの意欲の継続に繋がった。

お泊り保育の計画を実行するために、給食の職員、園長、クラスの担任、保護者に対して「相談」と「交渉」をするように促していった。経験を重ねることで、自分のしたい事を言葉にし、相手に分かるように伝えることができるようになった。困った時には友だちや周りの大

人に相談したり、意見を受けて、やり直したりすることで自立心や人とのコミュニケーションをとる力の伸びがあったように感じた。

＜日々の活動や行事の役割＞

行事は子どもと保育者の育ちの機会である。実践を振り返る中で改めてそう感じた。行事は年間で日程が決められていることが多く、時間に追われすぎると残念ながら例年と同じ内容にすることもあった。

しかし、子ども主体の活動は自分で考え人やモノと関わることを繰り返しながら「体験」としてその子に根付いていく。大人が主導するよりもはるかに力がついていくのではないだろうか。子どもが主体的に取り組むために、保育者は見守りながら必要な時に手伝いをする。子どもの話や考えを元に保育を展開していく保育力が求められている。

5、今後の課題

寄り合いを大切にしたい一年間の保育を通して、子どもが自分の考えを言葉にする機会が多くあった。コミュニケーションにおいて言葉が大切であることに改めて気づかされた。人間関係を育てるにはお互いの言葉のやり取りが大切である。これから寄り合いの経験を通して、子どものことばを丁寧に記録し、その意図や気持ちの変化についての考察をしながら子どもの理解を深めていきたい。

講評：『お泊り保育』を通して子ども主体の行事を考える

評者：馬場 耕一郎

子どもたちの意見をきっかけに子どもたち自らが計画し話し合いを重ねることを丁寧に観察し対応した研究です。子どもたちの主体性を信じた保育士の取り組みは、大変素晴らしいと思います。保育士の役割を、伝えたいことをくみ取って言い直していくこと、言葉を整理するといったことに位置付けたことは、多くの保育士が再認識しなければならないことではないでしょうか。その援助が小グループでの話し合いを活性化させ、自らの気づきに繋がったと思います。何よりも今回の活動で多数決をとることはせず、少数意見や些細な言葉も大事に聞いていこうとする雰囲気を作ることができたことや、一人ひとりが安心して発信できる場が誕生した事は、質の高い保育の実践事例と思いました。何よりも保育士の声掛けがなくても、時間を見ながら遊び方を考え、意見の違いに対しても自分たちで解決しようとする姿に育ったことは、日本の保育の目指すべき道であると確信しました。

評者：高木 早智子

今回の実践での保育者の援助として、保育者主導ではなく「寄り合い」という話し合いの場で子どもたちからの発言を引き出すための環境構成に工夫が見られている点が非常に良いと思います。また、「繋がるシート」や「今日のニュートン」といった、保育を目に見える形で発信することで、子どもたち・園・保護者（家庭）をつなぐ取り組みがされている点も評価できます。しかし、各考察の部分で「(保育者の)感想」や「背景説明」になっているところが見受けられるのが残念に思いました。実践報告は背景説明も含めた実践

報告のみとし、「4、総合的な考察」においてまとめられた方が報告書として読み応えのあるものになるのではないかと感じました。実践に取り組まれた先生が、真摯に「子どもが主体的に取り組む」とはどういうことかを日々模索されているのが伝わってくる実践報告だったと思います。更なる「子どもの主体性」を育む保育実践にご期待申し上げます。

評者：日吉 輝幸

「子ども主体」、「子どもの主体性」、「主体的な活動」等は、近年の保育で重要視されている言葉です。平成28年に文部科学省から出された『新しい学習指導要領の考え方』の中に、「主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）」という言葉が盛り込まれてから、より顕著になった感があります。砂原保育園では、これまでも子ども主体の保育活動を大切にしてきました。しかしそれが、本当にそうであったか否か、保育者主導になっていたのではないかと顧みており、それが本研究のベースになっています。砂原保育園では、「寄り合い」と称する子ども同士の話し合いの場が確保されています。「お泊り保育」の体験という目標に向かい、なぜ行いたいのか、どうしたら実現できるか、実現したら何をしたいか等々、その都度子ども同士で話し合いを行い、意見を出し合って取り組んでいった様子が見て取れました。主体性を重んじるということは、勝手気まま、好きなように物事を行うということではありません。目標に向かう過程で、いかに自らの力で考え行動していくことが大切かということ、改めて考えさせられたレポートでした。

地域の良き由縁・良き心配りの保育協力は保育の彩り

沖縄県・ひよどり保育園 花城 千枝子

1. はじめに

昭和47年の本土復帰前後、市街地を中心に公立保育所が増加していた。第2次ベビーブームの時期と相まって、農村地域も保育ニーズは高まっていたが、受け入れる保育所が無く、対象児童は市街地の保育園を利用していた。



(祭祀の場の子ども席)

昭和56年、本法人（南風福祉会）の認可設立。同時に本法人運営の認可園、ひよどり保育園（以下「本園」という）も開園。開園以来、地域の伝承行事や地域文化が、子どもの心をより豊かに培うアイテムとして、保育に彩を添えている。この

地域色豊かな保育がもっとできればと、平成25年に、本法人は市街地寄りの丘の公立保育所（人件費のみ）の運営を受託。そして平成31年4月には「委託北保育所」から「公私連携北保育園（以下「当園」という）として、全面的に運営（園児数74人保育士12人）。委託保育所にはなかったキャリアアップ研修や処遇改善などが適応されることになり、それに関わる研修や園内の自主研修など、保育士は進んで受講する。各々の保育士は、保育力向上を目指すのが見て取れた。

当園は団地の一角にあり、そこの住人の出入り口と共用しているので、おのずと人々は、子どもたちに声かけをしてくれ、また特に行事の際は、保護者会の協力のおかげで、盛り上がらせてもらえる。団地の出入り口には傾斜部分があって、そこには季節の花々を咲かせ、登降園時の親子の目を楽しませている。公私連携保育園の目

指す地域色豊かな保育園のはじまりの年となった。

2. 実践研究設定理由

年度初め、園児は定員を満たし、保育士の数、フリー保育士、調理員も揃い、順風満帆な保育の船出であった。

ところが、12月にA保育士が体調の不良で、かなり大きな手術を受け、年明けに、「現職復帰までには長期になる見込み」の診断がでて、次年度に食い込む長期病休願いを出していた。そのころ、次年度の保育士人数調査があり、現状（過年度同様）の保育士数を届けていた矢先の事だった。2月、主管課では新年度の入園児の名簿がほぼ出来上がっていたが、一人の保育士が辞意を伝えた。その後、保育士がひとり、またひとりと辞意を伝える。（表1）

新年度の入園児は昨年同様の人数の名簿がほぼ決定している中で、保育士総数の過半数（辞職、病休&産休育級含め）減少。子どもの人数は残った保育士数に見合う人数しか受け入れられない。（表2）

新年度が差し迫った時期、どうにも受け入れできない当園希望児の親御さんへ申し訳が立たない。保育士状況を丁寧に説明して、第2第3の希望園に移ってもらうようお願いした。

保育園内のA保育士の事からはじまる辞職保育士の事が風評として流れているようで、(イ)「保育園の敷地は、昔から悪い霊のいる荒地だった。保育士が悪い病気にかかるのはそんな悪霊のせいだ。ニガイ（お祓い）で追い払わねばならん」と、保育園内に来て、注意してくれる方々がいた。迷信の怖さを信じている保育士もいないではないと思う。それで、他所からの引き抜きに乗ってい

(表1)

保育士	退職・長期休暇（理由）	備考
A保育士	長期病休（入院・リハビリ）	正職
B保育士	産休&育児休業	正職
C保育士	退職（学童は自由に休みがにとれる）	正職
D保育士	退職（新設園に誘われ）	正職
E保育士	退職（本島進学の子と一緒に移住）	正職
F保育士	退職（親の介護）	非常勤
6名		

(表2) 令和元・2年度の園児数と担任数

	元年	元年	2年	2年	備考
年齢	定員	担任	現員	担任	
0歳	6	2	3	1	
1歳	12	2	6	1	
2歳	18	3	12	2	
3歳	17	1	17	1	
4歳	20	1	13	1	
障児	1	1		0	加配
フリ		1		1	非常勤
主任		1		1	
合計	74	12	51	8	

*令和2年度の職員配置説明

たのだろうか。表向きは、各々に異なる理由で辞意を届けてはいるが。

しかし、園長は現状を冷静に分析して、迷信風評の有無を気に留めない。次のように語る。

「辞める先生がいる中で、病気療養中の先生の回復を祈り、『職場復帰の日を皆で待っています』と、励ませてくれる先生たちの気持ちがありがたい。」と、辞めないでおちついて保育する保育士に感謝している。また「A先生は、新年度をまたぐ長期療養になるのかもしれないが、病気の経過次第では、早く職場復帰できるはずだし、B先生は産休育休明けで、次の年度には復帰できる。いつか好転するよ。現実には起こることは、その通り、受け入れて、残っている保育士に見合う数の子どもを受け入れて、小規模的保育で新年度をスタートさせよう」と。ポジティブに考え、風評の事は意に介さない。現実の保育現場の変化に抗うことはしない。「小規模に近い運営だね」と、淡々と目の前の子どもに向き合う。

0歳から4歳児まで各々のクラスの担任は1名しかできない状態だが、2歳児の12名は、前年からの持ち上がり人数だから、減らすことができず、姉妹園から1名の保育士を移動できるようにお願いした。障害児1名に加配保育士も必要だが、採用できず。短時間希望の保育士を知人の紹介でフリーに充てる。年休や病休の代替保育士が欲しいぎりぎりの人事配置。

3. 実践目的

風評迷信が保育園の保育士減少に影響を及ぼすのか。長い年月の風評の真の意味を確認する。

4. その方法

当園の公立時代に勤務したT先生に当時の風評の事を調査する。

質問：保育園の事を風評や迷信で迷惑をかけるようなことはありませんでしたか。

T先生：風評は、地域性故のお話である。気にしなければいつか消えていました。

質問：風評が保育園のイメージを損ない、保育士の採用にも影響しませんでしたか。

T先生：風評には悩まされた。しかし、あの時代は、保育士希望者は多かったので退職者の充当ができた。そのようなもの（風評）は、いつの間にか消えてしまう。そんな繰り返しであった。

本土復帰（1972年）、「本土並みに保育所を」という時代に創設された当園は、現在、50年になろうとする。あの頃からすると現在は「未来の世」。今は昔の話なのに。だが、現在もあの頃同様に風評は存続している。まるで昔の風が現在に向かってまだ吹いているようだ。

この機会に、

前記の（イ）の（願い、祈り）をすなおな気持ちで受けてみようと思ひ立ち、「ニガイ（願い、祈り）」の靈感の持ち主のおばあさんにお祓いを施してもらいたい」と、薦める方にそのおばあさんを紹介してもらおう。「かわいい子どもたちの事だから」と、承諾してくださって実施日の日取りも決めて下さった。

5. 悪い霊をお祓いするニガイ（願い、祈り）

宮古島地域には、昔むかしのニガイの方法がある。

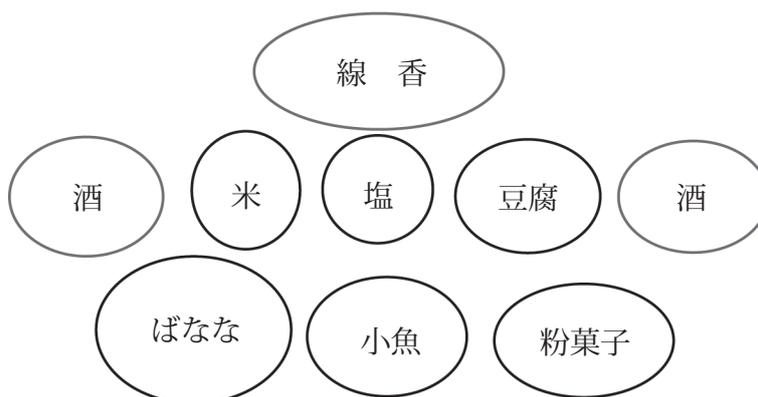
事前に、おばあさんは、清めとお祓いのニガイに必要な品々《酒、米、塩、小魚、豆腐、粉菓子（卵ボーロ）、果物、線香》を準備し、大きなお膳に並べておくように、連絡してくれた。（図1）

その日、2月16日（日曜日）10時、小雨のため、団地の子供たちとの共用の場の園庭には遊ぶ子はいないので、保育園の内も外もシーンとしている。

玄関でおばあさんを迎える。

おばあさんは、玄関に入ると、「この先は私が自由に移動するね」と言いつつ0歳児室の畳の部屋へ向かって行く。部屋を一通り見渡して、なにやら独り言。畳の上

(図1) お祓いのニガイ(祈り)用のお供え物



を何かを確かめるかのように、ゆっくりと縦・横、斜め、さらに丸などを描きながら、歩いている。立ち止まって頭を傾げ、なにかに気づいたかのように動きを止める。コミュニケーションをとっている相手がいる様子で、これ？この人？とその相手に問うている様子。眼は開くのではなく、つむるのでもなく、多分現実と異なる世界にいるのだろうか？時間にすると…、およそ3分～5分。「宮古島は海面下の龍の棲む竜宮の宮。この下（保育室）には、龍がいるが、そこには配水管が埋められていて、龍は、その下でもがいているから、出してやった」。次は、隣の1歳児室と並びの2、3歳児室を通り越して、年長児（4歳児室）へ。そこから3歳児室へ、歩みながら、なにかをたしかめつつ、歩き続ける。

3歳児室（園舎の真ん中辺り）出入口の先生の机の隣に来ると、私たちに指示する。

事前に指示されたニガイに必要な品々をここに、並べておくように、と、指示。

並べたお膳を配置すると、それに沿って、ゴザを敷く。

おばあさんは、品々の並べてあるお膳の前にして正座されて、園長は、「ここへ」と、自分の横に座らせた。

「ここはむかし、荒地で、一本の大きなアコウの木があった。その根元に御嶽があった場所で、龍神さまがまつられている御嶽は、ちょうどこの場所で…」とお供え物の位置を指さした。

「A先生の病気は、自分の体内から出たもので、お医者さんが直して下さる。元気になり仕事に戻ります。B先生は、今（妊娠8か月）、生まれてくる子のフリルのお洋服は、今買うのは待つように（つまり、男の子）。おばあさんは、不意に龍の事や昔の話を、いまここで見ているようにやさしい言葉で話される。「何故、保育園の下に龍がいる？」に対し、「宮古島の水脈は、龍。海につながる」と。耳に入る一語一語が、心よくも驚きを誘う。

そこで、おばあさんの語りを軸にして、「龍のあそぶほいくえん」のタイトルで、「おはなし」にしてみた。（別紙）

6. まとめ

(1)「保育園運営は、保育を取り巻く地域環境を理解することから始まる」

「これは古いから現在には意味がない、やがて消えていく言葉さ」などの先入観で払い捨てるのではなく、「どんな言葉」にも正面から向き合うことを示してくれた。

この原稿を書きながら、このことに気づいた。「地域の（人々）とすなおに向き合えば、風評も風習も地域の人々の心映えとして見える。教わること多し。こうして時代を超えて、人と人の心の営みは、伝承されていくのを気づかせてくれた。

(2) 子どものためのおはなし、「龍があそぶほいくえん」（別紙）も生まれた。

期せずして、お祓いの祈りを行った日、2月16日。テレビで、「巨大地下空間龍の巣に挑む」という番組があり、中国貴州省のミャオ族にミャオティンと畏れ呼ばれる世界最大の地下空間について報道されていた。光も音も飲み込むブラックホール。そこは水の流れが次々とぶつかりひとつになった。そんなぶつかりが無数にある闇の世界。水のうごめきは龍といわれ、その繰り返して大きな龍になっていく。宮古島の地下にも水脈がある。それがお祓いのおばあさんが言われる龍なるものなのか。なにより地下空洞、「ミャオ（ク）ティン」なるものは、その天とつながっている異国の小さな島の宮古島の、ミャーク（宮古）の広大なティン（空）があり、龍信仰がある。昼のおばあさんの話とオーバーラップするものがあった。このことから、また靈感おばあさんの祈りのニガイの語りから、龍と保育園をつなげるお話しが、頭に浮かび、生まれた。

7. 課題

「待機児童対策」のための施設増加は真にその対策になっているのか、保育士不足の原因とその確保（方法）を探索する。

(別紙) 【おはなし】

りゅうもあそぶほいくえん

作 はなしろちえこ

丘の上の村に、子どもがたくさん生まれました。

村には保育園がないので、おかあさんたちは、子どもをおんぶしたり、自分の近くで遊ばせたりしてはたらきました。

「保育園があればいいなー」

「若いお父さんお母さんの家族の団地もいっぱい必要だなー」

おかあさんたちは、自分たちの思いを風さんに届けとばかりに大きな声で話しました。

村の小さな坂道をのぼると、枝を大きく広げたアコウの木があって、根もとに龍神さまがまつられている御嶽（ウタキ）があります。そのとなりには木や草がのびほうだいの荒地があり、そこに、おばけのかくれ穴があり、こわいところだと、だれも近寄りません。（だけどおばけもウタキの龍神さまがこわいので、出てこれない）。

ある日、風が、丘の上の荒地に保育園と団地が新しくできるニュースを運んできました。

アコウの木は、龍神さまに伝えました。

「それは村のためによいことだ」

アコウの木は龍神さまの喜ぶ声を耳にして、ほっとしましたが、「あれ？」と頭をかしげ、

「龍神さま、荒地に保育所や団地をつくることは、私たちの御嶽（ウタキ）もくずされることですか」

「そうですね。丘の上の空き地は荒地とウタキだけだからな」

アコウの木の枝が波うつようにゆれました。それは（自分が切り倒される）アコウの木のふるえでした。

龍神様はアコウの木に、言いました。

「保育園は、若い子どもたちが集まります。おばけは、子どもの無邪気な心が苦手ですよ。だからここら辺は、おばけのいない良いくらしができる場所になります。子どものためならわれわれの居場所なんてなくてもいい」（そうですか）アコウの木は、つぶやきました。

「あなたは、木の良き精霊となり、私と共に、保育園の子どもと先生を守り、むじゃきな気持ちで子どもと遊ぶ。これもわれわれの大事な役目だ」

こうして、丘の上には、新しい保育園ができ、いくつもの団地が立ち並ぶ町になりました。

.....

今は昔のお話しです。

ある日、カミンチュのおばあが、子どもをもっとしあわせにする保育園になるようにとのニガイを行っていました。おばあは、龍神様が人々を守り、むかしの丘の上のくらしをかたり、保育所のはじまりから現在までのことを伝えました。おばあには、むかしの事も人々の事もテレビの画面のように見えるので、そのとおり、どんどん語っているそうです。保育園の排水路の下にいた大きな龍を広いところにだしてやったが、もう、赤ちゃん龍が生まれているよ。子どもたちの間をスルリ・スルリとおよぎまわり、そこへそよ風もやってきて、やさしく子どもたちのまわりにながれ、赤ちゃん龍をやさしくなでています。「あ〜いいきもち」といっているような笑顔の赤ちゃん龍。「子どもにも見えている?」、「もちろん、7歳までは神のうちだからね」。



先生手作りのコロナ予防マスク

(おしまい)

講評：地域の良き由縁・良き心配りの保育協力は保育の彩り

評者：小林 芳文

本研究は、自由研究部門での実践報告として読ませていただきました。当保育園の抱えている現実において保育に取り組み、地域における日々の多くの問題、保育士不足や人々の風習、古い風習への向き合いなど様々な課題に対峙している園長、保育士さんに先ず謝意を表したいと思いました。テーマ設定で、地域における目に見えない島たる由縁や文化の側面からまとめても良いか躊躇していましたが、次の機会には、子どもたちの目線に寄り添う「思いやりでの保育」について、地域の住民や保護者、更には行政などの方々の協力もいただいて、アンケートやエピソードなどで具体的に検証した研究を期待しています。つまり、研究の目的や設定理由を明確にしてがんばっていただきたいと思います。

評者：馬場 耕一郎

全国の保育所の悩みである保育士不足解消に向け、様々な角度からの取組された事例です。それぞれの保育所がありとあらゆる手段を駆使し、保育士確保に奔走されている現状が続く中で風評に着目されたことは、地域の伝統を重んじている姿勢を感じられます。保育所の運営には、保育を取り巻く地域環境を理解することから始まるということに気づいた点は、地域との交流を活性化する際に大変重要な視点であると思います。地域環境を理解することで、どのような対応が必要かを導き出すことに繋がり、地域との間で悩みを抱える保育所には示唆を与えたと思います。また、地域の環境から絵本の誕生に繋がったことは子どもたちにも地域の伝統を伝えることに繋がったのではないのでしょうか。かわいい子どもたちのために、

地域の方々が協力して頂ける関係を築いている点は大変素晴らしいと思います。是非これからも地域との良い関係を継続して欲しいと願っています。

評者：日吉 輝幸

保育者不足は全国的に問題となっていますが、地方ではさらに深刻な状況であることは、人口減少地域で施設運営を行っている筆者自身も直面している大きな問題です。本研究は、保育者の病気や離職が園の敷地にまつわる迷信風評に由来するものかどうかというものでしたが、誤解を恐れずに申し上げれば、全くの杞憂であるとしか言いようがありません。地域に根付いた宗教行事、神事の類は、古から受け継いできた伝統文化として敬い崇めることも大切ですが、保育者として子どもの保育に携わる者は、物事を客観的にとらえ、正しく判断できる素養が必要であることは言うまでもありません。信仰とは非現実的なものであり、ファンタジーであると筆者は考えています。

今回の研究のように、いわれなき迷信風評を明らかにするために、宗教行事を実践したという報告ではなく、地域に生きる人々の生活習慣とともに、脈々と受け継がれてきた「文化」としての宗教や信仰を、次の世代に継承していく必要性を十分検討していただきたい。そのうえで、保育の一環として取り入れていくのか、あくまでも家庭や地域社会に委ねるべきなのかななどを、園として考察されてはいかがでしょうか。

第15回 保育実践研究・報告集

令和3年3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6-2

アーバンネット麹町ビル6階

TEL 03-3222-2111 (代)

FAX 03-3222-2117